處へ附けるとか、襟を引繰り返してどうするとか、色々と想像に依つて變化して行く事が出來ます。例へば、今迄の羽織が着物になるとか、綿入の綿が無くなつて單衣物になつたりして、隨分奇天齋正一の手品のやうなことが出來ますが、それも材料があるからです。かく想像は材料に依つて出來るのであります。

(三)想像の形式　又形式と云ふのは、今迄着物で着たから今度は羽織にしやうとか、或は羽織にはならぬから一層解いて仕舞つて蒲團にしやうとか、或は又染變へて裏にしやうとか、いろ〳〵と其の出來上る形狀に就いて考へることです。これは御婦人のなさる裁縫のことを例に引いたのでありますが、想像は何でも其通りであります。畫家が畫を描くのでも、材料を多くの經驗から取り、あそこの山のどういふ所を描きあそこの川のかういふ所を加へると云ふやうに、材料に依つてその出來上りの形式を考へてゆくのです。その材料の方には限りがあります。即ち必ず自分の經驗の中から取るより外は無いのです。如何なる想像にしても見たり聞いたりした事柄の中からその内容を取らなくてはならぬのです。併しながら形式と云ふ方のは、何等の制限を受けることなく、自由自在に働きを現はすことが出來ます。例へば、着物でも切つて小さいものにして仕舞ふことも出來れば、丸いものにすることも、三角のものも四角のものも出來ると云ふやうに、その形式は自由自在にすることが出來ます。それゆゑ材料には限りがありますけれども、形式は人の心の働きに依つて勝手になるのであります。そ

こが人間の偉い所であります。一つの材料で唯一つの物より外には現はすことが出來ないと云ふやうなことであつては、人間と云ふものは存外詰らぬものです。併しその一つの材料を色々な形に用ゐることが出來る所に人の價値があるのです。此一つの白墨でも、若し繪の描ける人が用ゐれば自由自在にいろ〳〵の繪を現はすことが出來ます。かう云ふやうに、人の心の働きの中に形式上の自由を有つて居るのであります。

(四)想像作用に於ける分解と結合　次に想像の働きを分析して見ると、分離することゝ結合することゝ、即ち、物を分つて新しい觀念を作ることゝ、結び合せて新しい觀念を作ることゝの兩作用から出來て居ます。先に繪師の例を擧げましたが、もう一度その繪の例に就いて申しますと、畫家が繪を畫くに、例へば、富士の景色を描くにしても、その儘の景色を描いたのでは面白くない。それ丈けならば寫眞の方が餘程宜い。繪師の畫く景は寫眞とは違ひます。確にその中に繪師の想像が這入つて居つて始めて面白いのです。眞の繪師の貴い所は、此天地間に無い美しいものを想像に依つて描いて見せる點に存するのです。然らば畫師はどうしてかゝるものを畫くかと云ふと、例へば、前に言つたやうに、山はどうも富士の山ほど好い形のものは無いから自分の畫く繪には富士の山を土臺にしやうといふやうに、先づ自分の經驗から富士の山を分離して想像の材料とするのです。それからまた松は松島で曾て見た松ほど美しいものは無いといふやうなことから、此處へあの松を持つて來て加へやう、日

の出の景色は先年二見ヶ浦で見たのが最も宜いからあの景色を持つて來やう、船は田子の浦で見たのが宜からつたから、此處へ畫かうといふやうに、方々から自分の經驗した材料を集めて來るのです、これには先づ全經驗の中から、山とか松とか船とかいふものを分離せねばならぬのです。かく、一旦分離した多くの材料を、自分の意匠に從ひ再び集めて、一つの新しい立派な繪が出來るのです。諸君が物をお考へになるのも皆さうでせう。例へば、文を作るにも、普請をするにも皆前の經驗からいろ〳〵と材料を取つてお出でなさるでせう。若しこれまでの經驗で足らぬと思ふ時は、更に經驗を積むのです。卽ち自分の家を建てやうとなさる時には、他所の家を見にお出でなさるでせう。又宿屋を開業する時には、必ず他所の宿屋を見てから後にするでせう。開業した後でも、改良を計るものは、主婦なり主人なりがお客になつて他の宿屋に泊つて見て、そこで此の點は京都のやり方が宜いとか、彼のやり方は大阪が發達して居るとか云ふやうに、宜いと思ふ所を引き拔いて自分の所に集め、さうして完全な宿屋を造らねばなりません。つまり初めに經驗した、その經驗から材料を引き拔いて新しい想像を組立てるのです。此作用を能くする人は、何をしても新しい事を考へ、始終改良進歩して行くことが出來るのです。商賣をする人でも、學校の先生でも、宗教家でも、すべて自己の經驗の中から善い所を引き拔いてそれを取つて使つて行くから段々進歩するのです。然るにさういふことをせず、毎日々々同じことをくりかへして居つて少しも改良を圖らぬ時には、自分は好い積りで居りましても、

外が進歩して來るから世の中に後れるやうになるのです。殊にお客を取扱ふ商人などは、さう云ふことには絶えず注意して居らねばなりませぬ。この外婦人が家を治めるのも、裁縫をするのも、料理をするのも、皆同じことでありまして、同じく經驗を基とし、之を分離結合して新しい想像を畫き、之に依つて進歩することが出來るのであります。

第二節　想像の種類

(一)受動想像　想像の種類は之を働きの上から分けることも出來ますし、又目的の上から分けることも出來ます。先づ、働きの上から想像を分けますと、受動の想像と、發動の想像とにすることが出來ます。受動想像と云ふのは、自分でごういふ觀念を作り出さうなどゝいふ考なく、自然にいろ〳〵の經驗が分離結合されて出來る想像をいふのです。子供が幼時に悧巧で色々の面白い考を述べるのは、大概受動の想像に基くのであります。教育の書物などに、子供は想像の熾なものであると書いてありますが、それは發動の想像では無く、全く受動想像であります。發動想像の方は、高尙な働で、餘程經驗の進んだ者で無くては充分に現はれませぬ。之に反して、受動想像は子供の幼い時に盛んに現はれます。

(二)幼兒の想像　子供の想像に就いては諸君も色々の經驗をお持ちでせうが、私も多くの例を持つて居ります。私の家の一年二ヶ月の子供が、ヨチ〳〵歩きながら臺所に行き、女中が洗つて乾して置い

た里芋を取り、ポッポ／＼と云つて持つて來ました。何のことかと思つてよく見たら、その芋は親芋に子芋が着いて、丁度玩具の鳩のやうな形をして居ました。かやうな想像は吾々には思ひも寄らぬ事で、假令吾々が之を見ても、誰しも鳩とは思ひませぬが、子供は之を見て一寸した形の類似から鳩と云ふことを思ひ出したのです。それから又、四歳位の男の子が、蝙蝠傘の乾してあつたのを見て、其の下へ這入り四つばいになつて頭を出し、坊はマイマイツブロ(蝸牛)になつたよと言つたものがありました。これは蝙蝠傘から蝸牛の殼を思ひ付いたのでありませう。さう云ふことは子供の時は別に思慮せずにすぐに出て來るのです。是を悧巧だとか天才だとか申しますが、それは餘り譽めるほどのことではありません。子供の天性としてさう云ふことの浮んで來るのが當り前であります。是等はつまり皆觀念聯合から浮んで來る想像であります。氣の利いた子供は、チョッと人が何か云ふとすぐその後を附けたりするものです。例へば、春と云ふ下女があつて、奥さんが春や／＼と云ふと、「春は來れども花咲かず」と云ふやうな類です。之も一寸聞くとその頓智に驚かされるのですけれども、春と云ふ所から聯合作用で「來れども花咲かず」と云ふことが出て來るので、全く受動的に現はれるのです。

(三)洒落と地口　大人の間に行はれる地口洒落などの滑稽も、多くは受動的自發的の想像です。一體東京の人は洒落を云ふことが多いのです。然るに田舍の人は子供の時から始終眞面目な天然にばかり

接して居るから、洒落などには慣れないで、時としては洒落を眞に受けて怒るやうなこともあります要するに洒落も受身の想像から出て來るものが多いのであります。斯う云ふ例は擧げると面白いことが澤山ありますけれども、時間が取れるから略して置きますが、諸君が考へて御覽になれば、各自の子供さん方の中にも今話したやうな例は澤山ありませう。子供の時に先生や御母さんからお伽噺を聞く時には、此働きが盛んに行はれるのです。併し想像の性質が變つて來ると、もうお伽噺では滿足しない。ナニ狐が物を言ふものか、鷄が話をするなんていふのは嘘だと言ふやうになります。子供は受動想像の盛んに働く間丈けお伽噺などを眞面目に喜ぶものです。

(四)發動想像　發動の想像といふのは、チャンと考を有つて組み立てるので、學問上の言葉で言ふと意思が加はつてする想像です。先刻の着物の仕立に、積りをするといふのは卽ち此の想像でありまして、是は一定の目的を立てゝいろ／＼考へて組み立てるのです。先づ段々暖くなつて來るから綿入ばかりではいけない、袷衣を拵へなくてはならぬ、單衣をも拵へなくてはならぬといふやうに、先づチャンと自分の目的の考があつて、それから色々の物からアッチを取りコッチを取りして、之を組み合せて一つの仕事が出來るのです。それ故發動想像はナカ／＼子供の時には出來ません。大人でも經驗の乏しい者や練習の足らぬ者はとても充分なことは出來ません。眞に立派な發動想像が働くのは、女ならば通常三十以後、男ならば四五十の頃です。政治家でも實業家でも、眞に偉い事をやる人は、其

位の年齢から後の人で無くてはなりませぬ。併し、チョッと奇拔な事をするのは青年の時が好いのです。空想が爛んで男女共に小說などを喜ぶ時であるから、實際の經驗無しにいろ〳〵の考を組み立てるのです。それ故それを實行すれば存外警拔のことになるが、その多くは失敗するのです。要するに、眞の實行的想像の働きは可なり年を取つてから出來るのです。

(五)科學的想像　次に目的の上から想像を分けて見ますと四つの種類があります。第一は科學卽ち學問上の想像であります。學問をするにも想像が必要であります。現に諸君が私の講義を聞いてお解りになるのは、諸君の心中に想像を描いて居られるからです。卽ち今講師が話したのはかう云ふことであらうと云ふやうに、私の言ふ事を諸君が心の中で過去の經驗に照して解釋して居られるのです。私は一つ事をお話して居るのですが、此處に諸君が三百人居られるとすれば、其三百人の諸君は皆別々の解釋をして居られる譯です。そこが人間の價値のある面白い所であります。若し三百人が同じやうに解釋し理解せられるなら、機械で心太草を突出すと同じで、人としての價値は甚だ乏しい。婦人は婦人、老人は老人、若い人は若い人、商人は商人と云ふやうに、私の講義を別々に解釋なさる所に個人としての價値があるのです。卽ち學問上の話を聞いて、之を理解するのには受動想像が必要であります。又書を讀んでも、たゞ讀んだのみではよく分るものではない、自分の經驗から、是は彼の事であらう、彼は此事であらうと、自分の經驗と書に書いてあることゝ一致して初めて分るのです。昔の

人の書いた物にもあるやうに、一の飴を見ても、曾子は之を持つて歸つて阿母さんに上げたら宜からうと思ひ、盜跖は之を溶して戸の敷居に流すと音がせぬやうに開けることが出來るから、さうして窃盜をしたらよからうと考へる。さう云ふやうに同じ事に就いても想像の仕方が違ひます。それから又新しい學說を立てるとか、器械を發明するとかといふことは、全く發動想像から出來るのです。此頃は御婦人方の中にも色々な發明をなさる人が出て、日本も大變賴母しくなつて來ました。私はいつも高輪の東禪寺横町から電車に乘りますが、其横町に一森といふ家があります。其の家の婦人が、一森式といふ蒲團椅子を發明したのです。是はその婦人が自分の阿母さんが煩つて居て坐るのに腰が痛くていけないといふので、どうか樂にお坐はりなさることが出來るやうにと色々考へて發明したのださうです。この蒲團は坐つて居る時にもよく、寢轉ぶ時にもよく、誠に便利なものださうです。かやうな物を全く婦人が自分で考へ出したのです。詰り御母さんを樂にして上げやうと思つて、色々と經驗を分離結合して創めたものでありませう。かやうなわけで發明と云ふものは悉く想像に依つて出來るのです。子供を發明家にしやうと思ふならば、幼い時から想像の力を養つて置くやうにせねばなりませぬ。

(六)美術的想像　第二は美術上の想像です。是は前に繪の時にお話をしましたから詳しく云ふ必要はありませんが、何でも畫の妙味と云ふものは、今迄世間に無いものを想像に依つて描き出す所にある

のです。音樂でもさうです。同じものばかり繰返して居ては面白くない。そこで多くの經驗から、彼の聲を此に應用しやうとか、誰の曲の何處を彼處に用ゐやうとか、或は又此處は勇壯にやらねばならぬから誰の曲に倣はうとか云ふやうに、想像で新しいことを作るのです。その外建築でも裝飾でも皆かゝる美術上の想像から出來るのです。此處の天井に天女が描いてありますが、是は全く想像から出來たものであります。如何にも自由自在の働がよく表はされて居るばかりでなく、人間以上の有り難いものであるといふ感じを與へるのであります。宗教上の畫では、諸君も御存じでありませうが、私は是ほどの美しい莊嚴の畫は見たことがないと思ふのであります。それは狩野芳崖と云ふ人の描いた觀音樣です、此の畫は美術學校の寶になつて居ります。其の畫像は、觀音樣が空中で口の長い瓶のやうなものから甘露を垂して居られますと、其下に嬰兒が有難いやうな狀態に掌を合せて甘露を受けて居るので、之れに對すると何とも言へない莊嚴の感が起ります。佛教を信じない者でも、彼の繪に對しては恍惚として自然に有り難いと云ふ感が起るでせう。これは全く狩野と云ふ人の想像の力で今迄世界に類の無い者を描いたのです。かう云ふのが即ち美術上の想像の貴き所以であります。平凡の畫工は、昔の人が畫いた通りのことを畫いて居るのです。それですから、昔創めた人は偉いけれども、後の多くの者は他の眞似をして行くのです。さう云ふのは所謂樣に依つて胡盧を畫くと云つて、今迄の人のやつた通りの型で瓢簞を描いて居るのです。それですから美術上の面白いといふ物は皆想像か

ら出て居るのであります。

(七)實踐的想像　第三は實踐上の想像です。是は美術の如く唯人間の感情を滿足させれば宜いといふのではない。美術上のものは人の情を滿足させて美しいと云つて喜ばせればそれで宜いのであります。いくら莊嚴の觀音樣を見ても、自分が畫家にならずとも宜い、只々美しい觀音樣だと思つて其美しさに打たれゝば足りるのであるが、實踐の想像はさうでなく、想像したことを實際に行はなければならぬのです。頭に描いたことが着々行はれてゆくやうなものでなくてはならぬのです。實踐上の想像に二つあります、一は道德上の想像です。道德のことも皆想像に依つて前に考へて置いてそれを行つてゆくのです。例へば、學校で色々と修身上の事を教へられても、一つ〳〵是れが皆直ちに出來るものではない。阿母さんが病氣の時には斯うするものであるとか、御父さんが身體が惡い時には斯うせねばならぬとか、或は戰になつたら斯うせねばならぬとか云ふやうなことは、豫め心の中で想像を描いて置いて、その場合に臨んで實行せねばならぬのであります。これは道德を教へるには大切な事であります。從來學校の修身教授で、いくら想像に描いても實踐の出來ないやうなことを教へることが多かつたのですが、それは間違つて居ります。有名な大阪の「お富」の話のやうに、强盜が這入つて兄さんを殺さうとしたから、お金が入るなら之をあげるから兄さんを助けてお呉れと言つたと云ふやうなことは、滅多にありますまい。斯う云ふ例を擧げて褒めると、終には家へも强盜が這入つて

呉れゝば宜い、さうすると私も其の通りにして兄さんを助けると云ふやうなことを考へるやうになります。それを實踐されては誠に困る次第であります。或は夫の死んだ後に獨身で居るのが貞女であると言つて敎へた爲めに、女學校などで嫁に行くといふことが分らぬ中から、私は肺病の人の所へお嫁に行くといふから何故かと聞いたら肺病の人は早く死ぬからさうしたら一人で貞女になるのであると言つたといふことです。かう云ふ事は想像に描いてもなかなか實踐は出來ず、又之を實踐されては堪りませぬ。終には日本人が無くなつて仕舞ひます。卽ち女が皆肺病の人の所へばかり嫁に行くなら、だん〳〵人が死んで仕舞ふでせう。是は大變危險のことです。それですから、道德上の事は、いつでも其考へがチャンと實行の出來るやうな事を敎へねばなりませぬ。宗敎上のことでもさうです。只々空想にばかり馳せて、實際に出來ないやうなことを敎へてはいけませぬ。何時でも說敎を聽いたらば、家に歸つて直ぐに實行の出來るやうなことを敎へるのが必要であります。それからもう一つは、事業上の想像です。例へば、商業上の商略を考へるのは一の實踐的想像です。今は株が下つて居るが、此株は後來必ず騰るから、今買つて置かねばならぬといふやうに考へるのは、空想では無い、實行の出來る想像であります。又私達が家を建てるにしても、此室はどう裝飾をしやうかと云ふやうな事は、詰り將來の事を考へて居るので、一種の想像です。又日本の建築上大なる發達を促すには、西洋の建築などいろ〳〵調査して、新しく描いた想像の實現に基くより外はないのであります。是等も實踐の

出來ることを想像して着々と行つてゆかねばならぬことです。

是等は一個人の話でありますが、國家の計畫などになると、一層複雜なことがあります。以下お話することは皆さんも必ず吃驚なさるでありませうが、私も初めて聞いた時には實に驚いたのであります。それは參謀本部の話です。參謀本部の秘密に涉ることは勿論私共の知る筈はなく、假令知つて居る事も公衆に話すべきことではありませぬが、一體參謀本部といふ所はどう云ふ事をするかといふに、今現在でも參謀本部では絕えず戰の研究をして居るのです。それゆゑ參謀本部に行つて調べれば、例へば、東京横濱の間に汽車がどれだけあり、さうして東京と横濱の間の汽車を皆用ゐれば何師團の兵隊をどれだけの時間に何處に送ることが出來るとか、或は東京師團の兵隊を廣島に送るにはどれだけの時間が掛つてどれだけの車輛があればどれだけの費用で出來るとか云ふことが、チャンと精密に調べてあるのです。何處に馬が何疋居つて、何處に牛が何疋居るとか、何處にどう云ふ材料がどれだけ有るとか云ふこと迄、チャンと調べてあるから、何時でも之に由つて計畫を實現することが出來るのです。若し外國が日本へ攻めて來るとすれば、一國が來るなら何處から來るであらう、二ヶ國が聯合して來るなら何處から來るであらう、三ヶ國ならばどう云ふ風になるであらうとか云ふことを、チャンと想像に依つて研究してあるのです。一體外國の兵が攻めて來て日本に上陸する處は大抵極て居るのです。何處へでも無茶苦茶に上られない。紀州半島とか或は三浦半島とか或は房州とか函館とか、

或は又九州では薩摩に來るとか佐世保に來るとかいふやうに、來さうな所は大概極つて居るのです。さうすれば若し佐世保を突いて來た時には、何處の師團の兵を何處へやるとか、何處の軍艦をどう云ふ風に廻すとかいふことは、平素からすつかり研究してあるわけです。今歐洲の或る三國が聯合して攻めて來るとすればどうするかといふに。三國聯合して歐羅巴から船が來るにはどれ程月日が掛る、さうすれば其間に日本はどれだけの準備をするといふやうなことまで精密に渉つて調べてある筈です。それゆゑ今何處と戰端を開くと云へば、電報一つで直ぐ二十四時間内に出師準備が出來るといふやうにチャンと計畫が屆いて居て、後備の兵も直ぐに繰出すことが出來るやうになつて居るので、その精密確實なことは實に驚くべきことであります。後で金が續かないとか云ふことで敗けるのは兎に角、支度が出來ぬで敗けたとか計畫がぬかつて居て敗けたとか云ふことの無いやうに、すつかり仕度がしてあるのです。併し佛蘭西の參謀本部などでは、なほ細かい事にまで氣を注けて居るさうです。佛蘭西の參謀官が私の親戚の日本の參謀官と一緒に上野の公園を散歩して居た時に、腰掛を指して是は何にするのかと聞いたことがあります。そこで是は腰を掛けるのであると云ひました所が、それは腰を掛けるのであらうが、軍人として貴方に聞くのであるといひます。……軍人でも腰を掛けるものを頭に被るわけにもゆかぬから、その外には分らぬと答へると、それでは貴方に話すが、私の國では公園の腰掛けは皆貨物列車の中に這入るやうになつて居る。卽ち公園の腰掛が兵士を送る時の用に立

つやうになつて居るのである。すべて多くの兵隊を送るには、通常の汽車ばかりでは足らぬことがあるから、貨物列車を持つて來て公園のベンチを入れて客車を作るのである。そこでベンチが幾つ、貨物列車が幾つと云ふことは、平時にチャンと調べてある。それゆゑ公園にある腰掛が一個朽ると直ぐ直して新しい物と取換へて置くのであるといふことであつた。佛蘭西では、千八百七十年の戰爭に懲りて、これ程に仕度をして居るのであります。どうです皆さん、お互に頭の中に參謀本部を拵へて置かねばならぬ筈です、病氣になつたらどうするとか、損をしたらどうするとか、スッカリ戰爭の計畫をして置かねばならぬのです。私共は理屈は知つて居るけれども、中々參謀本部がスッカリ出來て居ない。併しお互に之は是非造らねばなりません。それで日本が強いと云ふのも、是等國家の機關が備つて居るからであります。商賣をするのでも、一個人の家を齊へて行くのでも、チャンと一々細かい所まで行き屆いて少しも足らぬ所の無いやうな計畫を定めて置くことぬ大事であります。

(八)宗教的想像　第四は宗教的想像です。これは科學上・美術上・實踐上のすべての想像を包含して居るのです。例へば、お寺でも會堂でも莊嚴なる裝飾があつて、其處に入ると皆人に美感を與へます。又宗教は人に眞理を敎へることを理想とするのです。好い加減なことを敎へて行くやうでは、迚も宗敎は盛んになりはしませぬ。卽ち非眞理の宗敎は人が信じない。詰り立派な宗敎は常に立派な學說と

一致すべきものであります。又宗教を信じても、それが實踐の出來ぬものではいけませぬ。卽ちそれに依つて安心して世に處して行かれるものでなくてはならぬのです。そこで詰り宗教上の想像は有らゆる物を集めて完全無缺な理想を作るのです。世間では想像といへば直ぐにあれは想像說であるなどと云つて如何にも惡いことのやうに言ひますが、學問上では想像の働きは實に大切であつて、此の働の乏しい人は値打の少ない人であります。

第三節　想像と人生

(一)想像と現實超越　人生に取つて、想像ほど大切な働は少ない。想像の出來ない人は心の働が無いと云つても宜い位であります。若し人類が現實其儘のものであつて今の有樣を超えることが出來ないものであつたならば、人類は實に果敢ない憐れなものであります。今茲に居らるゝ諸君は、岩崎や三井のやうな金滿家では無い。又皆伊藤公山縣公のやうにお稻荷樣と隣合の地位では無い。お互にかういふ人々に比較して見ると吾々の現在の有樣は憐れ果敢ないものであります。諸君はどうか知らぬが私は無位無官で何の肩書も無い。併しながら人として生きて居るのは如何なる値打が有る爲めかと云ふに、自分の考、理想と云ふものを持つて居る。こゝに人としての價値がある。我々は想像力に依つて現實界を超越することが出來る。宗教の貴いのもつまりこゝに存するのであります。如何にしても

人が現在を離れることが出來ないで、たゞ食ふとか、飲むとか、或は位とか名譽とか、いふやうなものに囚はれて居るならば、此の世ほど不公平なものはない、諸君の御存知の範圍にも、隨分詰らぬ人物が存外威張つて居つて、立派な人で窮途に哭くと云ふやうな境遇に居る者もありませう。併し幸にして人には想像力があるから、貧乏な人でも非常な金持に優つた心の愉快を保つことが出來る。又位の無い人でも、位の高い人以上の高尙なる考を持つて超然として愉快な生活を爲して行く事が出來る。人と生れたからには、かゝる働が無ければ實に價値が無い。たゞ食ふ爲に生きて居ることになつて仕舞つて、詰り人生の意義を失ひ、どら犬の生活と何の異つたところもなくなつて仕舞ふ。犬は不斷食つて寢て居つて、泥棒が來ると吠へて、その外はたゞ子を拵へる。それ切りである。人間でもそんなのがあります。何の爲に生れたかの考へも無く、只々其日々々に追はれるやうでは詰らぬことです。

(二)子供の成長を樂む母　それで貧しい中から阿母さんなどが苦辛して子供を育てゝ行くが、何の爲に育てるかと云ふと、其阿母さんの心には子供の前途に就いての愉快なる想像が描かれて居るから、それが刺戟となつて貧苦を物ともせぬのである。私も非常に貧しく育つた者で、私の母は他人の縫物などをして私を育てゝ呉れ、學校にも出して呉れました。すべてかゝる時に母親の心の中にはどう云ふことが描かれて居るであらうかといふに、この子が大きくなつたらば、必ず世の中に出て働いて、家をも起こし國にも盡すであらう、その時はかう、あゝと、いろ〳〵未來の愉快を想像するから現在

の困難に堪へることが出來るのでありませう。つまり現實以上に自分の希望を持つて世の中に處して行くから、よく現在の苦に堪へて行くことが出來るのであります。想像は實に人類に共通の詩であります。この詩を知らぬ人ほど氣の毒の者はありません。現在の有樣計りを見て人を判斷し、現在位置の低い人はえらくない、現在金が有るもの計りがえらい人だと云ふやうに思ふのは、實に憐れな者です。

(三)結婚の標準　若い婦人などがさう云ふことで、たゞ現在好いと思ふ所へ嫁に行けば幸福だらうと思つて金持の家へ行くと、存外大さう不品行な人物で、妾の三人もあるといふやうな譯で、さんざんな酷い目に遭ひ、前の考とは全く反對で、終には着物や道具も剝れて仕舞ふなど云ふやうな例が隨分あります。私の知つて居る者にもさう云ふ目に逢つた者があります。全く掌を反すやうに變つた者があります。それですから、今位置があり金が有るといふのを以て其人を判斷することは間違であります。凡そ人の價値は其人が心の中に描いて居る立派な希望、立派な理想、及びそれを實現する方に向つて進んで行く人であるか無いかといふ點に存するのです。之を見分くる眼識を婦人に持たしめねばならぬのです。それを見ずに、只々其人の身代を見て結婚するのは、是れ金と結婚をするやうなものである、要するに、想像に依つて此現在を超越する所に人間のえらい點があるのであります。

(四)國王と乞丐　斯う云ふ話があります。乞丐が夢の中で王樣になり、又王樣が夢の中で乞丐になつ

たが、これは孰れが幸福か分らぬ。一方は覺めて居る時には王樣で、皆ヘイ〳〵云つて御辭儀をするから大威張であるが、夜寢ると乞丐の夢を見る。卽ち目が覺める迄は犬に吠へられたり人に罵られ、子供に瓦を拋げ付けられたりする。さうして魘されて目が覺めて見ると國王である。然るに一方は乞丐であつて、晝の間は人から卑められて居るが、寢ると直ぐ王樣になつた夢を見るのです。そこで大勢の家來を連れて、金殿玉樓に居り、娛しく暮して居る。斯うして見ると、どつちが幸福で、どつちが不幸だか分らぬでせう。夢は一種の想像ですが、想像の力はそれ程のものです。それゆゑ想像さへ立派に形成せられ實現せられて行けば、人間の幸福は保たれて行くのであります。

(五)想像の樂と現實の樂　次は想像の樂の話です。是はどなたでも持つて居られることが必要であります。人間は現在の樂と云ふことよりも、想像の樂を多く持つて居る人の方が餘程高尙なものです。例へば、酒を飲まなくては樂がない、藝者を揚げ三味線を彈いて騷がなくては樂しくないと云ふ人間は大概人品の低い下等なものであります。想像の樂といふものは、例へば、自分がそんなことをしなくても色々と心の中で想像を描き、或は景色のことを考へ、或は美術上の事を考へ、或は自分の未來のことを考へ、或は學問のことを考へ、或は宗敎のことを考へるなど、其樂と云ふものは存外豐富なものであります。何事でも實際に當つて見ると却てつまらぬものです。是から時候が好くなつて來るから花が咲く、小金井の土堤に往けば櫻が雲の如く爛熳と開いて實に見事である。行つて見たらば愉快

だらうと想像する。それは想像としては實に愉快である。所が行つて見ると存外詰らぬことが多いものである。例へば、あの友達と一緒に行つたらさぞ面白からうと思つて行くと、途中で喧嘩して不愉快な思をするやうなことがある。その外或は雨が降つて來たとか、腹が痛くなつたとか、いろ〳〵愉快に反對することが出來るものである。故に想像と現在とを對照して見ると、現在は存外いかぬものであります。又人物にしても、遠くから想像して居る方が餘程麗はしいものである。來て見れば聞くほどになし富士の山釋迦も孔子もかくやあるらん」で、富士の山富士の山と云ふからどんなに好いかと思つて登つて見ると汚ない鐵糞のやうな物がゴロ〳〵轉つて居る山である。たゞ遠くから眺めたり、話で聞いて居る方が餘程立派である。すべてさう云ふもので、想像の樂は麗しいものであるから、現在に樂を實行しないで、想像に任して置くことが出來るやうな人ならば、其人は確かに氣品の高い人である。故福澤先生は、遊女の事でも、藝妓社會のことでも、博徒社會のことでも、有らゆる人生の下等な娯樂界をスッカリ知つて居られたさうです。そんなら先生がそんな所へ行かれ、そんな人々と交際されたかといふと決してさうではない。皆他人の話や著書から想像されたのである。實際は謹直な先生であるけれども、スッカリ是等の事情を知つて居られたのはえらいものです。婦人の小說を讀み、歌を作るのでも、實際自分がさう云ふ事に出遭つたことはなくとも、想像に依つて察して仕舞ふのです。即ち人の樂の中に想像に依つて間接に他人の經驗を知るのは大事なことであります。すべて

人は想像の樂を多くして、其人品を高くせねばなりませぬ。

(六)想像の利　今お話した所では、想像と云ふことは非常に宜いもので、何でも利の多いやうに思はれますが、併し又利の多いものには害が伴ふものであります。此所に先づ利の方だけを擧げますと、ものを理解するには想像がなければなりませぬ。想像の乏しい人は十の事を話しても五つ位しか受取れない。然るに想像に富んで居る人は、少し話してもよく理解することが出來る。又發明などは何でも新しい事を考へ出す所の構成想像がなければ出來ません。他人の思ひ遣りをするのも想像が必要です。人に接するには其の人の身の上に就いていろ〳〵と想像して見なければ思遣りは出來ぬものです。人が何事も考へずにたゞ金を溜めるとか私利私慾を謀るとか云ふやうでは、決して他人に同情するといふことは出來ない。文學の書を讀む人はさう云ふ想像がよく働くから人の樣子を見て直ぐ、これは困つて居るのだ。是は斯う云ふことだと云ふことが分るから、よく思ひ遣りをすることが出來るのです。それから又計畫をするといふのでも、想像が働かなくては出來ぬ。前に說いた參謀本部で軍事を計畫するのでも、諸君が家を建て、着物を縫ひ、商賣をし、繪を描く等は皆、想像に依つて計畫を建てゝするのであるから、此點に於て想像は生活上最も大切であります。

又理想を立てゝ、現在の有樣よりも優つた圓滿の境涯を想像して、之に憧れて進むのは、人として最も大事のことであるが、是れ亦想像から出來ることである。例へば、神佛の如きも皆理想のものであ

ります。人間の現在に實現せられて居るものでなく、未來に於てさう云ふやうになりたい、さうなれば圓滿であると云ふ所の理想が神であり佛であるのです。かゝる理想も想像に基くのですから、想像の大事なことはいふまでもありません。

(七)想像の害　然るに其の反對に、想像の害も澤山あります。第一には、妄想といつて道に背き道理に背いた想像があります。斯うやつて人の物を窃んでやらう。斯うやつて人の妻を奪つてやらうと云ふやうな類は、皆妄想であります。さう云ふことは矢張り想像から來るのであるけれども、非常に惡いことであります。盗跖は飴に依つて他所の家へ音のせぬやうに入つて行かうと云ふことを想像したのであります。すべてかゝることはやらうと思へば出來るのですが、さうすれば大さう自分の德を害し、自分の品位を損し、或は法律上の罪人にさへなるのであります。それから又空想と云ふのは、實際に出來ぬやうなことを考へるのです。青年の頃には、自分の位置境遇及び社會の關係など云ふことを考へずに唯洋行したいと云つて、いろ／＼と想像を描き、無茶苦茶に之を實行しやうとするやうなことがあります。若し之を實行すれば非常に失敗するのであります。併し又空想と認められた事が次第に實現せられて、大に世の進歩を助けることもありますから、青年の頃の空想は一概に排斥すべきでもありません。兎に角、實行の手段なき想像を空想といふのです。もう一つは邪推です。是はマア嫁と姑との爭とか、或は夫婦の間に起る隔りなど、いづれも之に基くことが多いのです。例へば嫁がチョッ

と此方を向くと、姑がアレは私を睨んだのであるといふやうに考へ、或は又偶に姑が嫁を褒めると、アンなことを云つて私に當てつけるのであらうといふやうに、ねぢれて考へるのです。すべて互の間にかう云ふ風な惡い想像が働いたらもう駄目です。とても麗はしい交際を保つてゆくことは出來ません。多くの場合に世の中の人は自分で地獄を作るのです。即ちいろ／＼の邪推からして自ら己を苦しめ世をはかなむやうになるのです。其の外斯うやつて火付をしやうか、或は斯うやつて詐僞をしやうかといふやうに、惡計を廻らすのも矢張り想像でありますし、又實際に無いことを作つて人を陷れること、例へば、新聞などに何處の家庭にどういふ不和があるとか、不體裁なことがあるとか云つて、有りもせぬことを作つて人を讒搆するのも、想像から起るのであります。それゆゑ想像は大切な働であるけれども、一面には非常な害を爲すものであるから、其惡い方を防いで良い方ばかりを進めて行くやうにせねばなりませぬ。

第四節　想像の教育

(一)生理的要件　次には想像力をどうして教育するかといふことを說きませう。是も注意や記憶と同じやうに、生理的・物理的・心理的の三方面から教育せねばなりません。第一、生理的に想像を養ふことが大切であります。すべて人は身體が惡くて元氣の盛んでない時には、大概悲觀的な想像を起すもの

です。例へば婦人などが病氣になると、「私は斯んな病氣にかゝつたが、若し之が基で離緣になりはせぬだらうか、離緣になつたらば人に逢ふのも羞かしいが、その時はどうしやうか」と云ふやうに、つまらぬ事にまで苦勞をするやうになるのです。又男であれば、「己は今斯うやつて病氣で居るが、ひどくなつたら妻子が嘸ぞ困るであらう、若しも死んだら跡はどうなるであらう」とかいふやうに、身體が惡い爲めに悲觀的の考ばかり起るのであります。併し之に反して、身體が健康であれば、「今は斯うやつて困つて居るけれども、ナニ今に立派にやつて見せる」と云ふ意氣を以て、積極的の想像を描くやうになつて來るものです。想像は只身體の好い惡いばかりでなく、たゞその態度に由つても大に異るものです。佛敎で丹田に力を入れると云ふのは、臍の下にウンと力を入れることで、之は誰にも大切な事であります。男でも女でも氣を落付ける爲めには、丹田に力を入れることが必要であります。それには肺臟に空氣を一杯に入れると横隔膜を押しますから、下腹に力が入るのです。今日の衞生でも深呼吸を奬勵いたしますが、是は丹田に力を入れるのと同じことであります。すべて深呼吸をなし丹田に力を入れゝば、心が落ち着いて立派な想像が出來ます。又人は愉快なことがあると自然に、肩が張つて胸が開けて來るものです。それゆゑ肩を張り胸を張つて居れば、自然に心が開豁になるのです。子供などでも何か嬉しいことがあると、喜んで胸を張つて歸つて來る。又相場師などが、今日は何萬圓儲かつたといふやうな場合には、全身が擴がつてにこ〳〵して歸つて來るでせう。何萬圓儲か

つたと云つて縮こまつて歸つて來るものはない。愉快の情が內に働くと、何時でも斯ういふ態度になつて來るものです。之に反して、何か不愉快のことがあつてくよ〳〵して居る時には、自然に首が下つて來て全身が縮まるものです。さういふ時に注意して御覽なさい。肺臟には空氣が入つて居らず、腹がペコペコになつて居るものです。尤も姙娠の時は別問題でありますが……道を歩いて居ても、此人も吉いことがあるな、此人は凶いことがあるなといふことは、一見して分ります。若い人が頭へコスメチックでも附けて、愉快にニコ〳〵笑ひをして行くと、ハ、アこれは近日結婚するなといふことが直ぐに分る。それから下を向いてショボ〳〵して歩いて往くのを見れば、あれは主人の金でも使ひ込んで叱られたなと云ふやうなことが察せられます。すべて惡いことがあると自然と態度が下を向くやうになつて來るものです。卅七八年の戰爭の時分、東鄕大將がバルチック艦隊を全滅したといふ報告を讀んだ時には、誰でも皆胸を張り腹に力を入れて愉快〳〵と自分が勝つたやうな態度を取つたのです。首を垂れ手を下げて萬歲〳〵などいふ人はない。學校や家庭で姿勢を正すと云ふことは、生理的に積極進取の想像を起さしめる爲に必要であるのです。然るに日本の婦人は、外を歩く時に、常に著物の前を氣遣ひ、風でも吹く時には殊更內股に屈んで歩かねばならぬやうになつて居るのです。そこで止むを得ず家鴨の歩くやうにお臀が體操をするといふやうになつて來るのであります。始終斯ういふ姿勢をして居るやうでは、とても積極的想像の出來るわけはありません。そこで動もすると悲

觀的消極的の想像ばかりを描くやうになるのです。それですから一般の婦人の生活狀態を改良し、姿勢を正し、立派な體格を作るやうにすれば、生理的に良き想像力を養ふことが出來ませう。

(二)物理的要件　次に物理的に想像を養ふことにもよく注意して置くべきであります。家庭が始終貧乏で狹い小さな家に生活して居ると、その子供の考へがどうしても小さくなつて仕舞ふものです。それですから、時々は大きなお寺のやうな處或は廣い場所に連れて行つて見せてやるが宜いのです。其處へ行くと子供の考が違つて來ます。或は又山の上に登つて廣い所を見せてやつたり、海を見せてやつたりするのが宜いのです。さうすると子供の考が大に違つて來るものです。人は誰でも境遇に依つて其想像が變つて來るものです。是れは諸君も經驗してお出なさるでせう。そこで私の敎育主義は、子供に水泳をさせる時に、鎌倉の海岸で泳いで居ても、此海は太平洋の一部である、それ故自分は世界第一の大きな海で水泳をしてゐるのである、或は富士山に登らせて、是は本土第一の山である、自分は今本土で一番高い處に登つて居るのであるといふ事を考へさせるのです。かやうにして何でも第一の經驗をさせて置くと、了簡が廣くなつて、コセ〳〵したことを考へないやうになり、且つ今後山や海を經驗しても驚かぬやうになるものです。お寺などが大きくて通常の家と違ふのは、つまり其處へ往くと、心持が違ふやうになる爲めでありませう。それゆゑ實用上からは大きい家は必要がないやうでありますけれども、精神的敎育的には尤も必要であります。薄暗い所で起る想像、暗黑の所で起る

想像は、明るい所で起る想像とは違ひます。薄暗い所では消極的の想像が起り、明るい所では積極的の想像が起る傾があります。其等は詰り物理的に想像を養ふ上に注意すべき點であります。

(三)心理的要件　又心理的に想像を養ふ方法は多くあります。例へば、子供が話を聽いて之を理會する場合にも、想像が働かねばならぬのです。物事の比喩などは全く想像です。それから推察の働も想像で出來るのです。繪などを見せて、此人はどうして居るのであらうかとか、或はどう思つて居るのであらうかとか云ふことを考へさせるのは、想像を働かせる爲めに良い練習です。それから子供自身に何かお話を作らせたり、作文をさせたりするのも、想像の養成上必要です。小說を讀ませることも想像力の練習に大切であります。併し無茶苦茶に青年男女に小說を讀ませるといふことは、敎育上宜しくないことですから、親なり先生なりが先きに讀んで、適當なものを選んで讀ませてやるが宜いのです。或る子供には讀ませて宜いものでも、或る子供には宜くないと云ふやうなものもありますから、讀物の選擇には大いに注意せねばなりませぬ。それから空想や妄想などは抑へ付けて出ぬやうにしてゆかねばなりませぬ。それはどうすれば抑へ付けることが出來るかと申しますれば、實事實物に多く接しさせるに限ります。學校で理科を敎へ實業を課するのは、一つには空想や妄想を抑壓する爲めであります。是等のことは空想では到底出來ませぬから、之を課すれば自然と實際を重んずるやうになるのであります。

第九章　概　念

第一節　概念の意義及び過程

(一)思考作用　唯今まで御話いたしました事柄は、智の働きの中でも簡單な部分であつたのであります。記憶としたが、今日からお話しするところは、漸々と込み入つた働きになつてまゐるのであります。記憶とか、想像とか云ふことゝ、今日からお話する思考作用とはどう云ふ點で違ふかといひますると、それは第一に私が今までお話しましたことは物を見たとか、聽いたとかそれを覺えて居るとか、思ひ出すとかいふ單一の働であります。假令想像のやうに種々の經驗を集めるにしましても、詰り一つの觀念を作り出すに過ぎません。それゆゑ今までの働はすべて單一の心の現象に關して居つたのです。然るに是からお話しますことは、人の考へる力――思考力――といふことでありまして、唯一つの現象ではなく、二つの現象の關係を定める働であります。すべて何か物を見まして、是は何物であると云ふことを知り、或は是は斯うなくてはならぬと云ふことの判斷をすること、その外總て事物を悟り事物の意味が分ると云ふ働きは皆思考作用であります。此の働は人として大切なものでありまして、人と

動物との違ふ點は主として此處に存して居るのです。人には思考すると云ふ働が大層發達して居るが、動物には此力が殆んど缺けて居るのです。それゆゑ此の働は智力の中でも最も高い大切な働きであります。そこで思考といふことは如何して出來るかと云ふことを考へて見ますると、よほど面白いのです。例へば私と諸君とは身體も精神も各孤立して居る樣でありますけれども、實は互に關係して居るのです。少しも他に關係なしに自分ばかりで此の世に存在すると云ふ事は出來るものではありません。世の中の事はすべて關係に依つて成り立つて居るのです。唯人々互の關係ではなく、すべての事が關係で成り立つて居るのです。例へば、私共斯うやつて空氣を吸うて生きて居ます。又毎日、三度々々物を喰べて居ります。それから衣服を色々の材料を以つて作つて着て居ます。世の中の事物は悉く他と關係があるのです。極端に言つて見ますると、私共は地球に引かれて居る。地球が逆樣になつても落ちないと云ふのは詰り、地球に引力があるといひますけれども、私共も亦地球を引つ張つて居るのです。我々が此處で力足を踏んで壓せば地球も動いて居る道理であります。又私共がハーッと息を呼く時には、それだけ空氣が震動して風を起す譯であります。私共に取つては風といふことは判りませんけれど、小さい蚊か何か飛んで居れば、我々の呼く息でも大風が吹くといつて吃驚して逃げて行くでせう。

かういふやうに我々は關係を離れることは出來ないのです。そこですべて物事の係り合ひを見出し

て往く人はえらい人であります。さういふことをよく考へる人は、宗教でも道德でもすべての事がよく分つて、自分を進め世を進めて往くことが出來るのです。例へば、道德のやうなものでも、自分が他の人々のお蔭で生きて居る、所謂一切衆生の恩に依つて此世の中に生活して居るといふことをよく〳〵悟つた人は、確に道德界のえらい人になれるのです。然るに己ればかりが強くて、甚しきは己れが獨りで世界のすべての事をして居るやうに考へて、何でも自分を本位にして來ますと、我儘一杯のことをして親兄弟の事をも關はぬやうになるのです。ちよつと近頃大變に流行る……というては惡いかも知れませぬが、情死といふやうなことも、關係の見方が足らぬか、或はすべての關係を忘れて仕舞ふか、或は知つて居つても斯樣なことを眼中に置かずに唯自分獨りを中心にしたところから起つて來るのであります。宗教上の事でも其の通りで、佛樣と自分との關係、神樣と自分との關係をよく知れば、宗教心は盛んに起るのです。斯くの如く、天下總てのことは皆關係で出來て居るのです。卽ち人であれば夫婦の關係、親子の關係、兄弟の關係等があつて此の世に立つことが出來るのです。又物理學とか化學とかといふ學問は何であるかといふに、是等はつまり物理上から物の關係を知り、化學上から物の關係を知るに過ぎぬのです。商人にしても政治家にしても、すべての實例は何れも皆此關係です。今日本では何の價がいくらである、然るに何處ではいくらで大變廉い、さうすると之を日本に輸入すれば必ず儲かるといふやうなことは、互の關係を知つて始めて出來ることです。かく物事の

關係を知るのは皆、思考作用であります。其思考作用の中、今からお話するところは、「概念」といふことであります。其外にまた「判斷」・「推理」といふやうな働きがあるのであります。それは漸々と進んでお話して行きませう。

(二)着物の整理と知識の整理　先づ概念と觀念といふことに就いてお話をいたしませう。御婦人方が澤山お出になりますから、御婦人に緣故のある事を以つて說明を試みませう。私はよく存じませぬけれども、一般に申すところに依りますと、御婦人方は着物を大變に大切になさるものであつて、着物が出來ることを非常にお喜びになるさうです。尤も何人でも着物の出來ることを厭がるものはないでせう。裸體で居つても宜いといふものはまあ少いでせう。……夏なら知らぬこと。……併し夏でも外へ出るには困りませう。……特に若い御婦人などは着物を非常に大切になさつて、殆んど生命の次ぎ、或は生命と同じ位、時によると生命よりもつと大切になさるさうです。火事でもあつて燒けさうになると、其着物を燒くまいと思つて、火の中へ飛び込んで仕舞ふといふやうな人さへあるといふ事であります。私は牛込に居りましたが、神樂坂といふ處に三孫といふ質屋がありました。質屋といつても御存知ないかも知りませぬが……といつて私も實はよく知りませんけれども、兎に角さういふ處があつたのです。ところで其家が川柳に上りました。今そのわけを一寸お話いたしませう。牛込の神樂坂にはぞろ〳〵と綺麗な着物を着て、その左の褄を取つてあるく女が居ります。かう申しましたら諸

君はもうア、分つたと仰しやるでせうが、彼等が時に何か必要があつて三孫へ往つて、大切の着物を預けて金子を借りることがあるさうです。それで川柳に、「みつまごの藏や生命の置き所」といふのがあるさうです。さういふ婦人は、生命を預けて置くのです。中々危險な生命です。それが燒けやうものなら生命が燒けて仕舞ふ。川柳でもさう云ふ位に一般に御婦人は中々着物を大切になさるさうです。

偖、そこで御婦人の若い時には嫁入仕度として着物が一枚出來、二枚出來、三枚出來るといふやうに段々殖えて往くでせう。終に何十枚、何百枚、何千枚、何萬枚、……さうもなりますまいけれど……兎に角さういふやうに殖えて往くでせう。さういふ時に、初めの三枚四枚といふ時には、それを別けて、此の着物は此處の藏へ入れるとか、此着物は彼處の箪笥へ入れるとかいつて仰山に仕なくても、一つ抽斗へ一緒に入れて置けばそれで事足るわけです。も少し數が殖えて、十枚か十五枚になつても別々に覺えて居ることが出來るでせうけれども、若し着物が何百枚といふやうになると、とても一々別々に覺えて居ることは出來ず、その整頓になか〳〵骨が折れるのです。あんまり澤山着物があるのは却つて厄介で困るものであると云ふことであります。私もそんなに多く着物を持つたことはなし、又私の娘等にも中々そんなに拵へて遣ることは出來ませぬが、私の知つてる人から着物が餘り有り過ぎて困るといふ話を聽いたことがあります。それは東京の或る官立學校の校長の奥樣のお友だちの話であります。この校長の奥さんは、女子學習院を卒業された人でありますから、お友だちの中には何

處の伯爵に嫁いだとか、何處の侯爵の處へ往つた……といつて、講釋師や何かの處ではなく、公侯爵のところです。……私も講釋はするけれども、本當の侯には中々成れない。兎も角かやうに立派な處へお出になる人が多くある中に、一人の特に親しいお友達が某侯爵夫人となられたのです。そこで校長の奥さんは、或時尋ねていつていろ〳〵の話がありました末、「ドーモ貴女はお仕合でござります。侯爵夫人におなりなすつて、殊に澤山なお召物なぞお持ち遊ばして、四季をり〳〵のお樂しみも多く、本當に貴女はお仕合で入らつしやる」といつて、誠心から同情を寄せて友の幸福を祝されたさうです。ところが向ふの令夫人の答に、「いゝえ妾は仕合處ではございません。貴女はさう云ふ風に思つて下さるか存じませんが、私は決して仕合だとは思ひません」との返事でありました。そこで校長夫人は意外に思はれ、「何故ですか、何かお屋敷にお六つかしい事でもおありですか」と問はれましたら、「いゝえ何も六つヶ敷いことはございません。主人も誠によくして呉れますし、何も不足は御座いません。」「そんならお仕合ではございませんか。」「いゝえ妾は實家に居て、自分の着物などは自分で始末し、自分の好み物を自分で選んで着て居ましたが、此家へ參つてからは私の着物を取り扱ふ係りの者が幾人もありまして、それ〴〵自分の受持の箪笥を預つて居ります。それで私は自分の着物が何處にあるかどんなものがあるかといふことはなか〳〵一々分りませぬ。それですから此頃斯ういふ着物を着たいと思つても、其係りの者が居ませぬとトント分りませぬ。若しその者がお腹でも痛くて何處かへ行つて

居ますと、着物を出すことが出來ないのでございます。外の者に言ひ付けましても、私の處には、鍵がございませぬからとか、或はいろ／＼探しましたけれども何處にあるのか分りませぬとか、云ふ樣な風でちよつと着換へをしやうと思つても、三時間も四時間も前から注文して置きませぬと、中々一枚の着物が出て參りませぬ。私はかやうな窮屈な思をするより、いつそ自分で着物を始末する方が樂しいと思ひます」といふやうな話をされたさうであります。かう云ふ風に、あまり多く着物を持つても苦しいものでありまして、餘所から見れば幸福なやうであるけれども、却つて幸福でないさうです。併しながら有り過ぎる不幸には誰もちよつと逢つて見たいやうな氣もしますけれども……。

世の中の事もかう云ふ風に、物が段々殖えて參りますと、終には一々自分で覺えて居ることは迚も出來なくなります。前の侯爵夫人が自分獨りで着物を取扱ふことは到底出來ず、假令骨折つて自ら整頓したところが、一ツ／＼覺えて居ることは出來ないのであります。それならば之をちやんと整頓して何處に何があるといふことを確かり覺えるといふのには如何したらよいかと申しますれば、是には番號を附けるか符牒を付けるかして、如何いふ簞笥には何々が入れてある、如何いふ長持には何々が入れてあるといふやうに、容器に依つて着物の種類或は材料の種類を分けて、例へば、此所は縮緬此所は木綿此所は紬といふやうに分類するか、或は又此所は羽織此處は帶といふやうに分類して整頓するより外に遣り方はないのです。すべて澤山のものをちやんと整理するのには、其類に從つて分ける

より外に方法はないのであります。マア斯樣な苦心をして分類せねば着物が着られないといふことは餘り褒めた話でもないから、着物の話はそれとして置きまして、一體人の知識を整頓してゆく仕方も丁度之と同じことでございます。諸君が幼い子供でお出なさる間は、平生見たり聞いたりなさることが誠に尠いから、一ツ／＼の物を別々に記憶なさることが出來るのです。卽ち犬を見ても、是は白だとか、是は黑だとか、是は赤だとかいふやうに、一つ／＼其の犬を覺えて居ることが出來るのです。これは卽ち前にお話し申しました觀念とか表象とかいふものであります。

子供の時にはその觀念の經驗が少いから、そのまゝ覺えて居ることが出來るのですが、少年から青年に進み毎日學問をする者は勿論、さうでない人でも一時間にはどの位色々の事を見聞して頭の中に入れるか分らぬほどでありませう。例へば、他人と話をして居るとか、或は人と取引をして居るとか、又は自分で何かするといふやうなことから、段々と頭の中にいろ／＼の觀念が殖えて來るのです。餘り觀念を入れ過ぎると、腦病になつたり、神經衰弱になつたりしますが、それが腦病にも何にもならぬやうによく整頓して行くには如何したらよいでせう。ゴチヤ／＼にして居つては迚も堪りません。

そこで、概念といふものが必要になつて來るのです。

概念といふものは如何云ふものであるかと申しますと、それは詰り一のことを以つて澤山のことを代表させることであります。人間の智慧といふものは、一つ／＼の時計とか、一つ／＼の着物とかいふこ

とを、別々に覺えて居なくても、「着物」と言へば、あらゆる着物に關することはもうそれに纏めて覺えることが出來ます。又「時計」といつても、あらゆる時計のことを纏めて覺えて居ることが出來ます。其外如何なに大きくなつても、如何に澤山に殖えても差支へなく心の中にちやんと納めて置くことが出來るのは、皆今申すやうな概念の働に由つて、一のものを以て全體を代表させる爲めであります。

(三)男の智慧と女の智慧　此所でちよつと男の知識と女の知識との別を全體からいひますと、男女の知識にさう變化のある譯はないのです。女が計算しても二つと二つとは四つになります。男が計算しても二つと二つで五つにはなりません。併しながら、男の智慧は主として概念的であります。概念的といふのは、一つ〳〵のものを別々に覺えて居るといふよりも、寧ろ概括して覺えて居るのであります。そこで男の方が大ザッパになる。すべて物を大體に見て取つて、細かいことに行き渡らずに、或部分を捉へてそれで全體を締め括つて仕舞ふと云ふ風があります。女の方は又其締め括りが出來惡く、一つ〳〵の觀念を其儘に覺えて居やうとするから要領を得ないやうになることがあるのです。此前にも顔の例をお話したと思ひますが、なほ一例を擧げて見ませう。是れは一般の商賣人・宿屋・其外夫は外に出て働いて居て奥さんが家のすべてを切りまはして居るといふやうな所の人は、よく覺えて居つて宜いことであります。例へば、夫の留守に誰か人が來て何か用談をして往くとしませう。さうして

夫が歸つた時に、奥さんが之を報告するとしませう。その時その奥さんが純粹の婦人としての特色を發揮した人であると、それはマア細かいことをズッと順を追うて話すでせう。「今日誰さんが何時頃に參られました」までは宜いですが、さてそれから來た時の樣子から、如何な着物を着て居たとか、如何な帽子を冠つて居たとか、下駄の緒が切れそうになつて居たとか、そんな下らぬことを澤山いつて、「マアお上んなさい」といつても、中々上らなかつた、三遍すゝめたら漸く上つた。それから闕の上に坐つて居るから、「おみ足がお痛いでせう、さあどうぞこちらへ」といつても、イエ結構でございますといつて、なか〳〵動かなかつた。其癖痺が切れぬ呪をして居られたやうであります。それからお茶を出しても中々喫りなさらない。三遍目に飲まうと手をお出しになつてツイ茶碗を引繰り返されましたといふやうに、具體的の細かいことをズッと話すものです。忙しい人はもどかしがつてそれでどうした？といつて聽くと、「いゝえまあお待ちなさい順序を逐つて段々お話いたします」といふので、又その先きを話し出すといふやうになるのです。何でも婦人の話は、その總てを聞いて仕舞はなければ要領を得ない場合が多いのです。聽いて仕舞つたあとでも誠にたわいのないやうなことも少くありません。例へば、前のやうな時に、さん〳〵客の樣子を話して置いて、一番仕舞ひに、「それではまた上ります」といつて歸られましたといふやうな類であります。それで自分の家内とか、妹とか、すべて目下の者なら話の半でももう大概分つたから後でスッカリ聽くといつて抑へられますけれど

も、母とか祖母とか目上の人の話だと困ります。撮んで早く話して下さいといつても、「マアお聽きなさい是は話の順だから」などゝやられると、中々困ります。チャンと座つて痺れを切らして謹聽しなくてはならぬのです。兎も角さういふやうに女の智慧と男の智慧とは働くさまが違つて居るのです。

併しながら時に依ると、女でも男のやうな人があります。さういふ人は概括することが上手です。よくテキパキした所謂女將などといふやうな人にはさういふのが往々あります。何か一寸いふと、「へイ宜しうございます」と云つてすつかりお客のいふ事を理解して事を辨ずるのであります。斯ういふのは女であつても男のやうな心の働きを持つた人であります。さういふ人は惡くすると女らしい務をすることが出來ず、時としては臺所の事など面倒臭がる傾があります。そこで茶碗など一つ〳〵洗つて居るのは面倒だといふ所から、好い加減に水を打ちかけて放つて置くから、お飯を喫べる時に飯粒が附着いて居て唇を怪我するやうなことがあるのです。かう云ふ女はちよつと話をいたしました時は、パキ〳〵して要領を得て居てよいやうでありますけれども、女としての仕事には不適當であります。又其反對に、男であつて女らしい人もあります。さういふ人は悠圖々々して居つて何事もテキパキせぬものです。人中へ出ても碌に物を言ふ事もなく、氣に食はぬことがあると宅へ歸つてグツ〳〵家内に小言をいつて、家内の知りもせぬ事に、煙管の雁首をカン〳〵と叩いたりするものです。さういふ人は臺所などへ往つて、鼠いらずを明けたり、釜の蓋を取つて見たりして家内に小言をいふやうな厄

介人であります。かういふ人は男であつても女らしい細かな具體的の知識に富んで居るのです。是等は何方も褒めた話ではありません。女は觀念的に心が働き、細かいことを一つ〳〵覺えて、一つ〳〵に氣を付けることが屆くものであるから、此上更に要領を得て、概念として考へが出來なくなつてはならぬ。男は又大體を撮んでゆく概念的知識を持つて居るから、更に必要に應じて細かいことをも觀察するといふやうになるのがよいのであります。

(四)概念と觀念　偖これだけお話いたしますと、諸君は大體に就いて成程概念といふものは斯ういふものであるかと云ふことのお考へがお附きだらうと思ひます。そこで概念と觀念との別を表にしてお目に掛けませう。

直觀	感覺に基く	現在	事物現在の知識	實物	
觀念	直觀に基く	再現	事物の追懷を含む	繪畫	
概念	觀念に基く	再々現	事物の階級に關する知識を含む	表徵	

前の表で直觀を現在といふのは、今私共は物を見て居る。例へば、諸君は此時計を見て居られるでせう。即ち諸君は時計の直觀を得てお出なさるのです。今時計は諸君の目に映つて現在諸君が感じて居られるでやう。これが直觀でありますが、直觀は何から來るからといふに、即ち目や耳や皮膚など

の感覺から出來て居るのです。かく現在のものを感覺して居るのであるから、直觀は現在であつて又實物の知識であります。もし此時計を私がポケットに入れてしまひましても、諸君の心中にはやはり私が机の上に出して居つたやうな時計が出てまゐりませう。それが觀念であります。それは直觀に基いて出來るもので、先刻眼で見たのが心に殘つて居て再び現はれたのです。即ち今まで見て居たものはなくなつて仕舞つたのですが、それが諸君の心中に再び出て來たのです。それですから、表の中の事物の追懷を含むといふのは憶ひ出すことであります。即ち諸君の頭の中に出て來た時計は、實物ではなく、繪の時計であります。時計の實物は既に隱されて居るが、諸君の心中に時計の繪が出來て居るのです。それが更に概念になるのです。全體諸君の心中には、私の時計ばかりでなく、澤山の時計の觀念が出來て居るのです。それを集めて時計といふ概念が出來るのです。即ち私の時計でもない諸君の持つて居られる時計でもない、唯時計といふ概念が心中に出來るのです。かく概念は再現の再現でありますから、之を再々現の働といふのです。其事物の階級に關する知識を含むといふのは、例へば、時計であれば世界中のありとあらゆる時計に關する知識は皆時計といふ概念の中に含まれてしまふのです。形が變つて居らうが、色が變つて居らうが、金であらうが、銀であらうが、鐵であらうが、そんな事には關はず、時計でさへあれば皆此の概念の中に入つてしまふのです。さうするともはや繪ではなく、一の符牒であります。若し時計を繪で代表させて置くと、圓い時計ならば角な時計には合

はぬとか、下げ振りならば懷中時計には合はぬとかいふことになるのです。そこで丁度商人の使ふ符牒のやうに、「時計」といふ言葉を以てすべてを代表させるのです。それゆゑ概念はなか〳〵高等な心の働です。隨つて幼い子供には概念が發達して居ません。人の智慧がだん〳〵進むに隨つて概念も段々殖えて來て高等のものが出來て來るのであります。

(五)概念の過程　そこで其概念が出來るに就いて色々の次第順序があります。即ち之から高等概念が出來て行く道筋のことをお話致しませう。すべて概念の出來るには初にお話しましたやうに、關係といふことが必要であります。關係のないもの同士では迚も概念は出來ません。其關係を認める爲めに先づ初めに觀察といふことが必要であります。是は何物としても宜しうございますけれども、諸君のお分り易いやうに犬の例を引きませう。此處に黑なら黑といふ犬があるとしませう。其犬はチャンと實物があつて人が之を見て居るのです。そこで其犬は實際に居なくなつても、諸君の心中に觀念として殘つて居る。例へば、黑に御飯をやつたこともあり、麵包を遣つたこともある。その度々のことが觀念となつて出て來るのです。之と同じやうに、ポチは斯ういふ犬、赤は斯う、ぶちは斯うといふやうに出て來るのです。かやうにいろ〳〵の犬を觀察して多くの觀念が重複する間に概念が出來るのです。是が概念の出來る一番始めであります。かやうな一つ〳〵の觀察は、子供でも出來ますが、子供には未だそれ等を較べることが十分に出來ないのです。然るに諸君のやうな經驗の進んだ人は、黑と、

ポチと、斑と、赤といふやうな觀念を、心中で較べて見て、黑には家を守るといふ働きがあり、ポチにもその働きがあり、斑にも赤にもそれがあるといふことを認められるでせう。併しながら又互に色が違ひ、形が違ひ、大きさも吠聲も多少違ひませう。違ふ處はいくらもありますけれども、較べて見ると前のやうに同じ處がある。卽ち家を守るといふ性質は同じであります。それから又犬が肉を喜んで喰べるとか、或は人に懷き易いとか云ふやうなことは、どれも共通に持つて居るのでせう。さうすると其同じ處だけを引き拔いて考へるやうになるでせう。かゝる働を、抽象といふのです。又犬の色・形・大きさなどは違つて居るけれども、犬として大事な性質はみな同じである。そこで其種々違つた犬として必要でない性分を引き拔いて捨てるのを、捨象といふのです。前のやうに同じ點だけ集めることを、概括するといふのです。此に於て初めて犬といふ名が出來るのです。これが卽ち概念の成立する順序です。夫れ故に犬といふ概念は、黑でも、ポチでも、斑でも、赤でもない。是等に共通の大事な性質を集めたもので、之に犬といふ名を付けるのであります。斯んなことを話すと大そう手續が臆劫のやうでありますけれども、皆自然に此のやうな順序を踏んで概念を作つて居るのです。

(六)概念の發達　程度の低い概念は子供も作ります。子供が概念を作る順序も前と同じことでありますが、尙例を擧げて說明を試みませう。例へば、一隊の兵士が道を通る時子供が之を見ると致しませう。兵士は皆同じ着物を着て同じやうな樣子をなし、劍を下げ、鐵砲を擔ぎ、ランドセルを脊負ひ、

ゲートルを着け、靴を穿いて居て、何れを見ても同じやうに何百人も並んで行きます。そこで子供は兵隊が來た、兵隊が來たと云つて、何れにも兵隊と云ふ名を附けます。それは一つ一つ皆同じ性質のものと思ふから、皆一緒にして兵隊と云ふのです。子供がワン〳〵とか、チユウ〳〵とか、ニヤア〳〵とかいつて名を付けるのは、自然に出來る概念の一番始まりであります。さう云ふ概念は之を無意概念と云ふ人もあります。つまり子供はさういふ概念を作らうと云ふ意志なしに自然に作るから無意と云ふのです。之と違つて、自分の意志で觀察し比較し抽象し概括して名を付けるのは、卽ち有意概念であります。此の概念には次の圖に示すやうに段々階級があります。

物
- 生物
  - 植物
  - 動物
    - 鳥
    - 獸
    - 魚
- 無生物

例へば、犬や猫や馬や牛やいろ〳〵のものを比較抽象して一つの概念を作り、之に獸といふ名を付けます。それから又雀とか鳩とか鷄とか鴨とか云ふ樣なものを概括して、鳥と云ふ名を附けます。又いろ〳〵の海や川に棲むものを概括して魚と云ふ名を付けます。かくして魚とか、鳥とか、獸とか云ふものを概括して、動物と云ふ名を付けるのです。動物と並んで植物と云ふ概念があります。植物と

動物とを一處にして生物といふ概念が出來、又其生物に對して無生物があります。生物と無生物とを概括すると物といふ概念が出來ます。斯ういふことは何人にもお分りになりませう。此の如く段々低い概念から高い概念に進んで行くのであります。犬とか猫とかいへば、諸君の心中に犬の形・猫の形が出來ませう。さうすれば名稱は知らずとも形を以つて代表する事が出來ます。かやうに形を以て代表することが出來るものを「低級概念」といふのであります。進んで動物といへば、モウ形を以つて表すことは出來ません。動物の中にはアミーバのやうなものもあり、虫もあり、魚もあり、鳥もあり、獸もありますから、一つ形で表はすことは出來ません。そこでどうしても動物とかアニマルとかチーアとか符牒を以て代表するより外に仕方はありません。更に進んで生物といふ時には到底描く事は出來ません。どうしても言語で現はさねばなりません。更に物と云ふ階級になれば、天地の萬物を含みますから、迚も繪などで現はす事は出來ません。そこで物といふ符牒を以つて現はすのであります。

(七)概念と言語　それゆゑ言語は知識の發達上非常に大切であります。言語の多い國は開けた國で、言語を澤山知つて居る人は賢い人であります。言語は一時教育上に餘り重んじなかつたけれども、大さう大切なものであります。諸君試にお考なさい。手紙などを書く時にちよつと言葉が出て來ないで困ることがあります。其時に色々異つた言葉を知つて居れば、あの人には斯う云つた方がよい、此人には斯う云つた方がよい、此人には斯う述べた方が適切であるといふやうに、隨意に選擇することが出

來ます。さう云ふ人は知識の多い人であります。人に物を頼むにしても、書き方の惡い爲めにその頼みが聽かれぬこともありますから、大に注意せねばなりませぬ。前のやうな場合に、いろ〳〵の言葉を知つて居れば、よく考に當て篏めてゆくことが出來ます。又平生の交際上、人にものを云ふのでも、多くの言葉を知つて居れば、場合々々に應じて自由に適當な言葉を用ゐることが出來ますから、大さう都合がよろしいのです。私の宅に此間まで居りました女中は、面白い女でありましたが、言葉が乏しいからよく可笑しなことを申しました。例へば、犬がお出になりました、坊ッちやんが泣きました、といふやうなことを申します。勿論是れは言葉を知つて居る數が少い爲めばかりではなく、つまり賢くないのでありますが、これ等も概念と言葉とが確實であつて、且つ多かつたら、もつと賢くなるのであります。又或家の女中は他人の事に粗末な言葉を使ふので、その家の主婦が、他人のことには粗末な詞を使ふものではない、何でも「お」の字を附けて言はなくてはならぬと教へました。その後其の家に飼つてある金魚が死にました時に、「お金魚樣がお亡くなりになりました」と言つたそうです。そこで「金魚は魚だからそんなに丁寧にいふ必要はない。又金魚などには、死んだといふものではない、落ちましたといへば宜い」と教へました。さうするとその後不幸にしてその女中の母が死んだといふ報知が參りました時に、「袋がおちました」といつて泣き出したといふことであります。さういふやうに一つの言葉を何處へでも持つて行くととんだ滑稽に陷ります。それですから、人は智慧が進め

ば進むほどいろ〳〵の言葉を知つて、此言葉は斯ういふ事を現はすのである、此言葉は此處によく當箱るといふことを、よく知つて來るのであります。

私共は幸福にも日本のやうな偉い國に生れましたお蔭で、學問上にも非常の便利を受けて居るのです。今日東洋に於て第一に言葉の多い國は日本であります。學問上の言葉でもその外の言葉でも最も多い國であります。お醫者樣などは患者に分らぬやうにする爲に常に獨乙語を使ひますが、大抵は日本語で事足るのです。併し殘念なことには、我國の學問の程度がまだドイツに及びませぬから、言葉も足りないのです。そこで醫學上の語には、日本で如何譯したらよいか分らぬ樣なものがいくらもあるのです。支那には佩文韻府といふやうな有名な本がありまして、此中にはあらゆる言葉が網羅してあります。宗教上の言葉でも、哲學上の言葉でも、實に豐富で、私共は誠に羨しいと思つて居りました。ところが其佩文韻府に有るやうな言葉は殆んど日本で採つてしまつて、それ以上に現今支那人が知らない言葉を澤山作りました。觀念などといふ言葉も日本で新しい意味を付けたのです。概念といふ語も、心理學といふ語も皆、日本で拵へたのであります。それですから支那の內地へ行つて日本の學者が心理學といふ字を書いて見せても、心臟のことを書いたものかと思ふに過ぎぬでせう。勿論唯今は支那人が我國の書物を讀んで、我國で拵へた言葉をそのまゝ用ゐて居るのが澤山あります。兎も角も今日の我國は東洋に於て最も言葉に富んで居るのです。其點から見ると、支那とか、安南とか、其

の他東洋の諸國は我國の言葉を習ふのが便利でありませう。私が日本人であるから言ふのではないけれども、東洋諸國ではせめて學術上の語丈けでも日本語を用ゐしめるやうにしたいと思ひます。

すべて物の名といふものは大切であります。曾て學校では物の名ばかり覺えても仕方がないといつて、名を教へることを輕んじたことがありますが、是は大變間違つたことです。勿論名ばかり知つても役に立たぬでせうが、物の名を多數に覺えて、其名に含まれて居る事柄を知るといふことは非常に大切なことであります。一體物の名稱に就いては色々お話することがあります。ちよつと子供に名を命けるにしても、親たる人は注意せねばならぬのです。諸君の中に差さはりがあつたら御免を蒙らねばなりませぬが……女の名に「とら」などいふのがありますが、何だかウーといつて出て來るやうに感じます。然るにお花さんとか、お絹さんとか、おあやさんとかいふと、優しい感じが起つて來まして、自然と其人が溫和な人のやうに思ひます。それですから、一體に人の名を命けるには、氣を注けねばならぬことです。名に因つていろ〳〵の思想を喚び起すことが出來ます。例へば、信吉といふ名なら、「お前のお父さんは信を守るやうにとこの名を命けたのであらう、それゆゑお前はさういふ人物にならねばならぬ」といふやうに、教訓上にもいろ〳〵應用が出來ます。私などは平の字を命けたものですから、平凡になつたのかも知れません。併し時に依ると上へ不の字が付く方が適當ではないかと思ふこともありますが、兎も角もまづ平和に心を持つてゆくやうに努めて親の命けて呉れました名

を變へずに守つて居りますが、總て人に名を命けるといふことは、唯今申します通りいろ〳〵のことに影響致しますから、よく〳〵注意すべきことであります。

(八)言語の及ばざる心域　ところがもう一歩進むと、言語に絶する境涯があります。まだ言葉を以つて言ひ現はすことが出來ない事があります。それは佛敎でも耶蘇敎でもさうです。そこで禪などでは悟りといふことがあつて、一種の象徴を用ゐて言葉を超絶することがあります。釋迦と迦葉との間にも之が行はれて、釋迦が何も言はないで花を拈つて居たら、迦葉がそれを見て莞爾と笑つて、それでモウ十分了解したことを表はしたことがあります。勿論世間にも眼で知らせるなどいふこともあるやうですけれども、さういふ事は感情の方であまり良くないことです。知識の方では短刀直入に悟らねばならぬ。所謂端的に直に悟られるやうな處まで來ねばならぬのです。それは諸君が眞に信仰をして御覽なさい。と言つて、サア是から信仰せよオイチ二イといふ譯に號令を掛けて信仰することも出來ますまいけれども、眞に信仰が出來れば前に言うたやうな境涯に達することが出來ます。それゆゑ言葉は大切でありますけれども、其言葉に引き廻されてはいけませぬ。自分が言葉を引き廻して行く人にならねばなりませぬ。

第二節　概念の種類

(一)文典上の分類　概念は大體二つの種類に分つことが出來ます。一つは概念をその現はす物の方から分けたので、他の一つは心理上の分類です。而して前者の中でその主なるものは實物の概念です。それは、家とか、犬とか、動物とかいふ皆物の名です。すべて物の名は一つの概念です。諸君が平生召上る食物でも、それは一ッの實物で、魚ならば鯛があり、鰆がありませう。さうして其鯛なり鰆なりは、皆一ッの物の概念であります。それから次には性質の概念があります。例へば、善とか、惡とか、或は赤とか、黄とか、大とか、小とかいふやうに、色々性質を顯した言葉がありますが、さういふのは皆一つの性質の概念であります。それから又形の概念があります。これは四角とか三角とかいふ類であります。是等はいづれも文典などの區別であります。

(二)心理上の分類　第二の心理學上の區別は、個體概念と普通概念との別であります。普通概念といふのは、今まで私の說明いたしましたのがそれであります。卽ちいろ〳〵違つた一つ〳〵のものを集めて、其中から同一の性質を引き拔いて概括して作つたところの概念です。又個體概念といふのは、一ッの物を度々經驗して作るものです。例へば、私を諸君が度々御覽になりますと、私の概念が出來るのです。卽ち諸君は尠くとも今日までに五度私を御覽なすつたでせう。餘り好い顏でもありませんけれども、兎に角御覽になつたのです。それでその度毎に私の言ふことも違ひ、私の樣子も違ひ、又時々は着物も違ひ、帽子も違ひませう。併し斯くその度毎に違ふ處は諸君が捨てゝ仕舞はれて、私の

概念をお作りになるのです。詰り着物が如何いふものであらうと、聲が變つて居らうと、そんな事は私に取つて大切なことでないから、打捨てゝ、何處か私の特色を取つて諸君は高島といふ者は斯ういふ人であるといふ事を思つてお出なさるでせう。かういふわけで、同一具體的の物でも、度々經驗して居ると、概念が出來るのであります。それですから人を見るのでもさうです。唯一度逢つた計りで分る人もありますけれども、婚禮の場合のやうな一生の大事になれば、双方で概念がよく出來てからでなければ決行すべきではありません。一寸見てあの人は樣子が好いと言つても、度々逢つて見ると其間に地金が現はれて來ることがある。そこで個體でもいろ／＼經驗して、必要でない部分は棄て、大事な處だけを以て一ッの概念を作ることが必要です。その成り立ちの狀態は普通概念と少しも變つたことはありません。

第三節　概念の必要

(一)心の敏活なる働と概念　それから進んで概念の必要のことをお話しいたします。この事は始めに概念と概念との關係をお話したことで略お分りでもありませうが、尙一層詳しく申しますると、すべて吾々の智力は、概念を作らなければ敏活な働きは出來ません。敏活な働きといふのは、一を聞いて十を知るといふやうに、テキバキと心の働くことであります。詰り一ッに締め括つて考へることの出

來得るやうでなくてはならぬのであります。例へば、犬といふことの正しい概念を有つて居る人なら、一つ一つの犬を檢査せずとも犬といふものは斯ういふものであるといふことが分るから、どんな犬に對してもその主要な性質は先きに知つて居るわけです。何でも其通りで、商賣をする人でも、商賣上に就いてよく知つて居る人は、一ッの事を聞けば其の他の事はスッカリ分りますから、非常に精神が敏活に働くことが出來るのです。若しそれが分らぬと、ドーモ慣れないで困るといふやうな譯になるのです。例へば、諸君の中に曾て學校の先生をして居て、後に銀行に入つたとか、或は實業をしてゐて、後に學校の先生になつたとかいふやうに、職業を換へた經驗のあるお方があるだらうと思ひますが、すべて人は急に職業を換へた時には實に困るものです。自分でも厭になる程事務が敏捷にはかどらないで、何れから手を着けたらよいか分らぬやうなことが度々あります。併し次第に慣れて來ますと概念が出來て來て、所謂裁決流るゝが如しといふやうに行つて往くことが出來るのです。菅原道眞公の政治の仕方を歷史家が褒めて、裁決流るゝが如しと言つて居りますが、實に菅公は賢明なお方で、政治的概念に富んで居られたから、何か事が起つても、是れは斯う彼れはあゝと、何でも彼でも直ちに處分されたのでありませう。平生家庭を治めて行くのでも此の通りでありまして、確かりした概念を有つて居て心の敏捷に働くやうに努めることが大切であります。

(二)婦人の實驗談　唯今もちよつと車の中で私が讀んで來た雜誌の中に、櫻井ちか子といふ御婦人の

實驗の話が書いてありました。私は大變よい話であると思つて讀んで來ましたが、それは如何いふことかと申しますと、ある教育の有る婦人が他家へ嫁いたところが、夫が終日働いて歸つて來た時、挨拶もろく〳〵濟まぬ中に、明日のお辨當のお菜は何にしませうといつて尋ねました。夫は未だ着物も取替へずに居て、自分では大さう疲れたから休まうといふ時にそんなことを聞かれて、うるさいと思つたものですから、ポカッとその細君の面を擲いたさうです。そこでその細君は大さう腹を立て、言ひ爭つた末、こんな亂暴な者の妻となつて居ることは出來ぬといつて出て行つて仕舞ひました。さうして此人の思ひますには、男といふ者は薄情なものである。自分が翌日のお辨當に好きな物を容れて上げやうと思つて聞けば、面を擲く、それこそ德に酬ゆるに怨を以てするといふ樣なものである。自分は生涯男を有つまいと決心して、亞米利加へ行つて醫學を研究し、開業の免許を得て歸つて來て、大阪で開業をしたさうです。ところが大さう流行つて、方々へ招かれる樣になりました。そこで自宅には婆さんを置いて、總ての賄をさせました。自分は患者を回診して歸る途にも病人の事を非常に氣遣ひながら自宅に歸つて門口を入ると直ぐに、婆やが、「今晩はお魚が何もございませんからこれ〳〵のものに致しましたが、それで宜敷うございますか」と聞きました。自分はいろ〳〵心配して歸り、まだ着物を脱がぬ中にそんな事を云はれたので、むつとして、婆やの面でも擲きたい程に思つたさうです。そこで初めて成程前の夫が十五年前に妾を擲いたが誠に無理はない。あれは妾が惡かつたので

ある。一日働いて歸つて來た時に、夫の心には如何いふ心配苦勞があつたかも分らぬ。丁度妾が病人のことをいろ〳〵と考へて居るよりも、より以上の心配があつたらう。其時に何時咄してもよいお菜の事など下らぬことを言ひ出したから、つい擲くやうなことにもなつたのである、といふ事を悟つて、大層懺悔をしたといふ話しであります。

又もう一つの話は、櫻井さんのお友達である亞米利加の或る婦人の事であります。此人は實に悧巧な人で、薄給の夫によく事へて家庭を樂しくしたさうであります。この人の夫は物の高い米國で僅か六十圓の俸給を得て居たのださうでありますから、女中を置かずにその子供を育て、家事はすべてこの婦人の手一つで取り行つて居りましたが、その人は、夫が歸つて來るとちやんと食事の仕度をして喰べさせ、さうして夫が疲れて居るのにガタ〳〵後片付などに時を費すのは、非常に夫に不愉快を感せしめるから、食事が濟むと臺所の片付は先づあと廻はしにして置いて、可愛い子供を抱いて夫といろ〳〵の談話をしてその心を慰め、さうして翌日夫が出て行つて仕舞つてから緩くり洗つたり片づけたりするやうにしたから、夫の心を害するやうなことなく、家庭が誠に圓滿であるといふことが書いてありました。是は大變に良いことでありますが、それと反對に夫が歸つてもろく〳〵口を利かず、妾は斯んなに働きますと言はぬばかりに、皿などをガチャ〳〵させるものが有りますが、それは良くないことであります。何でも物は斯ういふ場合には、斯うせねばならぬといふことをよく〳〵考へて、

敏活に優美に取り行はねばなりません。かういふことは知識に富んで概念がチャンと出來て居るとよく行はれるものであります。それですから、氣の利いた料理屋などへ行きますと、ソレお客といふと直ぐに先づ香物で酒を持つて來て、さうして其客が一二盃飲んで居る間に何か肴を持つて來るやうにするのです。それを唯丁寧にすればよいと思つて、お客は空腹で居るのに、スッカリ膳部が揃はなければ出さぬと云ふやうにして、一時間も二時間も待たせるのは實に愚な話であります。宿屋でも料理屋でも、客あしらひの概念がよく出來て居れば、敏活な働きが出來るわけです。

(三)心力の經濟　それから經濟といふことは、金を費消せぬといふことばかりではなく、心の働きに取つても大事であります。下らぬ事に心を使ふのは不經濟であります。例へば、いくら考へてもいくら心配しても仕方のないやうな事をクヨ〳〵思つて心を痛めるのは、實に不經濟の事です。金錢の損は取り返へされますけれども、其間の時間と心の働きとは到底取りかへしはつきませぬから、心の經濟といふことは最も必要であります。心の經濟とは如何いふことであるかと申しますに、つまり、少しの力を以つて多くの結果を得るといふことであります。商賣上でも、少しの資本で多く儲かることを經濟とするでせう。飯を炊くのでも、八の字で炊くのと、お稲荷樣で炊くのとあるさうです。稲荷樣で炊くといふのは、鳥居のやうに薪を四本使はねばならぬのですが、若しも八の字なら二本で濟むのです。それゆゑ八の字で飯の炊ける女中は經濟的の女中であります。かういふ道理を間違へて、客

嗇な家になると、飯を少し喰べて多く働くやうな嫁を貰ひたいといふやうな處があります。これは經濟の本當の意味でない。飯を少しく喰べて居れば、弱くなつて病氣に罹つたりなどして、大そう金がかゝつて却つて不經濟になるのです。それですから、自然の道理に背いた無理なことをしてはなりませんが、つまり少しの力で大きい好い結果を得るといふことが經濟であります。學問も其通りで、一を聞いて十を知るといふのは最も經濟的の働です。此の働はたゞ概念に由つてのみ出來るのです。商賣をするには、丁稚小僧から一々やつて往くと云ふことも必要でありませう。併し教育があり知識があれば、二十年も三十年もかゝつて白雲頭が白髮頭になるまで行らねば出來ぬといふことはない。

(四)理會と概念　それと同じく、學者が學問の事に就いて概念を持つて居ると、何の書を讀んでも一々終ひまで讀まねば分らぬといふ事はない。ハア之はかういふ意味である、此の書はかういふことを書いたものであるといふことが、一寸讀んでも直き分ります。それゆゑ何時までも字句に拘泥して居らずとも、其大體を採つて十分に分るのであります。若し此忙しい世の中に、あらゆる書を一々讀んで居つた日には、日が暮れて仕舞ひます。一日の日は暮れても、又再び夜が明けるけれども、人生の日暮になつてはもう仕方がありません。書物を抱へて地獄か極樂へ往かねばなりません。それ故書を讀むにしても、大切なところを捉へて概念を作り、少しの働で多くの結果を得るやうにして行くことが

必要であります。今日の私の講義の中でも何處か一番大切な點を捉へて居れば、要領を得ることが出來ます。

(五)推理と概念　それから又、概念が働けば、物の道理を考へることが出來ます。之を推理作用と云ふのです。すべて心に確りした纒つた思想が出來て居れば、物の道理を考へて判斷することが出來ます。例へば、或る特殊の場合を除く外、すべての物は熱を得れば膨脹し、寒さに遇へば收縮するといふ性質があるから、これから判斷すれば、此間の大雪で電線が多く切れたことがよく分ります。素人が考へると、雪が積つて重たくなつた爲めに電線が切れたのであると思ふでせう。それは勿論重量も關係して居りませうが、あの位の雪が積つた位で、あの太い電線が切れるものではない。つまり今日までで東京などではあんなに雪の降つた事がないから、電線が張り詰めてあつたのです。それが急に冷えて短くなつた爲めにピチ〳〵切れたのです。その切れない所は烈しい力で引つ張るから柱がバタ〳〵に倒れたのであります。さういふやうに熱の概念・冷の概念が明になつて居れば、正しい推理をして行く事が出來ます。すべて確かりした纒つた思想を以て居れば、物事を正確に判斷推理する事が出來ます。專門の山林家が汽車などで山越しをして、此山には如何いふ樹が生えて居るとか、或は路傍の土地を見て、此邊の土地には何の樹を植ゑるがよいとかいふやうなことをいひ得るのは、皆概念が出來て居るからであります。

(六)科學と概念　それから又科學といふものは、概念によつて成り立つのであります。卽ち概念があつて初めて學問が出來るのであります。物理學でも、化學でも、皆纒つた概念があるから系統的知識として科學となる事が出來るのであります。要するに諸君が悧巧にならうと思はれるなら、唯事を澤山覺えて居ると云ふのみでは不可ませぬ。必ずちやんと纒つた、知識として確實の概念を得るといふ事が必要であります。

第四節　明確なる概念

(一)自ら實際に經驗すること　次に概念は如何したら明確になるかといふことに就いてお話しいたしませう。先づ第一に、話でも自分自ら實際の事物について經驗して見ると云ふ事は、總ての概念を養ふに一番大切な方法であります。卽ち自分が見たとか自分が聞いたとかいふことが、最も正確なる概念を作る基礎であります。唯他人の書を讀んで覺えたり、他人の話を聞いて覺えたりして、自分が考へても見ず又繰り返へして實驗しても見ずに措けば、茫然として忘れて仕舞ひます。それですから、書を讀んでも、必ず自分で實地に試して見るやうにするがよいのです。御婦人方が料理の書を御覽になつても、家庭の雜誌を御覽になつても、唯書を見たと云ふだけでは實際はお分りにならぬでせう。併し試して御覽になるとよく分つて正しい概念を得る基礎となります。

(二)廣く經驗を積むこと　すべて自分が實際に經驗する範圍を成る丈け廣く、成る丈け多くするやうにせねばなりませぬ。日本でも、支那でも昔知識の進まなかつたのは、何を研究するにも自分の國だけに限り、それも十分には行き屆かず、僅かの範圍で研究を纏めて居つたことがその一つの原因であります。自分の國に無い事でも他の國には澤山あり、又同じ種類の物でも他の國にはいろ〳〵違つた事柄もあるから、廣く他の國の事をよく調べて見る事が必要であります。それ故に物を研究するには、出來るだけ其範圍を廣くせねばならぬのです。私は多年子供の事を調べて居るのでありますが、先づ自己の家庭の子供の事から研究を始めます。人に依つては、男が子守などをして居れば誠に意氣地なく呑氣のやうにいひますが、私は呑氣どころではない、子供を抱いて遊ばして居る間に學問の研究をして居るのであります。かやうに先づ吾が子に就いて調べると共に、私は亞米利加のインディアンの子供は如何か、西藏の子供は如何か、亞弗利加の子供は如何かといふやうな事も調べて居ります。私は彼地へ往く事は出來ませぬから、種々の材料を集めて世界中の子供の知識を集めて居ります。さうして子供と云ふ者は斯う云ふものであるといふことを知りたいと思つて居ります。唯自己の家庭の子供一人を捉へて、子供は斯ういふ者だといふ譯には參りませぬ。國に由り所に由り、時に由り、氏に由り、育ちに由つて、子供にもいろ〳〵の違ひがありますから、廣く調べねばなりませぬ。それと同じ事で、商賣をしても學問をしても、又家庭を治めるにしても、廣い範圍から材料を採つて來て概念

を作らねば、正確なことは出來ませぬ。宗教でも比較研究といふ事があつて、廣くいろ〳〵の宗教の研究をするから宗教の概念がよく出來るのです。

(三)確實なる經驗を積むこと　併し廣い經驗ばかりでは不可ない。其次には概念を確實にする事が大切であります。通常人は類似した物の區別を曖昧にして置く傾があります。例へば、葱と淺葱とは何處に違ひがあるか、只大きいと小さいだけの違ひか、電燈の光と瓦斯のとは如何いふ違ひがあるか、といふ疑はしい事があつたら、ちやんと其の違ひのある點を明かにして置くといふやうにすることが、何事にも必要であります。或は又記憶の憶の字と、間違つて書く者がよくあります。或は又意と念、瞋と恚とは如何云ふ違ひが有るかといふことなどに就いては、茫んやりして居る人が多いのです。それをちやんと、此字は斯ういふ時に使ふとか、是れは斯ういふ意味であるとかいふ事を明らめ、外の字と比較して、間違ひのないやうにせねばなりませぬ。今、人といふことを定義して、「人は理性を有し道德を有する動物なり」とすると致しませう。此の定義に於て、理性を有し道德を有するといふことが、他の動物と違ふところであります。それですから、眞に人となるには、理性を明にし道德を堅固にせねばなりませぬ。理性と道德との概念が不明瞭で、之を發揮し得ぬ人は、形は人であるけれども、心は下等の動物である。自然主義などは大分之に近いのであります。斯ういふ點からいふと、今日の貴顯紳士には、隨分人の定義に嵌らぬやうな行をして居る人がある。さう云

ふ人は唯金錢ばかり有り難がり、金があれば偉く、無ければつまらぬと思つて居る。何の爲めに金を有り難がるかと云ふと妾を置くとか、別莊を作るとか、唯色食の欲を肆にする爲めであります。斯んな事を世間で不道德と思はぬやうでは、到底社會は向上することは出來ませぬ。つまり人といふ概念が眞に各自の心に浸み込み、その爲すべきことゝ爲す可らざる事とが明かに分つて居れば、前のやうな破廉恥のこともおひ〳〵無くなるでせう。其處で學校で兒童に物事を敎へるのにも、簡易にして明かに概念の出來るやうにしてやらねばなりませぬ。がそれには前に述べたやうに、實地に當つて具體的に多方面の經驗をさせ、其の概念の內容を確實にするより外にはありません。忠孝の敎でも此の點に注意せねばなりませぬ。若し敎へ方が下手で、孝の例に、寒い時に親が酒を買ひに行けと行つたら、厭な顏をせずに行つたといふ事を引けば、動もするとそれ一ッだけが子の孝の概念の中に入つて、外の內容を疎かにするやうになります。それですから、唯口で言つただけで濟ませずに、明かに孝といふ事は斯ういふ事であるといふ事が嚥み込めるやうにしてやらねばならぬ。是れは子供のみでなく、大人にも大事な事であります。明かでない方は如何であるかと申しますと、その原因は澤山あります。

(四)概念の不明なる原因としての直觀不明　次に概念の第一直觀が不明の場合、例へば、今時計といふ概念を作るに、實物の時計がよく見えぬやうでは、之に基いて出來たところの概念は不完全であります。學校で大勢の生徒に對して、先生が小さな物を見せてサア皆さんよく之を御覽なさいと言つて

も、後の方に居る者には、何だか分らずに濟んで仕舞ふ場合が少くないのです。さういふ時には、其物に就いての概念が明かでないわけです。御婦人方が裁縫を稽古なさるのすら、唯口でどうかう言はれて居ただけではよくお分りにならぬでせう。先生自身がそれを見せて下さり、又習ふ人も自分でして見て成程斯うなるといふ事がよくお分りになるでありませう。つまり直觀が明かでないと概念が不明になるのです。

(五)過誤及び不十分の觀察　それから其次には過誤及び不十分の觀察といふ事が概念の缺點を來す基であります。是れは見方が疎漏であつたり、或は間違つて居る爲めに、之に基いて作つた概念に缺點を來すのです。子供の觀察には幾らもかういふ類がありますから、父母や敎師は常に注意せねばならぬことです。何でも物事の觀察を十分にして間違の無いやうにするといふことが概念の敎育に大切であることは、前にも述べた通りであります。

(六)不完全なる抽象　それから又、抽象することが不完全である爲めに、概念に缺點が出來る事があります。例へば、犬の性質に就いて、如何いふ共通の點があるかスッカリ抽象せずして、大事なことを落して置くと、其犬に關する知識が大さう不完全になります。一の例を以てお話して見ませう。何方でも畑へお出になつて、紫雲英でも豆でもすべて荳科の植物を拔いて御覽なさい。……尤も他人の畠の物などを無斷で拔いては困りますが、……さうすると、根には必ず小さい丸い玉が付いて居りま

す。併し觀察の不完全な人は見殘して之を豆の主要のものゝ中に入れはせぬでせう。此の丸い玉は、獨乙の有名な農學者が初めて見出したのでありますが、これは一種の「バクテリア」でありまして、豆に取つて大切なものであります。「バクテリア」といふと、何か人に害をする樣に思はれますが、「バクテリア」の中には人に害を及ぼすものもありますけれども、又大に人の利をなすものもあります。澤庵の旨くなるのも「バクテリア」の爲めであります。酒の出來るのも「バクテリア」の爲めであります。それですから、酒飲みは「バクテリア」に感謝して可なりであります。又豆腐の出來るのも「バクテリア」のお蔭であります。何故といふに、豆の根に前に述べた「バクテリア」がなければ豆は出來ぬからです。「バクテリア」を殺して、蒸溜水の中に肥料を入れて豆を蒔くと、大きく伸びて花は咲くけれども、實はならないのです。かう云ふことは豆の性質上大切なことであつて、それを落しては豆の知識は完全でないわけであります。

(七)言語の不適切　其次は言語から來る缺點です。概念に當て嵌める言語は餘り廣過ぎても不可ず、餘り狹過ぎても不可ませぬ。例へば、狹く用ゐられて居る言葉を濫用して廣く用ゐたとか、或は廣く使はれて居る言葉を餘り狹く使つたとかいふ樣な場合には、それが爲めに概念が曖昧になります。併し場合によつては普通名詞を固有名詞にすることもあります。例へば、我國の佛法家で大師と呼ばれた人は多くあるけれども、單に大師と云へば弘法大師のやうになつて居ます。又太閤は外にいくらも

あるけれども、單に太閤と云ふと豐臣秀吉のことゝなつて居ます。或は黃門は澤山あるけれども、德川光圀に限られて居り、又祖師と云へば各宗の先祖のことであるが、主として日蓮上人の事をいふやうになつて居るの類は皆、普通名詞が固有名詞になつたのであります。是等はいづれも偉い人である爲めに自然に廣い固有名詞を一人で占有するやうになつて來たのでありますけれども、故意にかやうなことをすると思想がめちやくちやになつて分らなくなります。單に大師と云つても、弘法大師であるか何であるか分らず、太閤と言つても、豐臣秀吉であるかどうか分らず、祖師といつても、日蓮を指すのかどうか分らぬわけであります。通俗の談話などに使ふ時はよいけれども、ちやんと正確な文章などに記すには、正當な意味に受け取られるやうにしないといろ〳〵の間違が起ります。

(八)時間の經過　それから又、時が經過するに隨つて概念は次第に不明になります。例へば、私が心理學を講義すれば、兎に角諸君はその概念を得られるでせう。或る人に聞けば、いつも私の話を歸られてから老人の方などにお話になる方もあるさうで、私も大に喜んで居ります。併し是から二年も三年も經つて見ると、だん〳〵ぼんやりして分らぬことが出來て參りませう。詰り時の經つに隨つて或部分〳〵が忘れられるのです。唯必要の事ばかりは時々思ひ出すから其概念は正確に殘るのであります。要するに、時の經つに隨つて概念は一般に明瞭の度を減ずるものでありますから、概念を正確に有つ爲めには度々くりかへして考へる必要があります。

(九)實物教授　學校の教課はすべて概念を養ふ爲めになるのでありますが、其中でも概念を養ふのに最も都合のよいのは、直觀教授、又は實物教授といつて、實物を見せて教へることであります。此の教授が正當に行はれゝば、概括は正しく出來ます。又理科も、初め一つ〳〵の植物や動物を見せて、次第に概括して概念を作るには、最も適當の教科です。又國語も概念の教育上大事な教科であります。つまり經驗で得た概念は國語を以て現はすのであります。それから又概念を作る上にも、國語の必要なことは、前にも述べた通りであります。

(十)學問の目的　一體學問は何の爲めにするかと申しますれば、いろ〳〵の答が出來ませうが、知識の上からいへば、概念を得る爲めであります。獨逸の名高い哲學者ヘルバルトといふ人は、哲學は概念を整へる學問であると申しましたが、哲學ばかりでなく、すべての科學は皆その科の概念を整へる爲に存して居るのです。即ち植物學といひ、動物學といふのは、動物に關し植物に關する概念を作るが目的であります。哲學はかやうな一つ〳〵の科學の概念に基いて出來る學問であります。要するにすべての學問の目的は、正確なる概念を作るにあるのです。學校で子供に物を教へるのも、その目的はつまり概念を作るにあるのです。それゆゑ諸君は何の講義をお聽きになつても、何の書をお讀みになつても、その事柄の概念を得ることに注意なさらねばなりませぬ。

第十章　判斷

第一節　判斷の意義及び種類

(一)判斷の意義　判斷と云ひますと、其處らの町にある身の上判斷と云ふ八卦見の看板によく書いてある字です。あれも判斷でせう。けれども學問上の判斷といふのは、必ずしも是れから先自分が如何なるだらうかといふやうな意味ばかりではない。即ち極く廣い意味に使ふのであります。ですから八卦見の判斷と區別する爲に、斷定などといふ字を使ふこともあります。詰り之を說明して見まするとと、自分の心の中に二つの考へがあつて、其二つの考がちやんと一緒に合ふか合はぬかといふことを覺る心の働きであります。例へば、時計を見まして、之が時計であるといふことを覺るのも、廣く云ふと矢張り判斷になるのです。通常斯んな見馴れた物は、何人も是れを見て、何だらうかといつて何時までも首を傾けて居るものは大概ないでせう。併し今から五十年も前の人は、時計の判斷に困つたでせう。或る亞米利加の船長が時計を見て居たらば、我國の役人がそれは何にするものかと言つて聞きました。そこで船長は、是れは時を計る器械だと說明すると、その尋ねた人は暫く見て居たが、軈て怪訝な顏

をして、是れはチク〳〵と動いて居るが、何を食物にいたしまかすといつて聞いたといふことであります。今日吾々は始終見て居るから分りますけれども、初めて見た人は判斷に困つたでせう。何故といふに、チャンと之に合ふ樣な考が頭の中に出來て居らぬ爲めに、何だか分らぬからです。つまり判斷するといふのは、是れであらうか、あれであらうかといろ〳〵較べて見て、これに違ひないと極めて行くところの心の働きであります。

(二)判斷と決斷との別　一體人は思ひ惑うて居る間は中々苦しいものであります。併し思慮した結果、どうしようといふことが定まれば、心は平靜の狀態に歸し愈々其處に進んで行かなくてはならぬといふ風になつて參ります。ですから判斷といふことゝ決斷といふことゝは、通常の場合に餘程よく伴ふものであります。通俗には、判斷というても決斷というても同じ事にしてありますが、學問上からいふと、判斷といふ方は智慧の働、決斷といふ方は意思の働をいふのであります。卽ち判斷といふのは、善惡是非、斯うせねばならぬ斯うしてはならぬといふことを、智慧の上で定むることであります。又之と相對して、實行しやう、してはならぬから止さうといふやうにすることが決斷であります。故に判斷のよく出來る人は、隨つて決斷もよくなる譯であります。判斷のつかぬ人は、愚鈍で多くは決斷も惡いものであります。勿論、愚人には、妄斷といふこともありますが、それは例外です。

(三)肯定判斷と否定判斷　判斷の働を分けて見ますと、二つになるのです。卽ち(一)一致する働、(二)

一致せぬ働、この二つです。それで、一致するといふ方は、例へば、牛を見てこれは獸であるといふことを知るの類であります。獸といふ概念と牛といふ概念とは、一つ類でありますから、ちやんと心の中で一致するのです。ところが牛と犬と云ふやうな概念を較べて見ると、どうも一致しません。牛は牛、犬は犬と、二つになつてしまふのであります。論理學では、一致する方を肯定と言ひ、一致せぬ方を否定といひます。肯定といふ方は肯ずるので、否定といふのは否むのであります。詰り人間の智慧の働といふものは、此二つの外にない。斯うであるといふことゝ、斯うでないといふことゝの二つであります。斯うであるでもなし、斯うでないでもないといふやうな事はない。若しあるとすると、それは心の狼狽へて居る時であつて、さういふ場合には、未だ判斷が出來て居ないから、何方ともつかずにウロついて居るのであります。詰り心が定まり智慧が明になれば、斯うであるとか無いとか云ふことが、自ら分つて來るのであります。

(四)直覺判斷と思慮判斷　判斷の働き方には今申したやうな二つの種類がありますが、又其の現はれ方にも色々の種類があります。其種類を別けて見ますと、大體二種になります。それを又二つ宛に別けますゆゑ皆で四つ出來る譯です。第一の方は直覺判斷と云ふのであつて、今お話したやうに、度々慣れて居ることは、一々考へて見ないでも直に分つてしまひます。例へば、これは時計である、これは白墨である、これは洋燈であるといふ樣に、何も特別に考へずとも直ぐに覺つて行くことの出來る

のが、直覺判斷であります。諸君が通常事を決定なさる場合に、普通に慣れてお出なさることは、皆直覺判斷で定つてしまうから、別に一々お考へなさる必要はない。朝起きれば顏を洗ふことは定つて居る、御飯を召上ることも定つて居る。御飯を喰べるに三杯以上を喰べるべからざるものであるといふ規定はなけれども、自然と定つて居るのは習慣の働であります。尤も何をするにも、一々考へねば出來ぬ人がありますが、普通の人なら平常の事は直ぐに定めて行くことが出來ます。さういふのを總て、直覺判斷といふのであります。今一つの方のを思慮判斷といひますが、これはどつちが可いだらうか、此方が曲つて居るのか、此方が正しいのか、これが美しいのか、あれが美しくないのかといふ風に、兩方の考の同時に心に現はれたものを定める働であつて、それが定まらぬ間を思慮といふのであります。一方には斯うであるといふ考があり、他方には又斯うではないといふ考があつて、此方に賛成したものか、或はあつちに賛成したものか、どつちとも定りが付かぬ間が卽ち思慮であります。物を思慮するといふことは、非常に大切な事でありまして、たゞ餘り思慮に過ぎては不可ませんけれども、思慮の乏しい人は、何でもオイソレと早合點をして仕舞ひますから、度々失策ることが出來ます。慣れぬことや、大切なことは、何時でもこれは斯うだと思ひましても、尙ほそれについて反對のことを考へて見ねばなりません。例へば、人が何か都合の好ささうな如何にも儲かりさうな旨い話を持込んで參りまして、成程これは好いことであると思ひましても、併し又何か惡いことはないかしら

んと色々に思慮して見る必要があります。詰り善い方ばかり考へずして、惡い方の事もよく考へ、兩方を公平に較べて、愈々間違いないと云ふことを判斷した上に好いと定むべきです。若しどうも疑はしいどうも不可ないと思ひましたら、斷然不可ないと云ふことに定めるが宜しい。此樣な智力作用を思慮判斷と云ふのであります。

(五)輕斷の弊　一體普通の考へ方の足らぬ人や、餘り輕卒な人は、何か大切な事でも、直覺的に定めて仕舞ひます。今日も御婦人が大勢お出でになりましたが、新聞等を見ますると、三面の記事の中に婦人が種々瞞されて酷い目に遭ふ話が澤山あります。是れ皆多くは、思慮が足らぬ爲めでありまして、彼の外國へ連れて行かれる婦人とか、或は工場などへ買はれて來る婦人とか、さう云ふ人々の事情を聞いて見ますと、實に氣の毒なのが間々あります。此のやうな人々は、思慮が足らぬ爲めに、人がうまい事を云ふと直ぐ乘せられてしまふのです。さう云ふ時には今少しその樣に善いことばかりではなからう。何か惡いことがありはせぬかといふことに考へ及ばなくてはなりませぬ。尤もそれは婦人ばかりが惡いのではありません、親や兄弟が慾に目がないから、深く思慮する遑なく直ぐに承諾して仕舞ふのでありますが、兎に角前にも申しましたやうに、物を思慮すると云ふことは實に大切なことであります。是等の婦人も無論幾分か考へても見るのでありませうが、其考に缺けて居る點がある爲めに、飛んでもない目に遭ふのでありまして、これ卽ち思慮が足らぬからであります。

(六)過慮の弊　併しながらこれと反對に、何でもないことを色々考へて決心しないと云ふことも不可ないのです。私が田舍へ行つて居りました時に、或る山奥へ商人が物品を賣りに參りました。其時農業者などの買物をする狀況をよく見て居りますと、何でも三錢五厘の買物をするのに、色々に値切つて居りまして、アレコレと見た上で、買はうか買うまいか、こつちにしやうか、あつちにしやうかと、色々と考へて居るのです。私は用事があつて其處を通る時に、丁度朝の八時頃でしたが、九時に復其處を通ると、矢張前の人が居りましたから、鳥渡立ち止つて見ますと、矢張例の三錢五厘の買物を何方にしやうか、此方にしやうかと頻りに押問答をして居るのです。詰り其僅な買物をするのに一時間も費して居るのです。一時間と云へば長くはないかも知りませぬが、マア考へて御覽なさい。一時間に三錢五厘、よしまるで儲けた處が三錢五厘ではありませんか、もしも時を惜しむ人でありますならば、一時間の價値は三錢五厘ばかりであると云ふことはありますまい。さういふことは實に愚な話であるといはねばなりません。有り觸れた物ならば一寸見ると直ぐに分りますから早くドッチかに定めてしまうがよいのです。ところがさう云ふ人達には中々それが六つかしいのです。平生ちやんと癖を付けて養つて置かないと、思慮すべき時に思慮せず、思慮せぬでもよい時に要らぬ思慮を費すやうな詰らぬ事をするやうになります。

(七)判斷と賢愚　判斷の項でも申しましたやうに、人は一般に判斷作用が明かでなくてはなりません。

昔から偉い人は判斷がよく出來ますから、何でも其人に相談すれば、自分の心を惱まして居る事でも、直ぐにこれは斯うあれはあゝと、筋道を立てゝ呉れますから、よく分るのです。斯う云ふ悧巧な人は、平生から些細な事でも何でも明かに考へて行く習慣を付けて居りますから、どんな六つかしい事でも直覺的に整理する事が出來る樣になるのであります。丁度皆さんが道をお歩きになつて、勝手を知らぬ二ッの岐れ道に出遇はれた時に、此方へ往く方がよいだらうか、あつちへ往く方がよいだらうか、「往かうか倫敦、戻ろか巴里」といふやうな風に、色々と思慮して、其結果此方へ往くのが正しいと思へば、決斷して其方へ往かれるでありませう。併し諸君が住んで居らるゝ町を歩行なさる時には、ちやんと分つてお出なさるゆゑ、直覺的に何處をどう行けば何處へ出ると、モウ先の方は考へずとも自然に直ぐ間違はずに目的の處へ行く事が出來ませう。さう云ふのは直覺判斷をして行くのです。併し私などは此邊の道をよく知りませぬから、迚も直覺判斷は出來ません。少しマゴつくとこゝへ來るのでも此方へ往つたらよいか、あつちへ往つたらよいかと考へ、しまひには車夫などに賴んで判斷を借りねばなりませぬ。さう云ふ譯で、段々偉い人になると、何事でも大概の事は直覺的に覺つて仕舞ひます。商賣人は商賣の事に就いて種々經驗をして居りますから、其經驗のない人に較べると、非常に直覺判斷に長けて居ります。例へば、此頃の樣に世が不景氣になりますと、經驗のある人は、これは斯ういふ譯から不景氣になつたのであると云ふことが分ります。ところが若い人などは、所謂五

里霧中に在るのでありますから、狼狽へていくら考へても分らない。遂に好い加減な當推量をして非常な失敗をします。それで大概思慮判斷と直覺判斷との區別がお分りになつたらうと思ひます。つまり、思慮判斷と云ふ方は、餘り自分の經驗せぬ間に行はれることでありまして、經驗を積むに從つて、それが直覺的に分るやうになつて參ります。ですから偉い人だけ直覺判斷が多くなるので、世の中を譯なく渡つてゆくことが出來ます。特に聖人などいふ人になりますと、殆んど物事に心を苦めずして何でも正邪善惡の判斷がよく分ります。すべて思慮判斷を借らずに直覺判斷でやつて行くのは人の進歩を表はすのであります。

(八)包含判斷と表出判斷　次に包含判斷と云ふのがあります。これは一々ちやんと判斷を言ひ現はさずして、半分は自分の心の中に含ませて置くのです。例へば、時計を判斷するに、「時計は時を計る器なり」と眞面目に言ひ表はすのは表出判斷でありますが、通常の事は大概包含判斷で濟みます。直智判斷で濟むことは殆んど包含判斷で濟みます。卽ちたゞ時計といへば、時を計るものであると云ふことが含まれて居るのです。「雀が、雀が」といへば、もう其處に雀が飛んで居るといふことを判斷して居ります。それを「雀が飛んで居る」と一々眞面目に云へば表出判斷の形になるのであります。此表出形式に據つて、例へば、「時計を見て吳れ」と言ふと、其時にたゞ時計を見たゞけでは仕方がないのであるが、其中には既に時を見て知らせて吳れと云ふ事が含まつてゐるのです。それを一々生帳面に

表出しやうとしましたならば、五月蠅くて仕方がありません。「一寸あれを」と云ふ處を、「お飯を喰べる二本の棒をこちらへ持つて來てお吳れ」と云ふやうなことを言つたならば、どうも五月蠅くて耐らず、根氣が盡きて仕舞ひませう。「オイ其處に」といふと直ぐに分る場合と同じ事で、人間の智慧は一々正しく言ひ現はさずとも、何か一寸言へば、全體が分る事があります。普通の場合は包含判斷——頭腦の中に含まれて居る判斷——の言ひ表はし方で濟んで居ります。併しながら學問上の正しい言ひ表し方になりますと、どうも包含判斷では濟まされません。必ず表出判斷の形式を取らねばなりませぬ。

第二節　命　題

(一)表出判斷と命題　論理學で使用する命題といふ言葉がありますが、それが卽ち、表出判斷に當るのです。例へば、論理學の命題に、「人は死すべきものなり」といふのがあります。斯ういふと、これは何人でも知つて居る事で事新しくいふ必要はありませぬが、何人にも分るやうに斯ういふ命題を學問上で使ふのであります。もとより「朝には紅顏あつて夕には白骨となる」といふことは、誰でも少し考へれば分る。イヤ考へないでも分つて居りますけれども、通例は皆自分ばかりが百年も二百年も生きて居る積りで居ります。併しイクラ長く生きても、さう永久に生きて居るものではありません。

人は必ず死すべきものであります。かう云ふ言ひ現はし方を表出判斷といふのです。何故かと云ふと、「人」と云ふことゝ「死すべきもの」と云ふことゝ、此二つの考へを較べて見て、前にお話した「牛は動物なり」と云ふのと同じやうに、「人」と「死すべきもの」と云ふことゝを較べてこれを連結させ、「人は死すべきものなり」といふ言葉で概言したのであります。即ち死ぬものは人の外にも澤山ありますから、その大きな「死すべきもの」と云ふ中に、人は一部分となつて入るのです。人の外にも、死すべきものといへば、牛も居れば、馬も居り、猫も居れば鼠も居ると云ふやうに、いろ〳〵の動物が居ります。其外、草も枯れるし、木も朽ちる。一切の生きとし生けるものはみな死ぬ。其中に人も入るのですから、「死すべきもの」と「人」とを較べて、其中のものと定めて、文章に言ひ現はしたのです。

(二)表出判斷と句讀　御承知の通り、作文では斯う云ふことを句と云ひます。句と云ふのは、一つの文章をなすものであります。「人は死すべきものなり」と云へば、チャンと意味が分ります。皆さんが新聞や雜誌を御覽になると、文章の間の符號に「。」の付いたのと「、」のとありませう。此「、」の事を「トウ」と云ひます。讀と云ふ字を書いて「トウ」と讀むのです。それからこの「。」の付いて居る處を句と云ひ、二つ合せて句讀と云ひます。句讀を切ると云ふのは、「。」を付けた處はチャンと一つの文章をなし、意味をなすことを意味するのです。それですから人がそれを讀む時に、「人は死すべきものなり」と續けて讀んでも宜いが、「人は」と切つて、「死すべきものなり」と云ふやうに、

作文の方では分れて居ります。この一つの句になる處が、大概其判斷を言ひ現はしたものであります。ですから文典の方では句と云ひますし、心理學の方では判斷と云ひ、論理學では命題と云ふのです。かくいろ〳〵に名は變つて居りますけれども、それは其學問の如何に依つて區別があるので、詰り一つ思想の現はれであります。

(三)主辭と賓辭と連辭　今論理學の言葉を以て言ふと、「人」と云ふ語は判斷をする主人公であります から、是れを主辭と云ひます。その「死すべきもの」と云ふのは、「人」と云ふことを定める爲めに持つて來たお客樣ですから賓辭と云ふのです。それから、「なり」と云ふことは、「死すべきもの」と云ふお客樣のうちに「人」といふ主人公を入れ、お客樣と主人公とをチャンと結び付けて居りますから、これを連辭と云ふのであります。どんな簡單な論理上の命題でも、どんな六づかしい命題でも、あらゆる命題は皆此三つしかない。即ち主辭・賓辭・連辭の三ッに限られて居ります。

(四)肯定命題と否定命題　此「なり」と云ふことは一致を現はして居るから、此の語の付いたものを肯定命題と云ふのであります。ところが此外に「なり」ではなくして「あらず」と云ふのがあります。例へば、「人は不死物にあらず」と云へば、死なないものと人とが一致しないことを現はして居ります。さう云ふのは一致しないことを現して居るから、否定命題或は否定判斷と云ふのです。さう云ふ場合には、人と不死物とは全く關係ないことになります。即ち一方に「死なないもの」があり、他方

に「人」があつて、「死なないもの」と「人」とは何の關係もありませぬ。若し人が死なないものであるならば、佛敎に言ふやうに、無量壽佛卽ち阿彌陀佛であつて、不生不滅と云ふことになります。それではモウ佛であつて人間ではないのですから、「人」と云ふことゝ、「死なない」と云ふことゝは、一致しません。そこで「人は死なないもので無い」と云ふ命題になります。要するに、さう云ふのは何方にしても表出判斷であります。

第三節　判斷を誤る原因

(一)明確觀察の缺乏　判斷を誤る原因には、大體四つあります。其原因を諸君がよく覺えてお置きになれば、判斷は正しく出來て行く譯であります。其原因の第一は、明確觀念の缺乏です。それはどう云ふことかと云ふと、初に自分が物を見たり聞いたりする時に、判斷の土臺がハッキリして居ないから、間違が起るのです。例へば、人を見るにしても、その見方がぼんやりして居る。固より人を見ると云ひましても、望遠鏡で見ると云ふ譯にも行かぬし、顯微鏡で人の眼玉を見るといふ譯にも行きませぬ。けれども、大概此人物はどうである、かうであると云ふやうに、色々の見方がチャンと明かになつて來ないから、其人の爲に自分が騙されるといふ事になるのであります。そこでアノ人は深切なやうに見える。今斯うやつて斯ういふ事をして居るが、此人には斯ういふ事がある。斯ういふことは

アノ人の缺點で油斷がならぬ、と云ふやうに、善い處と惡い處とを明かに觀念して居れば、決して騙されると云ふ事は無い筈であります。

男女に限らず年齡少くして經驗に乏しい者ではなか〳〵正確な判斷がつき惡いものです。卽ち觀念が茫やりして居るから、惡い事が有つても見えないで、善いやうに思つて、騙されて仕舞ふのです。婦人が小說を讀む必要は、何處に有るかといひまするに、卽ち一はさう云ふやうに人を見る觀念を養ひ、人の見方を明かにする爲めです。小說などを讀むと、非常に初めは善い樣であつて深切にして吳れる人も、其深切は狠のやうな心であると云ふ事が分ります。又反對に初めは殘忍であるとか惡い人の樣に思つた人も、實は正直な人で存外善い考を有つて居つたと云ふ事も分ります、ですから容貌や態度や言語といふ樣に、其人の外面に現はれる事柄ばかりで判斷すると誤りに陷いる虞があります。小說などをよく注意して讀むとこの消息が分ります。總て私共は人を見る明を養うて、容易に誤らぬ樣にしなくてはなりませぬ。それには何でも始の觀念が明確でなくてはなりませぬ。それは唯言葉のみではありません。學問上の知識でもさうです。例へば、葱とアサツキと云ふ物は皆さん方は必ず御存じでありませうが、一體葱の類を我國では昔は唯「キ」と言ひました。併し「キ」と云ふ名だけでは「木」とも、間違ひますから、根を多く喰べるといふ意味から「ネ」の字を付けて「ネギ」と言つたのでせう。それと同じ理屈で、アサツキは根が淺いからアサツキと言つたのでせう。それは言葉の

講釋でありますが、ドチラも同じ種類でよく似て居るのでボンヤリして見て置くと、ドッチがアサツキだかドッチが葱だか分りません。さう云ふ樣な工合に、初めにチャンと明かに此點がアサツキの特色である、此の點が葱の特色で有ると云ふ事を明かにして置きませぬから、後で何だらうか容易に判斷が付かぬ、のみならず詰り判斷を誤つて仕舞ふのです。葱とアサツキの間違ひだけではない、總て大事な事も其通りであります。例へば、自分が經驗をして見たり聞たりする時に、氣を注けて明かに區別して置くことが必要であります。さうしないから段々進んで來て分らなくなつて仕舞ふのです。心理の學問をするのでも、初め感覺はどう、知覺はどう、觀念はどうと云ふ事が分つて、居ないと、後に觀念と言つても、知覺と言つても感覺と云つても、皆一緒になつて仕舞ひ、薩張り分りませぬ。これは宗教の書などを讀む人には別して大事なことでありまして、初めに先づチャンと大事な出發點に就いて明かな觀念を持つ事が必要であります。ですから、皆さん方が是から何を御覽になつても、初めて經驗なさる事をよく注意して見て、何處はどうなつて居ると云ふ、大事な特色の有る處を氣を注けて見て置くべきことでありまして、之を怠ると觀念が明かでありません。

(二)菽麥を辨へざる者　曾て學習院の子供等に米俵と云ふものはどの位の大きさかと問ひましたら、手にて直徑三寸位の形を書いて、この位だと言つた者が有りました。畢竟是れは明かに米俵を觀察して居ない證據であります。日常街路を行けば、米屋が車などに載せて通りますからよく氣を注けて見

て居れば、米俵はどの位の物かといふ事が分るのです。處がお祭りの時に小さい俵を提げて行くのを見て、米を入れる俵だと思つて居たのです。それから一人が、一日に何程米を食べるかと問ひましたら、一合食べると云ふ者もあり、一度に五合食べると云ふ者もあつて、詰りさういふ事がトント分つて居りませぬ。卽ちさういふ事に對して明かな觀念を有つて居ないのは、女中の働く處を見た事もないからでせう。昔の諺に、菽麥を辨せざる者と云ふ事がありますが、豆と麥との別が別らぬ程馬鹿な者を指していつたのでありませう。最も現今の教育はさうでありません。畏くも今上天皇陛下さへ、皇太子殿下であらせられた頃、學習院に於て、實物に就てさういふ事を御習ひになつたのです。それを老人などが拜見して、恐れ多く思ひ涙を流したといふことです。

それはどう云う樣に御教育申し上げたかといひますと、殿下御自身に大根人參などの植ゑてあるのを御覽になつたり、又御手を取つて御覽になるといふ風に御教育申上げたのです。ですから、大根といふものはどう云ふ風にして生えて居る物だ、大根には根と葉と莖があつてどう云ふ風になつて居るといふやうなことがチャンと確り御分りになり、明から觀念をお有ちになつて居られます。そこで方々お歩きになつて、田舍などへお出になつた時にも、此處に人參がある大根がある、と御指點になり、その根とか葉とか莖とか云ふ事までくわしくお話になりますので、お附の人々が皆驚きました。併し何も驚くことはありません。さうして御育て申さねば、どんな高貴なお方でも、所謂菽麥を辨せざる

者になつて仕舞ひ、大きくなつても、薩張り茫やりした役に立たぬ人となられるでせう。斯く何事も正しき觀念を與へる事が大切であります。

諸君が魚屋が來て魚を切るところを見てお出なさると、身體に就ての知識が得られます。魚の肉の間には白い筋があります。其白い筋は何でせうか。私が前にお話した神經系統の筋がこれです。或は血の出る筋は動脈であると云ふ事も分ります。或は魚には浮袋があり、腸があり、胃があると云ふ事などもよく分ります。又鳥の料理をするのでも、牛肉を料理するのでも、そんな事をよく注意して居ると、明かに生理の觀念が出來て參ります。かく萬事に氣を付けて居れば、明かな觀念が出來、隨つて判斷を誤ることが少くなるのであります。詰り御婦人方は、着物や何かの事に非常に氣を注けておいでなさるから、明確な觀念が有りますが、私共は到底一見したところで、アノ人の着物はどう云ふ物で縞がどう、柄がどう、縫方がどうと云ふやうな事は分りませぬ。併し御婦人方でありますと、それがよくお分りになるやうです。ところが洋服であると、まだチョッと御婦人方に分りませぬから、婦人の處へ往くのには、洋服を着て往くに限るといふ人があります。……要するに、何事に對しても明確な觀念を有つ事が必要であります。

(三)思考時間の缺乏　次には時間缺乏といふことに就いてお話いたします。世の中に不思議な物は多くありますが、時間ほど不思議なものはありません。昔から多くの哲學者が頭腦を苦しめて今日に至

りましても、時間は一體どう云ふ物であるか分りませぬ。併し通常の考では時間は時計がカチ／＼鳴つて過ぐることである、現に五分經つたではないか、それが時間であると云ふ樣に考へますが、併し何も時計がカチ／＼と鳴ると云ふ事が時間と關係がある譯ではありません。それは唯ゼンマイの彈力から起る機械の運動する音で、時計が有つても無くつても時間は存在して居るのであります。人が何事をなすのでも、時間があるから出來るのでありまして、私が斯うやつてお話して居るのも、時間があるから出來るのです。もう少し經つと時間が過ぎて仕舞ひ、講話が出來なくなります。又赤ン坊が大きくなつて立派な大人になるのも、時間に依つて出來ます。二本棒の涕汁を垂らしてお母さんにお菓子など貰つて居た女の兒が、大變美しい姉さんになつて着物などを氣にして何遍も後方を向いて帶を捻くつて見る樣になるのも、矢張時間に依るのであります。又腕白で仕方のなかつた子供が、天晴れ大政治家に成つたり、大文學者になつたりして、世人を驚かすのも、時間のお蔭です。さうかと思ふと時間ほど惡戯者は無い。無遠慮に人の物を毀して行きます。例へば、此家でも久しく捨てゝ置くと、時間と云ふ惡戯者が毀して、屋根が漏るやうになつたり、或は壁が傾くやうになります。それですから貴君方も、段々年が寄つて白髮のお爺さんとなり、お婆さんとなり、詰り終には死んでお仕舞ひなさるのです。大政治家だの、大學者だのと云ふ樣な人々も、いつまでも生きる譯には參りませぬ。西園寺さんは勳功によつて公爵になられ、東郷元帥は東洋のネルソンと言はれますけれども、十年か

二十年の後にはお氣の毒ですが死んでお仕舞なさるでせう。と云うて何も私が殺す譯ではありません、時間と云ふ惡戯者が殺すのです。實に時間程不思議な物はありません。

偖てどうして時間といふ物は出來て居るだらうか？是れは人間の心の中に有るだらうか？外に有るだらうか？兎に角さう云ふ事を知りたい處から、皆さんが哲學を學ばれ科學を學ばれるのです。さうすると、時間と云ふものはどう云ふ物かと云ふ事が分ります。此時間が足らぬと判斷を誤ります。どんな偉い人でも、瞬間にやつては何事も中々旨く出來ませぬ。固より可なりよく出來る人もありますが、熟れない人が偉い人の眞似をして輕卒な判斷をすると、何時でも判斷が間違ふのです。ですから段々練習を積んで、初め永い間掛つて充分判斷をやつたのが、度重なるに從つて時間を短かくして直覺的に出來る樣になるのです。卽ち鑿と云へば槌と云ふやうな工合に出て來るやうに養つて參る事が必要であります。婦人が初めて他所へお嫁に行つた時や、男子が銀行なり會社なり學校なりへ行つて初めて仕事をする時に明日は斯うせねばならぬ、ア、せねばならぬと、豫めよく考へて往つて仕事をするやうにすれば、姑なり上役の氣に叶つて家もよく治まり出世も出來ます。それを何も考へずにおいて、瞬間に好い加減のことをやりますと、往々失策つて仕舞ふのです。すべて時間を十分に掛ければ、鈍いけれども間違はありません。初めて婦人がお嫁に行つた時には、不思議に役に立ちませぬ。香の物を切るのでも、一つに一分宛も掛つては困りますが、併し急いで好い加減な事をやつて自分の

手を切つて血を出したり、さも無くとも、よく切れないで何だか香の物の鈴生りのやうな風になるより宜いでせう。たとひ少しは鈍くも、叮嚀にして往けば、明かに判斷が出來、次第〳〵に熟れて參りますれば、時間は少くても旨く出來るやうになります。そういう事は練習に依つて出來るもので、それが習慣になつてモウ考へずに出來るやうになるのです。

(四)禪と判斷力　茲に物事を早く判斷する法があります。それは禪の修養です。參禪するには色々の目的があり理由もありますげれども、知識の方面から云ひますと、禪の作用は、擊石火・閃電光と云ひまして、石を擊つと火がパッと出るとか、電氣がピカと光るとか云ふ樣に、極く瞬間でありますが、其瞬間にチョッと判斷をして仕舞ふのです。さう云ふのが所謂機鋒鋭利と云ふのです。何か問はれてそれをマゴ〳〵狼狽へて居ると、直に三十棒を喰はすと云つて打ち毆かれ、或は喝を喰ひます。さういふ時にはマア何でも宜いから、其處へヒョッと浮んだことを直に言つて仕舞ふのです。例へば、雲水が餘所のお寺へ尋ねて行つて、今夜泊めて貰いたいと云ふと、直ちに何處から來たと問はれます。その場合に、「エ、私は京都西洞院東へ入る何町目何番地何屋何兵衞の息子」などとやつて居ると、「馬鹿野郎がッ」といつてポカンと遣られて仕舞ひます。詰り機に乘じて答へる外無く、そしてそれが面白いのです。さういふ場合に愚圖〳〵して居つては不可ぬ。何を云はれても物の影が鏡に寫るやうに判斷して行くことが出來るのが、眞に機鋒の鋭い處であります。ですから、禪を本當に修行した坊さ

んは、薩張りしたものであります。決して物に頓着せず。又狼狽へない是れは斯うとすぐに判斷を定めます。無論俗の事や何かで熟れない事には考へもするでせうが、何しろ物に拘泥しないと云ふのは、平生さう云ふ習慣を養ふ處から出來るのです。かう云ふ點から禪を評しますと、最も短い時間に最も善い判斷をする法で有ると云つて宜しいのであります。もとより是れは禪の全部ではありません。禪にはいろ〳〵向上する法がありますけれど、智慧の方面から云ひますと、今言つたやうな事になる譯であります。御婦人などは、何も禪をなさらんでも、其法を修養なさる處はいろ〳〵あります。即ち殆んど參禪したと同樣に、平生物事を叮嚀にやつて、段々熟れるに從つて早く行つて綺麗に出來るやうになさるが宜いのです。縫ひ物をなさるのでも、初めは針一本宛で叮嚀に縫つて居たのが、漸次練習を積んで終には早縫ひを稽古すると云ふ風にやつて行くのです。さう云ふ事もやはり判斷力を養ふ助になります。

(五)輕　信　第五には輕信と云ふ事であります。輕々しく信ずる事はどうも不可ないことです。凡て物を輕々しく信ずるといふことは、一は其人の性分にも因ります。全體世の中には飄輕な人があるかと、思ふと一方には閻魔が鹽を舐めた樣な人もあります。……私は閻魔を見た事はありませぬが、繪に描いたのを見ると、何だか六つかしいお爺のやうですが、……それが鹽を舐めた顏は定めし隨分烈しい顏をするでせう。尤も今日の新聞を見ますと、鹽を二合舐めて死んだ者がありますから下手には

舐られませぬけれども、何しろムツチリとして餘り重々ししくて容易に話などを爲ぬ人があります。かやうに人には飄輕な者があり、又重々しき者もありますが、通常の人はそれが混つて居るのです。所が輕信は多くの場合に、飄輕な人がする事で、チョッと何か言ふと直ぐに覺り、まことに氣がよく付くやうですけれども、餘程輕々しい所があります。人が「今日は苦しくて死にさうだ」といふと、「左樣か」と云つて直ぐ葬儀屋に棺桶を買ひに行くと云ふ風です。即ち死にさうだと云ふ事を死んだと判斷して仕舞ふのです。さう云ふのは氣が利き過ぎて却つて間が抜けて居ります。勿論さういふ樣な極端な人も無いけれども、物事は決して輕々しく信じてはなりませぬ。諸君が考へて御覽なさると、自分の氣質は重々しい方であらうか、或は輕々しい方であらうかと云ふ事がよく分ります。そこで其考に從つて餘り自分が輕卒で不可ぬと思へば、氣を付けて之を直すやうにするがよいのです。懇意の人の言ふ事でも、人が云うたことを疑ふのは氣の毒であると思つて、好い加減な返事などをしては不可ません。すべて人の云ふことを直ぐに受取つてはなりませぬ。併し又人を見たら泥棒と思へと云ふ諺も隨分酷い話で、世の中にはさう泥棒ばかりは居ませんが、假令泥棒でなくともマア人の云ふ事は決して輕々しく信じてはなりません。物事は總て反復叮嚀よく考へてするやうに戒めなくてはなりません。

世間には狼のやうな者が居りまして、貪婪飽くなき我慾の爲に人を紿く事があります。今日も某新聞

に、僅な資本を出して大そう儲かる蠟燭を拵へる器械を賣り付けると云ふやうな記事がありましたが、かう云ふのでも、旨い話であるから、慾の深い人が輕々しく信じて、よく考へもせずにやると大失敗を來すのです。ところが大體の知識があつて考へれば、輕々しく迷ふ事をせずに濟みます。詰り直ぐ安請合をすると云ふ事は、判斷を誤る基であります。現に私が知つて居る婦人で、氣の毒な人があります。是は高等の教育を受けた立派な人でありますが、自分の厭な人の處へ緣付ると云ふ事を親から言はれて、輕信と云ふ譯ではありませんけれども、マア安請合をしたのです。全體其婦人は厭で堪りませぬから初めは其家へ嫁くのはどうか宥して呉れと云ひましたけれども、餘り親から勸められるので、如何かなるだらうと云ふ積りで、それでは嫁きませうと云つて請合つて仕舞ひました。そこで親は、娘が嫁くと云ふ事になつたから、チャンと結納を遣つて仕舞ひましたが、どうも其家へ嫁くのは氣が進まないのです。さて今厭だと云ふと親が困る場合になる、そんならと云つて其儘嫁けば自分を殺すやうなものでありまして、大そう困りました。一體さう云ふ者を餘り強ひて遣れば、向ふに對しても、自分に對しても、不幸であります。それですから、さう云ふ事はよく戒めねばなりませぬ。人の言を信じても、又安請合をしても、詰り判斷を誤つて仕舞ふのです。初めから如何しても嫁かぬと云つて拒んだならば、親もさうはしなかつたでありませうが、其處が卽ち輕信も有つたのですから、結局はそんな工合になつて仕舞つたのであります。どんな旨い事を人が云うても、又どう深切な言でも、よ

く考へて全體の關係を調べた上でなければ、輕々しく信じてはなりませぬ。

(六)偏　見　第六は偏見です。人に偏見の無い者は殆んど無い位であります。偏見と云ふのは平たく言ふと片寄つた考へです。例へば、耶蘇教でなくてはならぬと思ひ、耶蘇教の言ふことならどんなことでも正しいと思つて居ります。又佛教の信者は、佛教で說く事ならどんな事でも正しいと思つて居ります。自分の好いた人だと、アノ人の言ふ事は何でも間違ひないと思ひ、或は何か彼は氣に喰はぬ奴だと思ふと、何でも間違つて居ると考へ、眞理でないやうに考へるものです。さう云ふ樣に、兎に角人には片寄つた考へが有りますが、其偏見は何處から來るかといふに、皆感情から來るのです。卽ち人の感情が偏見を作つて來るのですから、情は大事なものであります。それで今日では情の學問も大いに進んで來まして、情の事に就いては色々面白い事が澤山あります。すべて智慧を働かす時には、情は無くして仕舞はねばなりませぬ。婦人が兎角偏見に陷り易いと云ふのは、どう云ふ譯かと云ふと、婦人は概して感情が強いからであります。それは婦人の長所であつて、又同時に短所であります。學校の先生でも婦人は、愛憎の念が強くて困るといふことです。例へば、子供に對しても、大さう憎む子供と可愛がる子供とがあつて、可愛がる子供は莫迦に可愛がりますが、憎む子供は非常に憎みます。さういふ人が學校を管理するのは危險であります。一般の婦人が必ずしも左樣だとは言へませぬが、感情の强い人が多く偏見に陷り易いのです。兎角色眼鏡を掛けて物を見ると判斷を誤るものですから、

彼奴は憎いけれども併しその言ふ事は眞理であるといふ風に、感情と道理とはチャンと別にせねばなりません。是れは六つかしい事でありますけれども、實際眞理を求める爲めに正しく學問をするには、自分の思うて居る方に偏見はありはせぬか、或は感情に驅られて居りはせぬかといふことを考へて、成る丈け感情を去つて、公平に判斷して行かねばなりませぬ。

(七)結　論　以上六つのことに氣を注ければ、判斷を誤る氣遣はありませぬ。何でもどうしたらよいか、何方に就くべきか、といふやうな場合に、以上六つのことに氣を注ければ、間違ひないのです。若し時間があるなら、私はよく考へて見ますから少し待つて下さい、といふ風にして時間のあるだけいろ〳〵の方面から考へて見なければなりませぬ。何でも輕信や偏見に陷らぬやうに、十分に思慮して後決定することが必要です。

第四節　判斷力の養成

(一)判斷力養成の必要　前に一言しましたやうに、判斷といふことは大切な働きで、人の智慧といふのは殆んど判斷の働きであります。人が物を覺えたり、人のことを思ひ遣ることが出來、又よく物を見分けるに、どういふ形を取つて働くかといふと、何時でも判斷の形で働くのであります。前にも申しましたやうに、人の賢不肖といふことは大概判斷がよく出來ると否とによつて分れるのです。それ

ですから平生判斷力を養ふのは大切のことであります。諸君は、教師として、生徒に物をお教へなさる時でも、又御自身で何かなさる時でも、自分で自分のことを判斷なさることが大切であります。例へば、婦人はよく人にたよるものでありまして、全く自分の考が空で、何事でもどうしたらよいか分りませぬといつて、お母さんとかお父さんとか先生の處へ往つてたよります。それは不可ない。又お父さんやお母さんがその要求を容れて直ぐに判斷してやるから不可ないのです。一體お前はどう思ふか、何んな六ッかしいことでも間違ひでもよいから、兎に角御前の考をお言ひなさいといふやうにして、習慣を付けるがよいのです。

(二)判斷力の練習　私は子供の五つ六つくらゐの時なら、判斷をすることを稽古させてお前はどう思ふかと尋ねて、必ず考を言はせます。さうして若し容易に言へないことがありますと、それをこつちから導いて、兎に角自分だけの考を言はせて試ることにして居ります。さうすると飛んでもないことを言ふことがあります。例へば、ある時などは、私の家に植ゑて置いた菊が枯れましたから、「菊が枯れかけた、どうしたらよいだらう」と言つて話して居りましたら、其時に丁度六つになる女の兒が、それは加藤さんに診て貰らへばいゝと申しました。加藤さんとは醫者のことであります。自分等の病氣の時には加藤さんに診て貰ふから、菊が枯れかけたのもお醫者さんに診て貰へばよいと思つたのであります。是れは子供の判斷でありますが、自分等の惡い時に醫者に診て貰ふから、菊の惡い時も診

て貰ふがよいといふのは、道理を考へて得た判斷であります。勿論それは間違つて居ますけれども、子供相應に心を働かした處に價値があります。ですから何か起つた時に、是れはどうしたらよいでせうか、何方にしたら宜いでせうか、と云ふことを聞いた時に、お前はどう思ふか、「お母さんが敎へてあげるけれどもお前も一つ考へて御覽」と先づ子供に聞くがよいのです。或は間違つた事をいうても、笑つたり叱つたりせずに、徐かに考への間違つて居る所を敎へ、或は其考へが好ければ十分に褒めてやり「これから後も人にばかりたよらずに、自分でも之を判斷して見なくてはなりませぬ。併し自分だけで判斷して間違ふといけぬ故、お父さんや先生によく伺ひ、自分の考へと、お父さんや先生の考へとが、ちやんと一致するやうにならなくてはなりませぬ」といふ風に導くがよいのです。斯く何時でも心が働いて居つて何が出て來ても判斷を間違はぬやうにしてやらなくてはなりませぬ。

(三)陽明學の致良知　支那の王陽明といふ人は、人間は心を何時も醒まして居らなくてはいかぬといひ、心の醒めてチャンと働くといふことを、惺々と申します。醒めて居るといふのは、何事が起つて來ても其心でチャンと判斷をして、少しも心の睡つて居ない、茫やりして居ない狀態であります。それは平素心がけて、鍛錬して居らねば出來ません。王陽明の學問は、詰り、佛敎から出て居ると思ひます。佛敎では見性成佛と言ひますが、自分の心を知り、何時も自分を明かにし玲瓏たる鏡の如くなつて居るから、是れは間違つて居る是れは正しいといふことが直ぐに分るのです。御承知でもありませうが、藤原肅といふ德川氏時代の初めに出られた大學者があります。この人は王陽明の學問を日本で一番早くやつた一人であります。此人は此字を採つて惺窩といひ、何時でも醒めて居る窩といふ號を附けましたが、詰り心が醒めて働いて居るといふ處から付けたのです。そうすると、判斷の作用が何時でもよく出來るものでありますから、それを大切に養つて居なくてはなりませぬ。詐僞に罹るといふのは、大概心が茫やりして睡つて居るからです。御婦人方はよく覺えてお置きなさるべきことですが、夫の方が他所の役所などへ出て、おいでなさる、例へば、陸軍省へ出て居る人があると、陸軍省の制帽を冠つた小使が來て、今旦那さんが大禮服が要るから持つて來て呉れと言はれましたと申しますと、それを聞いて、左樣かといつて、何か御用があるものと見えるといふので、直ぐ大禮服を出してやると、あとでそんなことはないといふことが知れて、サア大變だ泥棒に取られてしまつたと、いふ騷ぎを起すことがよくあります。さういふ婦人は、心が茫やりして居睡りをして居るからです。もし其時に惺窩先生のやうに心が惺めて働いて居ると、さういふ大切なものを取りに來るには何か印を押して來るとか、手紙が來るとか、何の必要で大禮服をよこせとか、いふ風にする筈であるといふことに氣が付かねばなりません。さういふやうなことに氣が付かずに、迂濶に服を渡すのは不注意です。素よりそんなのは、畢竟計略にかける者が惡いには違ひありませんが、また御婦人の注意の足らぬといふ處からもさうなるのです。

(四)慾と判斷　併し又中には自分の方に慾が有る爲に、却つて天賽賭博といふやうなものに掛つて、大損をするのです。天賽賭博といふのは、何でもマッチを持つて勝負をするので、初の内は面白く勝たせるものですから、田舍の人などがつい釣り込まれて仕舞うのださうです。そんなのはつまり判斷の心が慾の爲め眩まされてしまつたのです。ですから前に申しましたやうに、きういふ時には沈着いて心を働かしてゆかねばなりません。又主人が他處へ行つて居る時には、互に申合せをして置くやうにするがよいのです。私の宅では家の者に、もし私が他から物を取りによこす時には、自筆で手紙を書いてそれに認印を押して寄越す。そうしたら渡してよい、さうで無ければ何品も渡しては不可い、と云ふ事を言ひ付けてあります。私共の家へ來ても、別に奪る物は無いから來はしませぬが、さういふ風にして取られないやうにして居ります。併しそれ以上の策を用ゐて取られるかも知れませぬが、私共は今の處は大丈夫であります。お互にさういふ風にして、つまり何時も心が醒めて何時何處から何事が起つても狼狽ずにチャンと考へて置いた通りにすると云ふ風にして置くが宜いのであります。是れはつまり判斷の大切なことをお話したのです。

(五)學校教育と判斷　凡て判斷力は學校で教育するのが大事です。判斷などは、何時でもやれますが、その重なる養成は學校でせねばなりませぬ。それは學校の先生が大いに技倆を振ふべき點であります。次に、各教科と、判斷作用の關係とを說きませう。

(六)手を動かす學科と判斷力　判斷を養ふ教科は澤山あります。どの科でも判斷力の養はれぬものは無いのですが、最も適當なのは書き方であると思ひます。例へば、天といふ字をお手本にして、子供が習ふ場合に、「天」と云ふ字はかういふ樣にして書くと云ふ判斷が正しく出來ず、或は判斷は出來ても是れを現はす事が出來ぬと、字はよく書けません。例令子供は其お手本の儘に書いたと思つて居ても、違つて居り、而かも、茫やりした者には、その何處が違つて居るのか分りませぬ。さう云ふ場合には、よく其判斷をさせるがよいのです。卽ちこちらの方が少し上つて居るとか、此處が下つて居るとか、さういふ事をよく子供に當てさせて見るのです。斯ういふ風にやつて見ると、お手本と自分の書いたのとが同じであるかどうかゞよく分ります。一組に六十人も有る生徒では手が届きませぬでせうけれども、斯う云ふ風にチャンと、何處が違つて何處が同じだといふやうな事を正しく判斷させる事が必要であります。繪の描き方も之と同じ事です。次は手工ですが、是は最も廣い意味に使つたので、裁縫も此の中に入るのであります。編み物も袋物なども矢張手工の中であります。其他金工・木工などいろ〳〵の物がありませうが、皆これ手工であります。さういふ物は、判斷力を養ふ爲めには甚だ有用です。裁縫なども、判斷がよくないと旨く出來ません。又箱を拵へるにも、判斷が正しくないと、正しい箱は出來ません。一般に手工はたゞ手細工といふよりも、心力の養成といふことが大事なのであります。

(七)文法と判斷力　其次は文典であります。文典にも色々な規則がありませう。文章の中に文典に違つた處が有つては不可ません。例へば、「ヲ」の字が「ハ」になつたのでも不可いことは、「富士川を下ると云ふ時に、「富士川は下る」と云うては不可ないやうなものです。そう云ふ風に、文典があつて、此處は「は」とせねばならんとか、上を承ける時にはどうせねばならぬとか云ふ事に就いて、是れが正しいか正しくないかの判斷を作つて行くのです。例へば、「私は明後日行きました」と云つては可笑しいでせう。「明後日行きませう」と云ふと、未だ行かないのです。それを「行きました」と云うては違つて居ます。「即ち過去・現在・未來の區別で、「行きました」とか、「行きます」とか「行きませう」とか云ふ風に、別々になつて來るのであります。そんな事を間違へた文では不可ないと云ふ事を文典で教へて行くのは詰り判斷力を教育するのであります。

(八)數學と判斷力　次は數學です。これは計算が正しいか正しくないかを調べるので、例へば、三と五とが八となりませう。すべて三と五とを一緒にした者は八に等しいと云ふ判斷をさせるのであります。故に數學は全く判斷の働で出來るのであります。又八から五を引けば三になると云ふことは、8−5=3と云ふやうに、式をもつて現はすのです。さう云ふ事を子供の時から正しく教へて行けば、正しい判斷をする事が出來るのです。

(九)遊戯と判斷力　特に人が餘り氣を注けないのは遊戯であります。子供の遊びにも規則のある遊戯

もありませうし、又自分の考へで隨意にする遊戯もありませう。さうすると、其考へた通りにチャンと遊戯が出來るか、或は規則に當らぬかと云ふ判斷を以て、アレは規則に違つて居たとか合つて居たとか云ふ事を悟るのです。それから、遊戯を適當にする子供は判斷もよい。之に反して、遊戯も何もせぬ樣な子供は茫やりして居ます。さういふ子供は何をしても觀念が明かでないから、明瞭に物事を判斷してゆく事が出來ぬのです。

(十)判斷教育の必要　次に判斷教育の必要といふ事は、前にお話した事で足りて居るから別に言ふ必要もありませぬが、何の爲に教育をするかといふと、智慧の教育について一番重に働くのは判斷であります。初めに子供の感覺を養ふといふ時でも、又その知覺を養ふといふ時でも、其物の思想の中心になつて働く者は判斷です。それゆゑ、世に立つ人、世の中に出て自分で事を決定して行く人を作らうと思ふなら、子供の時から此事を教へるのがよいのです。

第五節　判斷と教授

(一)判斷と教授　それから判斷と教授といふ事です。一體子供に物を教へる方法にはいろいろありませう。併し乍ら、教授上一番大切な所謂極意といふ者は何であるかと申しますれば、巧みに判斷するといふ事であります。即ち先生が判斷作用を巧みに使つて行く事であります。それはどう云ふ事かと

いふに、すべて人は分らぬ事が有ると、非常に心を惱めるものでありまして、皆さん方が本をお讀みになつても、人の談話をお聽きになつても、分らぬと氣になるでせう。それは普通の人ならばいろ〳〵の仕事があつて、それを一々氣にして居る譯には參りませぬが、學問でもする人は、分らぬ事が有ると氣になつて、知りたい〳〵と切に思ふものです。子供にもさういふ心を與へて、物を敎へる時に、分らぬなら分りたいといふ心を與へ、分るやうにしやうと思つて自分で進むやうにせねばなりませぬ。私は曾て現在の女子學習院が華族女學校といつた頃、參觀に行つていろ〳〵敎授の仕方を視た事がありましたが、その時に最も感じたのは津田梅子といふ女の先生です……此人は現今英學塾を起して、他の學校へは出て居られません　……此人の敎授法は、師範學校で敎育學を學んで、小學校の先生をして居る人以上に巧みなものでありました。津田さんの組は大概、十六七から二十歳位のお姫樣達が居られまして、確か十五六人もありましたらう。その敎室に人が這入つて行つてもナカ〳〵「誰か來た」と側見をする人はありません。私はさういふ點は寔に奥床しいと考へたのです。其時に先生が英吉利の歷史を敎へて居られましたが、先生から問を出されました。イクラお姫樣でも必ず學問の出來る人ばかりとは限らないから、「ドナタか出來る方はありませぬか」と言つて先生は暫く待つて居られましたが、誰も答へない、……卽ち手を擧げないのであります。かういふ時には大概の先生ならば、それではと言つて話して仕舞ふのですが、津田さんはさうは言はない。「それでは私が少し言

ひますから皆さん考へて御覽なさい」といつて、少しばかり初めの方を言ひ出しました。あの時に斯ういふ事がありましたらうと云ふ風に話を仕掛ました。さうすると「ア、」といふ風に氣が付いて、一人の生徒が答へました。それは大變宜しい。それから如何です。其後は……」と問ふと又出なくなりました。さうすると生徒が皆頻りにドウかして答へやうと思つて、熱心に考へて居ましたがナカ〳〵出て來ない。散々に考へさせた後で、先生が、「それでは皆さんにお答が出來ませんから、據なく私がお話しませう」と云つて、叮嚀に敎へました。さうすると、「ア、さう〳〵」と言つて、生徒は如何にも滿足したやうに悅んで居りました。これを視て私は大さう感心したのでありますが、斯んなのは實に活きた敎授法でありまして、つまり敎へ方が上手であるから、知らず識らず判斷力を養うて生徒に興味を起させるのであります。

(二)自己活動と敎育　若しそれを先生がドンドン言つて仕舞つては面白くも何とも無い。生徒に如何うかして知り度いといふ心を起させて、散々困つて既に判斷が附きさうな處迄進んで來た時にヒョッと言つてやるから、先生の難有味が眞によく分るのです。丁度御飯の喰べたいといふ時に御飯を喰べさせるのと同じ譯であります。要するに、何でも彼でも矢鱈に敎へさへすれば宜いといふやうな、無茶苦茶の敎授の仕方をしないやうせねばなりません。又餘り優しくして敎授すると、子供が自ら考へやうと思はぬから不可ぬのです。成るべく子供自身に自ら考へやうといふ心を持たせることが大切で

あります。かうして子供自身に考へさせて行くと、子供は自分で物事を判斷しやうと思つて非常に心を苦しめます。而して散々考へても如何しても考へ出せぬ時に、仕方がなしに先生に敎へて貰ふので先生が有難いのです。例へば皆さんが格別お困りなさらぬ時にお金を貰つても餘り有難くないでせう。

尤も人には、金が有り過ぎて困ると云ふ事はありません。一萬圓でも二萬圓でも受けて辭せずでありますが……金が無くつて非常に困つて居る時には、どんなに少額でも貰ふと嬉しいものです。それと同樣で、先生が自ら判斷を先きにせずに、生徒自身にそれを判斷させ、困らせて置いて敎へてやる樣にするのです。つまり敎師は生徒に對して「お前よく考へて御覽！それで分らぬなら斯うやつたらどうだ」と云ふやうに生徒の力の及ぶだけ自ら考へさせて行くやうにせねばなりません。是は單に一つの學科ばかりではありません。日常百般の事柄に就いて、何時でも斯ういふ風に生徒を勵まし、生徒をして自分自身で判斷をさせるやうに仕向け、尙ほそれを親達が奬勵するやうにせねばならぬのであります。

第十一章　推　理

第一節　推理と臆見

(一)推理とは何か　今日の講義は心理學でも最も面倒な推理の話です。先づ其の說明から初めませう。全體推理作用の存するといふことが人の、他の動物と違つて尊い所以であります。然らば推理と云ふ事は一體どう云ふ事であるかと云ひますと、今迄自分の經驗して居る所の知識に依つて、未だ經驗せぬ事を判斷して行く働きを云ふのであります。なほ言換へますと、自分が今迄諸方で得た經驗を種にして、未だ經驗しない事を、前には斯うであつたから此次にも斯うであらうと云ふ風に判斷をして行く事を、總て推理と云ふのであります。

(二)　經驗と推理　昔の哲學者が、人と云ふものは總て自分を尺度にするものである。何でも物を計るには自分を基にして計つて行くものであると申しましたが、推理の場合に於ても矢張り其譯でありまして、諸君は平生種々な事を經驗して居られるでせうが、其經驗が段々積り、之れが基礎となり、前に斯うであつたから今度も斯うであらうと云ふ樣に、皆自分の經驗自分の知識を標準にして他を計

つて行くのであります。それ故、自分一人では正しい積りでも、間違つた考へをする事があるのです。其間違つた考をせぬやうにするには、人に尋ね、書物に勘へ、色々な事に當つて實際の判斷をして行く事が大事であります。

(三)二人のお客　玆に斯う云ふ話があります。或日房州の海邊の人と信州の山の中で育つた人とが、偶然に東京の日本橋の眞中の宿屋に落合ひました。丁度其晩は宿が大變に閙へて居る時であつたものですから、合宿をして呉れと云ふので、圖らずも房州の人と信州の人とが一緒の部屋に泊りました。そこで徒然の儘に色々の話をして居る時に、其晩は丁度月の良い晩であつたので、月の出る話しになりました。所が房州の人は月は海の中から出るものであると言ひ、さうして頻に海の中から出る月の美しい事を話しました。信州の人は、なに月は山の上から出るもので決して海から出るものではないと言ひ、現に自分の國には姥捨山と云ふ所があつて、向ひの鏡臺山の上から月が出るのは有名な話であると言ひました。所が房州の人は、なにさうでは無い、月は海から出る、と負ずに主張しました。そうして終に二人がむきになつて議論をしまして、頻りに爭つて居りました。餘り喧しいものですから宿屋の主人が來て、御客樣何を言つてお出でなさるかと申しますと、房州の人は、今自分が月は海から出ると言ふのに此人は山から出ると云ふから、夫れは違つて居ると話して居るのですといひます。と、信州の人は、いや自分が月は山から出ると言ふのに、さうでは無いと生意氣な事を言ふ故怒つて

居る所であると言ひました。そこで亭主は、それは二人とも間違つて居ます。月は瓦の上から出るものです。と言つたと云ふ話があります。これは無論作り話でありますけれども、人が總て自分の經驗を標準にして物事を計つて行くと云ふ事をよく言ひ現はして居るのであります。成る程江戸で育つたものは、始終屋根の瓦の上から出る月より外に見た事が無いから、月は瓦の上から出るものであると云ふ判斷をしたのでせう。人はすべてかういふ樣に、何でも自分の既に知つて居る事から未知の物事を判斷して居るのであります。是等は全く唯々自分の狹い經驗のみに依つて判斷した爲めに起つた間違ひでありますけれども。總て推理と云ふ事はさういふ風に、自分の經驗から出立して行くのであります。

(四)推理と判斷　次に推理と判斷との違ひを述べませう。判斷は前に說いた如く、唯一句で濟んだでせう。例へば、「人は死すべきものなり」と言ひますと、「人」といふことゝ、「死すべきもの」といふことゝ、二つを較べるのが判斷であります。ところが推理になると、二つの概念を直ぐに較べることだけでは足りませぬ。そこで、例へば、「豐太閤は人なり」といふ判斷を、次に持つて來るのです。此二つの判斷があれば、どんな人でも馬鹿でない限りは、「豐太閤は死すべきものなり」といふ考が起つて來るでせう。「人は死すべきものである」「太閤は人である」「故に太閤も矢張り死ぬ」といふことは、何人でも分るでせう。斯ういふやうに人の心の働きは、唯簡單な判斷ばかりでは足らず、どうしても

複雜な働きをせねばならぬ場合があります。人事は複雜であるから、判斷のみでは足らぬことが多いのです。一體簡單な推理は、動物にもあります。犬や猿にもあります。併し最もよく推理するものは人でありますから、推理は人の特色となつて居るのです。

(五)臆見と輕信　多くの人の中には自分が實際經驗をせずして、人の眞似をして、人がさう言ふから多分さうだらうと云ふので、人の知識を本にして總ての事を判斷して行くのがあります。是等は尙更危險です。自分の智慧が狹く經驗が不充分であるよりも、人の眞似をし人の居ふ事を其儘取つて夫れを土臺にして總ての事を判斷して行くといふのは、尙更危險であります。

(六)上方修業　昔或所に大さうな學問の好きな人がありました。田舍の事ですから良い先生は無かつたけれども、自分獨りで頻りに學問をして居りました。所がだん〳〵偉くなつて、もう田舍に居つてもつまらぬといふので、或時父に「お父さん自分も上方の方に出て色々の事を習つて來たいと思ひますから、私をやつて下さい」と申しました。今なら譯ない事ですけれども、昔は上方へ行つて勉强するなどと云ふ事は、仲々難い事でありました。併しながら頻りに賴むものですから、夫れでは行くが宜からうと云ふ事で、親も許しました。昔の事ですから、色々と支度をして出て行きました。そこで愈々上方に來たのであるから、何でもよく氣を付けて覺えて行かねばならぬと、なか〳〵注意して大阪の町を歩いて居りました。すると向ふから、坊樣が鉢を持つて「ホーウー」と言つて歩いて來ました。此「ホーウー」と云ふのは、法盂と書くのですが、初めはなか〳〵其聲が出ないさうであります。私は此の行をした人から經驗を聞きましたが、初めて僧侶になると、先輩に連れられて町の中を「ホーウー」と言つて托鉢をして歩くのださうですが、なか〳〵旨く出來ないで、惡くすると「トーフー」(豆腐)と云ふ樣になつたりして、第一に聲が出ないさうです。それですから天田鐵眼といふ人が、初めて托鉢に出た歌に、「舌だみてほゝとはいへど鶯の初音苦しきものにぞありける」といふのがあります。それは兎も角、例の田舍上りの學者は之を見て、不思議に思ひましたが、やがて成程上方では物を貰ふ事を「ホーウー」と云ふと見えると思ひ、早速手帳を出して書付けて、先づ一つ覺えたと思ひました。又段々歩いて行きますと、大勢の人足が石を澤山持つて來て、「ヤッサ〳〵」と言つて擔いで來る。さて〳〵不思議の事もあるものかな、上方の人は石の事を「ヤッサ」と云ふと見える。是れは初めて聞いたと言つて、又早速手帳を出して記しました。併し今の樣な氣の利いた手帳は無いから、矢立を出して反古の裏か何かに「石」の事を「ヤッサ」といふと書きました。又歩いて居る中に塗物屋の前に出ました。其所には大さうな赤い塗物があつて、客がそこに來て、朱膳を見せろ、「ハーッ」と言つて出します。又「朱椀の方を見せて呉れ」、「ハーッ」と言つて前へ出す。總て皆赤いものを列べて見せて居る。そこで例の先生は、不思議な事もあつたものだ、上方では赤いものを「朱膳朱椀」と云ふと見えると思つて、又早速「朱膳朱椀」と云ふ事を書き付けて置きました。夫れから色々の事を覺えて、餘

程偉らくなつたと思つたので家へ歸つて行きました。さうすると御父樣は大さう喜んで、好く歸つて來たと云ふので、丁度秋の事で柿がなつて居りましたから「御前の好きな柿が宜く熟したから取つてやる」と言つて、年取つて居るにも拘らず、柿の木に上つて柿を取つて居りました。然るにどうした機勢か、つひ足を滑らし石の上へ落ちて、頭を打ち、血が大さう出ました。そこで例の息子先生は、サー大變だ醫師を呼びにやらねばならぬと云ふので、早速上方で習つた事を應用して手紙を認め、雇人に、醫者の所に持たしてやりました。其手紙は、「父事、柿木の上より、ヤッサーの上に落ち、朱膳朱椀が多く出で候に付、藥一服ホーウー」と書いてやりました。醫者の所へ持つて行つたけれども。醫者は何の事だか薩張り分りませぬ。「ヤッサー」の上に落ち、朱膳朱椀が多く出るとある。一體「ヤッサー」と云ふのは何のことか、「ホーウー」と云ふのは何のことか、といろ〳〵考へましたけれども、どうしても分りませぬ。そこで手紙を讀んだが何の事であるか分らぬゆゑ、もう一度聽いて來いと言つて使を歸しました。さうする中に父は大さう容態が惡くなつて、とう〳〵亡くなつてしまつたと云ふ話があります。

是れなどは、自分に確實の考なく、又自分自らの經驗に基いて事を判斷して行くと云ふのでもなく、唯好い加減に人のいふことを聞き「さうであらう」と思つて眞似をしたゆゑこの樣な間違ひが出來たのであります。今日の「ハイカラ」には、隨分此類が澤山あります。西洋の事をよく知りもせずに、

西洋では斯うであるあゝであると聞き嚙りで、齒の浮く樣な眞似をして居ります。殊に西洋では、男女の交際などにはなか〳〵六づかしい掟があるに拘はらず、我儘な振舞してこれが文化であると風俗を紊して居る者は、丁度今の「ホーウー」と同じ事です。唯だコチラは拵らへた話ですから餘り極端になつて居ますけれども、今日の人が、眞に自分で道理を考へて、自分の經驗と人の經驗とを充分に吟味し、それに基いて事を判斷して行くと云ふ事をせずに、何にも構はず眞似をすると云ふのは、丁度今の馬鹿者の例で說明が出來るのであります。色々の可笑しな例を擧げた樣でありますが、つまりつゞめて言ひますと、前に說明しましたやうに、推理と云ふ事は既に持つて居る知識に依つて未だ經驗せぬ事を判斷して行くと云ふ働きに外ならぬことを話したのであります。

第二節　歸納推理

(一)歸納推理　推理には色々な種類があります。それに就いて是から御話致しますが、概括すると歸納推理と演繹推理との二類になります。歸納推理と云ふのは、一つ〳〵のものゝ中から、共通の點を纏めて、一つの原理を立てるのを云ふのであります。すべて人は度々同じ樣な場合に出遭ひますと、是等の事を一つに纏めて仕舞ひます。例へば、或る場合に、一つの事柄に出遭ひ、又他の場合にも同じ事に出遭ふといふ樣に同じやうな事情の下に度々同じ事に出遭ひますと、未だ經驗せぬ場合でも矢張

り前と同じであらうといふ風に極めて仕舞ふのです。斯う云ふ働は、人の心に自然に具つて居るのです。例へば。或時柳の木の下へ行つた所が、泥鰌が捕れましたので、二三日して行つて見ました所が、又捕れた。又暫くして行きました所が、同じく捕れたとしませう。かく三遍も行つてつゞけて捕れると、何時でも柳の下には泥鰌が居ると云ふ風に判斷して仕舞ひます。併し二三遍行つて泥鰌が居たから、何時でも居ると思ふのは、間違つて居りますが、さう云ふ心の働きが人間には自然にありまして、既知の經驗から未知の事まで概括して決定するのです。これが即ち歸納推理の働きであります。

(二)判斷と迷信　かういふ働きが人にありますから、年寄などが何か色々の事を氣にしたり色々の苦痛を起したりするやうな事が出來るのです。現に私の家では、私の祖母の代から、梅干を漬けてはならぬと云ふ控が出來ました。何故かと言ひますと、或年に梅干を漬けた所が子供が亡くなりました。夫れから其次の年に又梅干を漬けました所が、祖父が亡くなつて仕舞ひました。又其次の年に梅干を漬けたら、伯母が亡くなりました。そこで祖母は梅干を漬けると人が死ぬと云ふ事を結論しまして、梅干を漬けてはならぬと云ふ事が家憲の樣になつて居りました。私の母は善く祖母に事へましたから、自分ではそんな事は無いと思ひましても、祖母の生きて居る間は一切梅干を漬けずに、外から買つて濟まして居りましたが、私の代になつて、そんな事のある筈は無いと言つて試に漬けて見ました所が、唯の一人も死にませずして、却つて子供が生れました。それで今では年々漬けますけれども、人の死

なぬと云ふ事が確められました。

かう云ふやうに、或人は外の事を考へず或る特別の事にばかり心を寄せますから、二三遍惡い事が特殊の事と一緒になりますと、之を直ぐに原因結果と考へて仕舞ふのであります。方角を氣にするとか、日を氣にするとか云ふ迷信は、皆かう云ふ樣な事から起るのであります。出爪を取ると恥を掻くと言ふ事がありますが、つまり是れは、出る前になつて爪を取ると云ふ樣な不注意の事が無いやうにといふ戒でせう。特に女抔は始終爪垢を付けぬやうにせねばならぬから、それを戒めたのでありませうけれども、これも初めに何うして起つたかと云ひますと、周章て出爪を取つて出て行つて何か忘れ物をしたり失敗したりして恥を掻く樣なことがあつたものですから、終に出爪を取るといふ事と恥を掻くと云ふ事とは關係のある事の樣になつて仕舞つたのでせう。是等は皆惡い方の例でありますけれども、すべて人の眞實の知識も、矢張り是迄の經驗を精確に歸納する所から出來るのであります。

(三)萬有統一律　一體此歸納法と云ふものは、何うして出來て來るかといひますと、茲に驚く可き事があるのです。すべて世の中の事は、實に所謂千差萬別でありまして、色々と違ひがあります。例へば、そこらの山を御覽になつても、木があり草があり虫が居り鳥が棲むといふやうに、雜多に種々のものがあるでせう。人にしましても、町を歩いて居るのに、背の低い人・高い人・偏目の人・盲の人・或は鼻の曲つた人・目の飛び出した人といふやうに、種々なものが秩序なく往來して居まして、チョッと

見ると世の中と云ふものは、規則もなければ法則も秩序もなく、總て無茶苦茶の樣に見えます。併し乍ら、これは唯外觀のみであつて、夫れを段々と學問上から調べて見ますと、此無茶苦茶に見える物の間に秩序整然たるものがあり、實に驚く程ちやんときまりが立つて居ります。基督教者は夫れを以て神の意匠であると敎へます。かやうに無茶苦茶に見える中に秩序整然として居ることを、萬有統一律と云ふのであります。萬有と云ふのは總てのものです。總てのものにちやんと一つに統べられた法則があつて、何處に行つても無茶苦茶ではないのであります。

(四)歸納推理の基礎としての萬有統一律　斯う云ふ事が世の中にありますから、夫れで人は歸納法に由つて經驗を集めて行く事が出來るのでありまして、其例を擧げますといろ〳〵ありますが、今茲に櫻の葉を取つて調べて見ませう。櫻の葉には、葉柄に、必ず小さな疣の樣なものが二つ付いて居ります。時に依ると一つしか無いものもあり、又時に依ると缺けたのもありますが、大概其が付いて居ます。之を蜜槽と云ひます。此處から丁度菓物の蜜の樣なものが出て居ります。大きいのを取つて甜めて見ると分ります。これは蟻が蜜を吸ふ爲めに此處に來ますと、その途に櫻の害蟲などが居る場合に、之れを捕つて呉れるのです。かやうに蟻を誘ふ爲に蜜槽が付いて居るのです。是れが實に不思議のやうです。こんな餘計の樣なものが、何處へ行つて調べても、櫻ならば必ず付いて居ます。上野の櫻を取つて調べて見ても、吉野山の物を取つて調べて見ても、九州へ行つても北海道へ行つても、苟も櫻

の葉ならば、皆斯う云ふ物が付いて居ます。卽ち無茶苦茶の樣であるけれども、萬有統一で、櫻は櫻の性狀を持つて居ります。所謂柳は綠花は紅です。斯く何處に行つてもチヤンと己の本領を保ち、己の持つ可きものを持つて居るといふのは、實に不思議な事であります。其の他先にも御話しましたが、蜿豆蠶豆其他何でも豆の根を拔いて見ますと、其根にツブ〳〵が付いて居ます。何豆でも荳科の植物なら根を拔いて見ると皆斯う云ふ物が付いて居ます。是れは何であるかといひまするに、細菌であります。諸君は細菌と云ふと嫌だと仰しやるかも知れませぬ。肺病・虎列拉・窒扶斯なども皆細菌から來るのでありますから……併し豆の根のはさう云ふ惡い者ではありません。一體細菌は大層人の爲になる者です。第一に細菌が無ければ物の味は殆ど出來ぬのであります。さうかと思ふと又、世界大戰に日本が勝つたのも細菌の御蔭であります。夫れは煙硝といふものは、細菌が拵へて呉れるのでありまして、細菌がないと硝石は出來ません。かう云ふ樣に、細菌は人の爲になる者ですが、豆の根に附いて居るのは其の一であります。これは豆が滋養を取るためでありまして、豆は細菌の排泄したものを吸收して實が成るのです。蜿豆でも蠶豆でも、細菌が排泄した物から滋養を取るのであります。それを我々が旨いと言つて食べて居る譯です。是は何處へ行つても同じ事です。

斯く總ての物は無茶苦茶なやうでありますけれども、ちやんと統一されて居るのです。それですから、人の天性として、或物は斯うである、其次の物も斯うである、又其次の物も斯うであると、皆斯

うに違ひないと云ふやうに、判斷するのです。隨つて、子供などに學術の知識を與へるには、實際の事を度々經驗させて、自然に總ての事が斯うであるといふ樣に判斷させねばなりませぬ。是れが人の本性に叶つて總ての物の規則になつて來るやうになるのであります。

(五)歸納推理と因果律　もう一つは因果律のことです。これは佛敎で說く因果と同じ事でありますが、佛敎で曰ふ因果は科學で說く因果よりも廣いのです。科學で言ふ因果は現象に現れて居る上から言ふだけです。かの佛敎のは、三世因果といふやうな事にまで及んで居ります。兎に角歸納法と云ふ働の出來るのは人の心に因果關係を認める働きが有るからであります。卽ち吾々は何か物が有れば必ず其原因が有ると云ふ事を考へます。例へば、此處に黑板拭が置いてありますと、必ず何人か此處に持つて來たのである。と云ふ事を考へぬ人はありますまい。餘程の馬鹿でない以上は、物が有れば必ずその原因の有ることを考へます。それは詰り果に依つて因を察するのであります。又何か因があると必ず果が有ると云ふ事を考へます。例へば、天が曇つて居るから雨が降るだらうと考へ、或は又大さう氣候が寒いと雪が降るだらうと考へます。そんな事は皆因に依つて果を考へるのでありまして、すべて因果の法則と云ふ事は、吾々の心にはチョッと考へると直ぐ分るやうになつて居ります。さう云ふ事から歸納法は出來るのであります。

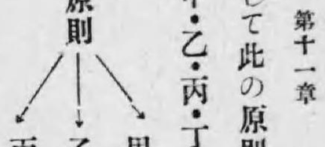
それゆゑ歸納法は、之を約めて云ひますと、一つ〳〵の事實を集めて、一の原則を作り出す働きを

云ふのであります。例へば、人と云ふものは、他人に親切を盡さねばならぬといふ事は、どうして人の道となつたかといひますと、「或場合に親切をした」、又「外の場合にも親切をした」、又「更に外の場合にも親切をした」、處がすべて人に親切を盡すとその人が喜ぶのみならず、自分にとつても嬉しく萬事に都合よいと云ふ事を度々經驗しまして、「終に人は何時でも他人に親切を盡さねばならぬ」と云ふ法則が出來るのです。よく論理學等で例に引く處の、「甲の人は死せり」、「乙の人も死せり」、「丙の人も死せり」、「故に總ての人は皆死すべきものなり」と云ふやうに、多くの經驗から、「人は死すべきものなり」と云ふ結論を得るのです。

第三節　演繹推理

(一)歸納法と演繹法　次に演繹法と云ふのは、丁度今申した歸納法の反對であります。其有樣を書いて見ると、歸納法と云ふのは、詰り多くの經驗が段々纏つて來るのです。卽ち次の圖にあるやうに、甲・乙・丙・丁……等、個々の事實に共通のものが集つて、一の事實となる推理の形式です。

而して此の原則を基にして、それから演繹法が出來て參ります。卽ち演繹法は、或一の原則をもつて、甲・乙・丙・丁……等の事實を解釋してゆく所の推理の形式です。



例へば、人には親切を盡すべきものなりといふ原則がありますと、誰か一人を指してこれは人で有ると知つた以上、此人には親切を盡さねばならぬと云ふ事を判斷するやうに、一原則を個々の場合に及ぼして行くのです。これが卽ち演繹法で有ります。

(二)三段論法　論理とか三段論法とかいふと大さう六づかしい話のやうですけれども、平生諸君が實際に應用してお出なさることです。一の原則が出來て居て、それがいろ〳〵の場合に働きをなしてゆくのです。つまり演繹法は、一の原則から個々の場合に及ぼす推理の仕方であります。演繹法は昔の人が言うた事とか、或は佛敎で言へば經文、耶蘇敎で云へば聖書などを引いて來るとか、儒敎であれば論語を引いて來るとか、云ふやうにして、總て聖人や賢人など偉い人達の言つた事などを原則として採り、それゆゑ斯うせねばならぬと云ふ風に論じて參ります。前の例に據りますと、「人には親切を盡すべきものなり」と云ふ原則を初めに置き、次に「某は人なり」と云ふ事が分れば、最後に故に「某に

は親切を盡すべきものなり」と云ふ結論が出て來ます。之を三段論法と云ふのです。卽ち初めのを大前提、次のを小前提最後のを斷案と云ふのであります。これを解り易く例示しますと、次の如くなります。

すべて人は死す……大前提
釋迦は人なり……小前提
故に釋迦は死す……斷　案

論理學はつまりかういふことを論ずるに外ならぬのです。論理學などと云ふと六づかしいやうですけれども、つまり是れを謂ふのであります。

(三)子供の論理　論理などいふと、兎角、堅くるしいやうでありますが、實は子供も斯う云ふ働を現はして居ります。漸く物を言ふ位の子供が斯う云ふ事を言ふ場合があります。私の友人の子で、三歲の女の子が、或時火事を見ました。火事を見たと云うても遠くで見て居るのですから、迚も人の形などは見えず、その實際の狀景は分りません。唯提灯があつちへ行つたり、こつちへ行つたりする樣子が見えるばかりでありますが、それを見て子供は、「提灯あんよ」と言ひました。それを今論法に當てゝ見ますと、チャンと推測式が出來ます。

總て動く物は歩めるなり。

今提灯は動けり。

故に提灯は歩めるなり。

斯う云ふ形式が子供の考の中にあるわけです。勿論斯う云ふ風には言ひませんけれども、そんな順序で精神が働いて居るのです。つまり提灯が歩くと云ふ事を、如何して考へたかと云へば人が歩くといふことから考へ付いたので、何でも歩く時には動くから、提灯が動くのも歩いて居るのであると云ふやうなことから出た言葉でありませう。之は無論間違つて居ます。動く物は歩むなりと云ふことはありません。歩まないでも動く物はありますから、それは違つて居りますけれども、總て論理の形にチャンと合つて居つて形の違つて居ないところに妙味があります。故に斷案の正否は、主として大前提の正否及び大前提と小前提との聯結の正否に由るのです。或お母さんなどは、家庭で子供を敎へる時に、なに子供で何も分らぬから大丈夫だと云つて不用意に聞かせたりしますが、それは不可ませぬ。子供の前でつまらぬ事を言つたりしてはなりませぬ、子供は實に正直な者で、其の心の中には神が宿つてござるといふほどです。即ち論理の形式がちやんと出來るやうになつて居るのです。それですから、子供の前では滅多のことは出來ません。子供は何でも親の眞似をします。これもつまり論理の法則が子供の頭に有るからです。例へば、お父さんが他から歸つて來て、何時でも大肌を脱いで胡坐をかいてビールを飲んだりして居ますと、お父さんの不行儀を見習つて、子供が態々肌を脱いでコップ

を持つてビールを飲む眞似をします。それはどう云ふ譯かと云ひますと、

お父さんは肌を脱いで胡坐をかいて麥酒を飲むものなり。

我はお父さんなり。(お父さんになつた積りで。)

故に我は肌を脱ぎ胡坐をかきビールを飲むなり。

斯ういふ論法からやつて來るのです。或は又お父さんが家へ歸つて來て、お母さんに小言を言つたり擲つたりすると、子供は、自分もお父さんになつたのだから、お母さんに小言をいひ、お母さんの頭を擲らねばならぬといふやうになるのです。これは唯偶然の事のやうに思はれませうが、子供に取つては、論理的に組立てられて出て來るのであります。以上に述べましたやうに、歸納法と演繹法とは違ひがありますけれども、どちらにしても皆自分が有つてゐる知識に依つて、未だ自分の經驗せぬ事を定めて行くのであるといふ事は同じであります。唯其働きを考へる形が違ふだけであります。

(四)子供の推理　次に子供の推理の事をお話しませう。子供の推理は唯今も申ましたからお分りでありませうが、子供は演繹も歸納も皆一つにして仕舞ひます。それはどう云ふ事かといひますと、我々大人であるも、一度や二度經驗しましても、是れは偶然の事であらう、何時も斯う云ふ事の有るべき筈はないと云ふやうに、ちやんと道理に訴へて容易に心を動かしませぬ。一度さう云ふ事に出遭つたからといつて、直ちにそれを原則として物事を判斷すると云ふ事は無いのです。處が、子供は何か一

度或事に出遭ひますと、直ぐに其事を原則として判斷して行く傾向が有ります。丁度前に言ひました通り、柳の下に行つて泥鰌が捕れたから、何時も柳の下には泥鰌が居ると云ふやうな考をするのです。さうするとこの論法は、一面からいふと歸納法ですが、又他の一面からいふと演繹法であります。演繹法と歸納法とは、或場合には同じやうな事があります。そこで子供でなくても智慧のない者は、子供と同じやうな判斷をする。即ち子供と同じ程度の者は、皆同じ樣な判斷をするのであります。

(五)守　株　諸君は斯う云ふ言葉を御聽になつた事がありませう。守株即ち株を守るといふ字です。株を守ると言つても、此頃よく流行る株屋の株を持つて居るのではありません。是れは支那の書物に有る事でありまして、或時馬鹿な人間が山に行きました、處が何處からか一匹の兎が出て來て、ふとある木の切株へ頭を打ち付けて倒れました。それで其男は早速其兎を捕つて、山を下り自分の家に歸りました。是れは偶然にも兎が木の株に頭を打ち付けて死んだのでありますが、其男はさう考へないで非常に喜んで、「是れは旨い、斯うして毎日兎を捕れば斯んな旨い事はない、明日も兎が頭を打ち付けたら捕らう」と思つて、それから毎日〳〵熱心に山に登つては例の切株の處で待ち構へて居りました。もし其やうに兎がやつて來れば好い商賣ですが、なか〳〵さう旨くはゆきません。そこで、今日は來なかつたが、明日は屹度來るだらうと云ふので、毎日辨當を持つて木の蔭へ行つて朝から晩迄凝と兎の打つかるのを待つて居りましたが、何時迄居ても兎が出て來ませんから、終に根氣負けを

して止てしまつたと云ふ事であります。

(六)子供の推理の例　丁度それと同じく、一つ事に何時までもじつと喰つ付いて居つて外に出づる事を知らぬ人間を、株を守るの人と言ふのですが、さう云ふのは愚な人間です。詰り智慧が開けず極めて頑固な人を守株と云ふのでありますが、子供の判斷にはさう云ふ風が多いのです。即ち、一度何か有ると、すぐそれを一般の原則として仕舞ふのです。私の親戚の子供に、其の伯父さんが小學校の先生をして居る人がありました。田舍の事ですから、あまり立派な學校ではなかつたと見えまして、或時雨が降つて屋根が漏りました。そこで先生は屋根に上つて漏を止めて居りましたが、過つて足を踏み外して、地上に墮ち、腰を打つて病院に入るやうな騷ぎをした事がありました。それから後に前の子供に或人が、どうだいお前は學校の先生にならぬかといひましたら、「厭です、學校の先生になんかなるのは」と答へました。何故かと訊きましたら、「學校の先生になると屋根から落ちるから厭だ」と答へました。是れなどは可笑しな話ですけれども、矢張り論理的の考から出て居ります。即ち偶々學校の先生が屋根から落ちたと云ふことを原則として、

學校教師は屋根より墮つるものなり。
我は學校教師なり。
故に我は屋根より墮つるものなり。

斯う云ふ風に、一度あつた事を原則にして仕舞ふのです。

第四節　推理の妥當性

主要性と偶然性　以上のやうな事は、たゞ子供ばかりではありませぬ。總て智慧の足らぬ者は偶然の事を全體の事にして仕舞ふ傾があります。卽ち前に申した梅干の例もそんなものであります。それですから、眞に判斷を間違はぬやうに論理を正しくすると云ふ事は、其人に取つて大切な事です。すべて歸納法を應用するには一つ〳〵の物の主要性、卽ちなくてはならぬ大切な性質と、唯偶然に出來た性質とを區別せねばなりませぬ。斯う云ふ二つを精確に區別して、主要性ばかり歸納したのならば、唯一度の經驗でも有力の基礎となるのであります。之が卽ち推理の妥當性であります。然るに子供や智慧の乏しい大人は、この性質を混じますから、推理を誤り易いのであります。

第五節　比　論

(一)比論とは何か　次は比論であります。比論は歸納推理の出來ぬ時に用ゐます。それはどういふ事かと申しますと、物事の似寄つた處を較べて、是れだけ似て居るから、多分是れと彼れとは同じであらうといふ風に判斷をして行くのであります。比論は平生人がよく使ふことでありまして、例へて見

ると、雉子と鷄と二つを較べて見ますと、雉子には雄に鷄冠があり、脚には蹴爪が出て居ります。鷄にも鷄冠も蹴爪もあるのです。又雉子の樣子を見ると、頻りに土を搔くが、鷄も矢張り土を搔きます。さう云ふやうに二つの似た處があると、雉子は多分鷄の類であらうといふ事は、大抵何人にも氣が付きます。斯う云ふやうに、一つ〳〵較べて見て、互に似寄つて居るから是れと彼れとは同じ物であらうと云ふ判斷をして行くのは、皆比論であります。此頃天文學が進んで、十五夜お月樣と云ふ綺麗な顏も、よく調べて見ると、痘痕のやうな黑い處があります。つまり月の面は望遠鏡で見ますと、あまり奇麗なものとは見えません。人の顏にしてもよく見ればあばたが有つたり面皰が有つたりしますけれども、遠くから見て居るからマア美人に見えるのです。月の面もさう云ふ風であります。處が、此月の面は地球の火山と同じ物であります。火山には富士山或は其他の山の如く、噴火を止めて居る山と、淺間山の如く今現に噴火をして居る山と兩方ありますが、煙の出て居ない山を死火山と申します。月の面は其死んで烟の出て居ぬ火山とよく似て居りますから、月の面は大噴火をした跡であらうと云ふことを學者が言ふのですが、かういふのが比論であります。未だ行つて見ませんから實際經驗することは出來ないけれども、いろいろの場合が似て居りますから、多分月は大噴火の跡であらうと考へるのであります。

(二)比論の用　比論といふことは、大さう有益のものでありまして、いろ〳〵の判斷をする上に、大

なる利益を與へます。現にカリフォルニアの金山は、ハーグリーヴスといふ男が、濠洲の金山に其山の有樣がよく似てゐるといふことに氣付いた結果、發見したのであります。斯ういふのは矢張比論であります。此の山と彼の山とはよく似てゐるから、これも金山であらうと言つて掘つて見た結果、大きな金山を發見したのであります。

第六節　推理と人生

(一)推理と先見　次に推理の大切なことに就いて述べませう。これは私が申上ぐるまでもなく、人の偉いといふことは、全く推理作用があるからであります。もし人に道理を推し考へて行く心の働きがなかつたならば、人は實に憐れな者です。前人の跡を踏襲するのみであつて、一も自分の經驗に基いて改良進歩して行くことは出來ぬでせう。歌人は坐ながらにして名所を知るといふことがありますけれども、學問があり知識がある者は、坐ながらにして何萬年先きのことをも考へることが出來るのです。佛敎などでは非常に後々のことまでも說いてあります。特に釋迦の言はれたことなどを考へますと、その時分の豫言の事柄は決して偶然に言はれたのではなく、色々の推理作用から出てゐるのでせう。例へば、佛敎では、此宇宙は一定の時に至れば壞れてしまつて又出來るもので有ると說くさうですが、さう云ふやうな說は、今日の科學が段々證明しつゝあるやうな次第であります。人類今日の智

識から判斷して見ますとどうしても斯くあるべきことで、地球は未來永遠に此の儘で續くべき物ではありません。必ず月のやうになつて仕舞ふでせう。地球が月のやうになるとして、終にはどうなるかといひますと、總て太陽と一緒になつて燃えて又昔のやうにどろ〳〵の液體になり、更に氣體になり、それから又別れて新しい世界が出來るでせう。是れは今日の天文學者の說く所で有りますが、既に佛敎にそれと同じやうな意味が說いてあるといふことです。どうして科學と宗敎との說く所が一致するかと申しますと、一方には今日の天文學者のやうに科學の上からいろ〳〵實驗研究して居るのでありますが、釋迦の時代にはさう云ふことは進んで居ませぬけれども、全く演繹推理の働きからさう云ふ事が判斷されたのであります。推理はたゞ右のやうな事柄ばかりでなく、又いろ〳〵と現在の世の中のことに應用が出來ます。例へば、內閣は今瓦解し掛けて居るが、次の內閣はどう云ふ風になるであらうか、或は經濟市場はどういふ風に變るであらうかとか、或は今日の不景氣は何時頃回復するであらうかなどいふ樣な事は、唯好い加減な想像でなく、さう云ふ事に關係して居る人は、今迄の自分の知識・經驗から推理して、斯うなるであらうあゝなるであらうと云ふ事を豫知する事が出來て、巧みに準備して置くから、色々の事に成功をするのです。米相場をなし、株の賣買をする人でも、偶然に當つて大さう勝つ事もある代りに、當らなければ損をして仕舞ふのですが、それが眞に學問的に進んで來れば、正しき推理に由つて損をせぬやうになるでせう。

(二)日常生活と推理　なほ此外日常のことに推理の應用されて居る事が多くあります。着物の流行のやうな事でも、髪の結ひ方でも、皆一定の法則が有つて起つて來るので、決して無茶苦茶に來るのではありません。何十年目に繰り返へさるゝと云ふ事は大體定つて居るのです。それゆゑさう云ふ事を計つて、來年あたりは斯う云ふ物が流行つて來るといふことを豫知して、大きな問屋などはすつかり仕度をして置きますから、先鞭を着けて大いに儲けると云ふことになるので有ります。さう云ふ大きなことでなくても、日常家を治めてお出でなさる婦人方は、矢張り推理の働きを使つてお出でなさるわけです。どうも今までの自分の經驗に依つて見まするとと、若い御婦人などが家をお治めなさることは、なか〳〵旨く行きません。然るに、年取つた姑さんの方は、學問がなくてもよく行くと云ふのは、何故で有るかと申しますと、老人は、自分の今迄の經驗で、斯うなくてはならぬ斯う有るべきだと云ふことをちやんと知つて居て、之を基礎にして推理して往くからです。お客が有つた時には斯うしなくてはならぬ。又斯う云ふ時には斯うするがよいと云ふことを知つて居るから、どうしてもよく氣が付きます。田舍の人は特に正直でよい處もありますけれども、斯う云ふやうな心が敏捷に働かぬ爲めに、お客を困らせる事があります。私共もよく困らされた一人でありますが、或時に私の知つてる人が、或る華族と一しよに田舍へ行きました。ところが華族といふので大層優待されました。それは宜いけれども、其日に十三里も歩いて、七時頃田舍の豪家に着いたのですから、非常に空腹を感じて居

たのです。ところが、折角華族さんがお出でなさつたのであるからと云ふ譯で、先方ではいろ〳〵と支度をして御馳走を拵へましたが、それがすつかり揃はねば出しませぬ。お客の方では大そうお腹が減つて居ますから、何でも宜いから早く出して欲しいと思ふけれども、華族さんだから腹が減つても空腹うないと云ふ飛んだ仙臺萩をやらされて、容易に出しません。八時半になつても何にも出て來ない。お互にどうだと顏を見合せて居ますと、漸く使が來たから、占めたと思つたら、お風呂が出來ましたからどうぞお召し下さいと言ふのです。仕方がないから皆風呂に入つて、十時過の頃漸く御馳走が出初めましたが、それも幾品も有るから、皆揃ふまでには手間が掛かりまして、愈々箸を取つて食初める頃には十一時過ぎにもなると云ふ譯で、殆んど死ぬ程の苦しみをしたといふ事であります。右はお客を大切に思ふ所から、實に叮嚀にして、すつかり物を揃へ、本膳で進げねばならぬと云ふので、平生使はない秘藏の道具で、小笠原流の眼八分か何かで持つて來るので、その禮儀を重んずる點は誠に宜いのですけれども、氣轉の利かぬのは閉口する事であります。さう云ふ事はちよつと考へれば直ぐ分る事でありまして、華族であらうが士族であらうがどんな人間でも、腹の減るのは同じ事ですから、さう云ふ場合には味噌汁でも何でもよいから、先づ先に食べ物を進げた方がどの位御馳走になるか分りませぬ。それらは丁度前に言つた株を守る流儀で、あまり一事に拘泥して献立だけの物を揃へてしまはねば御飯が進げられぬと思ふ爲めに、自然さう云ふ風になつて來るのです。

(三)推理と同情　なほ推理の働きからは思ひやりが出て來ます。私の友人に中島芳城といふ俳句を作る人があります。此人の句に、「挨拶は後に廻して團扇哉」といふのがありますが、實によく人情を穿つて居ると思ひます。暑い日に人が來た時に、ヱ、お暑うございます。御無沙汰を致しました。などと叮嚀な挨拶ばかりして居られるのは、客の方では誠に苦しいものです。それよりも早く團扇でも出して呉れゝばよい、又羽織でも脱げと言つて呉れさうな物だと思うても、向うでは一向氣付かず、たゞ四角張つた左樣然らば流にやつて居るといふ樣な場合は、實に堪へ難いものです。さう云ふ時によく氣の付く人ならば、さぞお暑うございましたらう、まあ御挨拶は後にしましてさあお使ひ下さいと言つて團扇を出すとか、或は羽織を脱げと云ふとか、或は冷たい水を汲んで來て、顔を洗へといふとか、或は清潔な手拭を絞つて來て、拭けと云ふやうにするでせう。暑い時の客に取つて、恁んな嬉しい事はないでせう。主人がかういふやうにして呉れると、如何にも思ひやりの厚いことが現はれて、客に愉快な感じを與へるものです。さう云ふ事は社交上洵に大切な事であります。即ちそれが推理で有りまして、自分の事を推して見ると分ります。自分が餘處へ行つて暑くて耐らぬ時に、前のやうにされゝば、まことに愉快ですが、暑い處に熱い物などを出されたり、或は煙草を飲まぬのに煙草盆に澤山火を入れて出されたりしたら、耐らないでせう。そこで自分が斯うである、と云ふ經驗から推し考へて人に及ぼすのです。すべて此事はよく氣を利かせなくてはならぬ事であります。

(四)知識の擴張　それから又科學でも哲學でも宗教でも、あらゆる知識に關した事で、推理を離れたことはありません。一體學問と云ふものは、唯物事を其儘に覺えると云ふ事ならば實に詰らぬものですが、實はさうでなく、すべて今までの經驗を基にして、自分が未だ經驗せぬ處まで推理して行くのです。私は社會の風流の方面の事は一向經驗がありません。併しながら、都々一・淨瑠璃・流行歌其の外すべて所謂軟文學をよく例に引くものですから、私は餘程かういふ事に經驗のある者の如くに思はれて、宴會の席などで歌をうたへなどゝ言はれますけれども、風流の經驗がないからさつぱり出來ないのです。唯私はいろ〳〵と書物を讀んだり、人の話を聞いたりして、之を基とし自分で想像を描いて、斯う云ふ場合は斯うであらう、是れは斯うなくてはならぬと云ふ事を考へて居るだけで有ります。前に想像の處でも述べましたが、故の福澤先生は品行方正の方であつたに拘はらず、花柳界の事でも何んでもよく知つて居られたさうですが、それは皆他人の經驗を見聞して、想像や推理から得られた知識ださうです。總て人はかやうにして推理して行けば、何處へ行つて話しても、大概違はない判斷をする事が出來るのです。それですから、すべて人は、一の知識を得たらば、それを基にして段々と判斷をして行く事が必要であります。

第七節　定　義

(一)定義とは何か　次に定義の話に移ります。是れは論理學に於ては、甚だ大切な事でありまして、物の定義を定めずに議論をするのは空論に終ることが多いものです。定義といふのは、例へば「人は知識道德を有する動物なり」といふやうに、人なら人をかういふものであるとちやんと明に定めることです。若し人は眼があるものであるとか、或は人は鼻が有るものであるとかいうたのでは、定義になりませぬ。それかというて、人には手も有り足もあつて立つて歩くものであるというても、定義とするには足りません。隨分坐つて歩く人もありますから、それも當てにならぬのです。又人の色は白いものであると定義しても、世間には黑い人もありますから、之も當てにはなりません。そこで人を定義するには、人として一番大切な事を擧げねばなりませぬ。人のみではなく、總ての物の定義を作るのは皆さうであります。今人に就いて考へますと、知識と道德とは外の動物に無くして人にのみあるものです。簡單な知識ならば外の動物にもありますけれども、到底人間が有つて居るやうな深遠なものはありません。又人は道德の外宗教・政治・哲學・藝術と云ふやうなものも有つて居ります。併し人も矢張動物に違ひない。殊に彼の出齒龜のやうなものがあり、又甞て臀肉事件を以て世を騷がした男三郎やバット事件の山憲のやうなものもありますから、動物としても餘り威張られはしません。が、人間と他の動物との異る點……確に動物と違ふと云ふ處は何處に有るかと言ひますと、知識と道德とを有して居るといふことが他の動物と異なる最も著しき點であります。故に人の定義を得やうとする

には、人と他の動物と違ふ處の特別なる差違を擧げる事が大切であります。「人は動物なり」と言つても、それは間違つて居りませぬけれども、人の定義にはなりませぬ。何故と云ふと、それでは人を他の動物と區別することが出來ぬからです。そこで他の動物の有つて居らぬ知識・道德を有して居るといふ條件を擧げて人の定義とするのです。詰り斯う云ふ風にして物の內容を擧げて他と區別しそれをはつきりと定めるのを定義と云ふのであります。

(二)定義の條件　定義はすべて事物の要點を見る事が必要です。例へば、諸君が何か買物をなさる時に、彼物と此物とは何處が違ふだらう、此物の一番大切な處は何處であらう、と云ふ事をお調べになる事が大切であると同じわけです。「時計と云ふ物は金又は銀で造つた物である」と言つてもそれだけでは時計の定義にはなりませぬ。時計の一番大事な點は、必ずしも金で造つたとか、銀で造つたとか云ふ事ではありません。併し時計は時を計るといふことが其特色です。さういふやうに、物事の定義を下すには、其物の特色を擧げることが大切であります。其處をちやんとよく別けて置けば、定義として書かないでも、自分の心ではつきりとよく定めることが出來るのであります。

第十二章　統　覺

第一節　統覺の意義

(一)統覺とは何か　以上で先づ普通にいふ推理といふことの話は濟んだのでありますが、此作用と關聯して、別に又大切なことがあります。それは何かといふと、卽ち統覺であります。統覺は敎育學では類化とも稱し、敎授には大切な働であります。

人はすべて自己の經驗を以て、新しい事物を解釋してゆくことが出來ます。例へば、第七圖に示す所は、黑い中に白い輪廓を以て子供の提燈行列を描いたのでありますが、子供の顏や着物などの輪廓は、點々として連續して居りませぬ。然し吾々は統覺作用を以て、恰も精細に描いた着物と同樣に、「これは着物である」と解することが出來ます。また提燈にしても、上に差上げてゐるのは、其柄と子供の手との連絡が明瞭に描いてないけれども、どの提燈はどの子供がさし上げてゐるのであるといふことが明かに解ります。これ吾々が以前の種々の經驗を用ゐて統覺作用に依つてこの新しい事物を類化してゆくことが出來るためであります。

第七圖

さて此の如く稍や明瞭な事物に對しては、人々の統覺が略ぼ一致しますけれども、その事物が明瞭に描かれてないときは、類化の仕方が人々に依つて違ひます。例へば、二本の棒を描いて見せると、子供は竹馬と解するであらうし、料理人は之を箸と解しませう。また之を單に並行線と解する人もあり、二本の脚と看做す人もありませう。此の如くすべて人は何でも自分を標準にして物事を理會してゆくものであります。蟹は甲に似せて穴を掘ると言ひますが、人も其通りで、自分の經驗のやうに物事を解して行くものです。同じ飴でも、孝子は之を以つて母を養はうと思ひ、盜跖はこれを戶の闕に落して、音のせぬやうに忍び入らうと思ふのであります。

(二)俳諧師の家僕。それゆゑ、人は自己の經驗性質及びその精神傾向を超越することは中々出來難いものであります。俗に氏より育ちと言ひますけれども、其氏が育ちと伴ふ時には一層善くも惡くもなるものです。昔或る所に武士の隱居で大さう俳諧の好きな人がありまして、風流人の事ですか

ら、瀟洒とした隱居所を構へて美しい花樹を植ゑ、俳諧の友達などを集めて樂んで居りました。斯んな人ですから、鍬でも普通の鐵で拵へたのでは面白くないと云ふので、銀の鍬に金を鐫めたのを拵へさせて、大切にして花を造つて居ました。其人の處に幼い時から養はれて居た一人の傭人がありましたが、それが段々年頃になつた處が、不圖惡い者に誘はれて遊蕩を始めました。それで金策に窮して、終に大恩ある主人の大切な銀の鍬を盜みました。何しろ主人の秘藏の鍬を盜んで、自分の遊びの費用にしたのですから、幼い時から長らく勤めた男であるけれども、かういふ惡い事をしては仕方がないといふので、主人は放逐しやうと決心しました。處が細君は之を聞いて、「それは實に可愛想です、全く一時の出來心から魔がさしたのでせうから」と、いろ〳〵主人を宥めましたが、主人はなか〳〵聞き入れないで、明日愈々放逐を宣告すると言ふことになりました。細君は可愛想であるから、どうかして主人を宥めてやらうと思つて、いろ〳〵考へた末、主人は俳諧が好きであるゆゑ、句を作つたら屹度赦されるであらうと思ひ付いたので、其晩に男を呼んで、「お前は實に飛んでもない事をした。長い間宅に居て旦那も私もいろ〳〵目を掛けて遣つたのに、あゝいふ事をしたのは、多分一時の魔がさしたのだらうと思ふから、是れからは心を入れ替へて、もう決してあんな事は爲ぬやうにして、よく氣を付けてお呉れ。旦那はどうしてもお前を出すと仰しやるけれども、其處は私からもよくお願ひ申して、お前が宅に居られるやうに執做して上げるから、お前も旦那へ詫言をおし、それで私が今詫び

樣を敎へて上げるから、忘れぬやうにして旦那に申したら、屹度許して下さるに違ひない」と、詫び言を敎へてやりました。そこで其男は、「それはどうも有難うございます」といつて、感謝して下りました。その詫言といふのは、旦那から言ひ渡しがあつたら、「俳諧の家に住みやこそ鍬（句）盜む」といふのであります。すると愈々翌日、主人は、件の男を喚んで、「貴樣は實に不屆者である。繩を付けて官に突き出すべきであるが、今日の處は格別を以て赦してやるが、宅に置く事は出來ぬ。是れから何處へなりとも行つて、心を入れ替へて使つて貰へ」と申渡しました。そこで彼の男は、「へイ」と云つて奥さんに敎はつた通り、「俳諧の家に住みやこそ鍬盜む」と云ひました。すると旦那は、それを聞いて、「奇妙な奴だ。道が門前の小僧習はぬ經を讀むとか云つて、乃公の家に長く居つた爲めに貴樣も俳諧を覺えたか。イヤ是れは感心ぢや。どうぢや貴樣其句の下を附けて見ろ、巧く下の句が付いたら赦してやる」と言ひました。男は「へイ」と恐れ入つて頻りに考へましたけれども、もと〳〵附け燒及で、奥さんから敎はつたのですから、後を自分で付けやうと云つた處が考の出やうはありません。ところが其時にひよつと浮んだのは、「鋤（隙）が有つたら又も盜まう」と云ふ句です。で之は前に鍬を盜んで其罪を赦されたのだから、今度更に鋤が有つたら其鋤をも盜まうと云ふ事を、隙と云ふ事に掛けて言ひ廻した譯で有ります。そこでとう〳〵放逐されたといふ話が有ります。是等も亦一ッの面白い例で

あります。無論是れは作り話でありませうけれども、人は附け燒き及では駄目である、自分の生れ附き或は經驗した事より外に理解する事は出來ぬと云ふ事の適例であります。卽ち宗敎でも何でも、眞に感ずるには、自分の體驗味識した事で、內部から起つて來ねばならぬのです。詰り人が物を理會するには、自己の如くにより外には、判斷が出來ぬのであります。

第二節　子供の統覺

大神と狼　すべて、子供は子供らしい類化をするものです。それゆゑ大人のやうな考へを以つて、子供を敎へるわけには行きませぬ。子供には子供に分るやうにしてやらねばなりませぬ。曾て或る幼稚園で、雅び詞を使つて唱歌などを敎へました。現今では皆言文一致を用ゐますけれども、以前は、普通の詞は卑俗であると言つて、皆雅言を以て歌を作り、それを子供に謠はせました。そこで私は子供がどう云ふ風に理解して居るかを知りたいと思つて調べて貰ひました。さうすると歌の中に「大神」と云ふのがありましたのを、子供は「狼」であると思ひ、それから「萬の國」と云ふ事があるのを、「萬屋の國」といふ小僧のことであると思つて居りました。それですから先生は國家の事を敎へ神の事を敎へたつもりでも、子供の心には狼が出たり、國公が出たりして、何が何やら薩張り分らぬ、と云ふ狀態になるのです。それですから、講話をするのでも說敎をするのでも、一般に分り易いやうにせぬと、とんだ間違を起して、害を及ぼすことさへあります。曾て肥後の熊本の幼稚園で、子供に萬國地圖を示して、之は何であるかと問ひました處が、それは兎網ですと答へたさうです。成程地球圖は網の筋が引いてあつて、國の形が描いてある所は、丁度兎が網に引ッ掛つたやうに見えます。それですから、大人の考を以て子供の事を推したら間違ひますから、子供を取り扱ふ人はよく子供の心を研究せねばなりません。

第三節　統覺と個性

五十錢の用法　今お話しましたやうに、總て人が物を理會するには、其人の生れつき、經驗、性質などが基礎になるのであります故、其人がどういふ風に推理するかと云ふ事を以て、其人の個性を略ぼ推知する事が出來ます。或時私が子供に斯う云ふ問題を出して調べた事があります。

もしお前達はいろ〳〵の物を買ふ外に、毎月お父さんから五十錢宛貰つた場合には其お金をどうするか？

と云ふのです。處が或は困つた者に惠んで遣ると云ふ者もあり、或は貯金にすると云ふ者もあり、又饅頭を買つて喰べると云ふ者もあり、種々雜多の答が出ました。尤も中には好い加減な事を云うた者もありませうが、眞實の答であれば、同じ五十錢の金でも使ひ方に依つて其人の性質が分ります。何

でも其通りであつて、何か物を見ると、是れをどうするかと云ふ事に依つて其人の性質が知れて來るのであります。ですから統覺と云ふ事は、唯智力ばかりではなくして、其人の心全體の働き及び性質等に關係して居るものであります。

第四節　統覺と教授段階

五段教授　次に統覺と教授段階の事をお話いたしませう。是れは先生の爲めにお話するのですが、ヘルバルト派の教育に於ては、五段教授とて豫備・提示・比較・綜合・應用、此五ッの順序を取ることを主張します。是は何の爲めかと云ひますと、皆類化を助ける爲めであります。豫備と云ふのは、例へば、雉子の事を教へる場合に、子供は鷄と云ふ事をよく知つて居るから、先づ鷄の事を聞いて、鷄のことを考へさせて置くのです。卽ち鷄冠がどうなつて居るとか、蹴爪がどうなつて居るとかいふやうな事を聞いて置くと、それが丁度雉子を教へる豫備になるのです。それから提示と云ふのはちやんと物を觀せるのです。子供が鷄の事で既に準備して居る所に雉子を見ると、雉子にも蹴爪があり鷄冠があつて、鷄に似て居ると云ふ事がすぐ分ります。そこで雉子と鷄とを比較させ、同じ類であると云ふ事を示して綜合し、それからその知識を總ての鳥に應用してゆけばいよ／＼確實になります。かう云ふやうに順序を逐うてよく變化の出來るやうに五段教授をするのです。それ故平生慣れて居る物ならば、

豫備も入らず、直ぐ提示をしてもよいのです。要するに、ヘルバルト派のものに限らず、教授法の段階と云ふことは、すべて理會をよくする爲めに設けられたものであります。

第十三章　感　情

第一節　感情の意義及び性質

(一)緒　言　今回は感情の事に就いて御話をする積であります。感情と云ふ事は一體なか〳〵分り難いものです。併しながら又大そう必要にして而も頗る面白い作用でありまして、人が色々に活動して居るのは、大概、感情が働いて居るのであります。先づ學說に關しました面倒な方面は省きまして、感情が斯う云ふ働きをする、又斯う云ふ種類があると云ふ事を、應用の點から御話し致さうと思ひます。

(二)感情とは何か　初めに感情と智力とを比較して、感情は今迄御話をした智慧の働きとどう云ふ違ひがあるか、或はどう云ふ關係があるか、と云ふ事をお話しやうと思ひます。感情といひますと、總て心の調子に關係した事を云ふのであります。丁度三味線や琴に調子があるやうに、心にも調子があります。此人は少し調子が狂つてると云ふと、一番先きに感情が異常になつて居るのです。又此人は調子が宜いと云ふと感情の具合が宜いのです。一體調子と云ふ言葉はもと音樂から出たのでありますが、心にも丁度音樂の調子の樣にいろ〳〵變化のある働きをして行く方面があります。

(三)感情の區分　其調子の中で一番よく分つて今迄誰も氣が付いて居たのは苦樂であります。今迄の學者は、感情の根本的區分を苦しいと云ふ調子と樂しいと云ふ調子とに分けて居りましたが、夫ればかりではありません。段々調べて見ますと、感情の中には苦しい樂しいの外にも調子があります。是等は後に段々御話して參りますと成程自分にもさう云ふことがあるとお考付きなさることがありませう。併し感情の主なるものは矢張り、樂しみと苦しみ、即ち快と不快とであります。

(四)智力と感情　大概な心の働きには、全く感情の無いものはありませんけれども、人の性質や事柄に依つて著しく多少の差があります。何物を見ても別に善いとも惡いとも思はぬものもあるし、又喜ぶものも嫌ふものもあります。初め唯物を見て、之を知るとか、考へるとか、想像して見るとか、云ふやうな事は、皆智力に屬するのであります。之に就いて苦樂するのが感情でありますから、感情と智力とは直ぐ分つて居るやうでありますが、もう少し學問の上から解剖して見ますると、益々明らかになつて參ります。即ち知の方は何が一番主になるかといひますと、知の働きは何時でも辨別と云ふ事が主であります。どんな高尚な働きでも、又極めて卑近なものでも、物事を區別すると云ふ事が智慧の一番根本になつて居ります、それですから、子供が大分智慧付いて來たと云ふ事は、物事を辨へることが出來るやうになるので分ります。お母樣を餘所の女と辨別し御乳と御茶とを別け、或は御菓子

をやつても大きいのと小さいのとを別けると云ふやうに、物に辨別が付いて來るのは、皆智慧が付いたのです。哲學者や宗教家が大さう六づかしい學理を研究するのも、其基づく所は子供の是等の働きと同じく辨別して行くのであります。所が情の方はどうであるかといひますと、情には辨別と云ふ事がなく、全く無分別のものであります。情は盲目的のものであると言ひますが、情の一番主位になるものは、前に述べた通り調子であります。その外いろ〳〵智力と異つた働きがありますが、丁度智力とは相反して居るのであります。今試みに知の作用と情の作用とを比較すれば、左表のやうになります。

知——辨別的—分解的—相對的—客觀的
情——調子的—總合的—絶對的—主觀的

(五)分解と總合　知はすべて物事を分けるのでありますから、一つのものを細かに分けて見ないとよく分りませぬ。例へば、二つの時計の外面を見ますと、二つとも同じやうですが、段々分解して見ると内部の違ひが分つて參ります。さういふやうに知の働きといふものは何時でも、物を細かく分けますが、情の働きはどうかといひますると、總合して往くのです。

(六)智の人と情の人　是れは始終諸君が御經驗にもなつてお出でなさる事であつて、どなたも御存知でありませうが、人には智の人と情の人とがあります。即ち智慧のよく働く人と、情のよく働く人とがあります。智慧の人は何事があつても、其悲しいとか、悔しいとか、憎いとかいふことを、直ぐに

行爲に現はさぬものです。例へば、彼の或る行爲は憎い、併し斯ういふ風に使ふと役に立つから、憎いのは憎いとして置いて、斯ういふやうに使つてやらうと考へるのです。斯く智慧の人は、此處は宜い彼處は惡いと細かに考へますが、感情の人はさうは行かぬのです。此人はいけぬといふ事になると、皆いけぬのです。彼れはいけぬ駄目であると、一概に棄てゝ仕舞ひます。即ち一つ惡い事があると、皆駄目にして仕舞ひます。縱令その相手のすべてがいけぬのではなく、或る點だけがいけぬので、外にいくらも宜い事があつても、情の人は、一度怒ると全く排斥して仕舞ふのです。夫婦喧嘩抔をして細君に惡い事があると、情の夫は、「貴樣のやうな者はもう出て行け」といつて怒ります。さうして細君が言はれるまゝに出て行きますと、後で、急に惜しくなつても、今更謝罪る譯すにはゆかず、といふやうな事になるのであります。

斯く感情の人は、何でも物事を綜合して仕舞ふのでありますが、是れは御互に宜く注意すべき事です。何でも感情の盛んに働く際には、事物の道理が充分分らぬやうになつて仕舞ふものです。それゆゑ非常に嬉しいと思ひ悲しいと思ふ時には、事を誤る場合が多いものですから、大事な事であつたらば、幾ら嬉しくても嬉しさをちやんとよく考へて切盛りして行かねばなりません。悲しい時はなほ更さうでありまして、悲しいと言つて其儘漫りに悲しんで居てはどの樣な困難に陷るかも知れませぬ。悲しみは悲しみとしても、大切な事は其中にちやんと分解辨別して置かねばなりませぬ。

(七)相對と絶對　右に反して知の方は相對です。相對といふのは、物が二つ無ければなりませぬ。一つの物では比較になりません。哲學者などが絶對といふのは、唯一つの物であるから分らぬのです。總てものは何か必ず較べ物があるから分るので、世の中の燈火が電氣燈ばかりでありましたら、何もかも電氣燈で殊更に電氣燈と云つて區別する必要は無くなつて仕舞ひます。所が電氣燈の外の燈火が色々有るから、それに較べて見て分るのです。すべて智慧を働かすのには、何時でも二つのものを較べて見て、どう違ふかといふ樣に辨別をするのですから、智慧は相對的のものであるといふのであります。それから情はどうかといふに、絶對的のものであります。絶對といふのは何う云ふのかといひますと、別に較べる物が無い、悲しい時には唯悲しいとなり、苦しい時には唯苦しいとなつて仕舞ひ、面白い時には面白いとなつて仕舞ふのです。コッチとアッチの兩方面に面白味があつてドッチが面白いかといふ譯ではありません。花を見て奇麗だと思ふ時には、その奇麗さを較べて見て、去年の奇麗さと今年の奇麗さとはどつちが奇麗だらうかといふやうなことはそんな時には考へぬのです。若しかく考へる時には智慧が働きますから、感情は無くなつて仕舞ひます。酒が旨いその旨いと思うた瞬間には、唯すべてが旨いとなつて仕舞ふまでゝ、不味いといふ所が少し殘つて居るといふことはありません。情はかやうに何時でも絶對になつて仕舞ふのです。それゆゑどんな弱い感情であつても、情といふ時は全くそれに雙ぶ物は無いのです。苦しければ苦しい、面白ければ面白い、悲しければ悲しい

といふやうに心の中が皆一つ調子になつて仕舞ふのであります。

(八)客觀と主觀　其次に智慧は客觀的に働くものです。客觀といふのはどう云ふ事かといふと、自分より外の物です。知は自分以外のものに關係して居ります。例へば、時計を知るといふのは、自分の心以外の物として知るのです。知の働きは目を瞑つて心の中で考へるのですけれども、其處には皆形とか色とか大さとか外界に關係を有つて居て、その關係から分つて來るのです。情の方は主觀的のものでありまして、外界に關係が少い。卽ち情は、自己の心丈けの範圍のものであります。客觀の方は多數の人が皆同じ樣に聞いたり見たりすることが出來ます。例へば、此時計を皆さんと私と共に見れば、皆同じ樣な見方で之を三角と見る人は無い皆圓いと見られるでせう。之を金時計と見る人は無い。誰だつて銀時計だといふことは分りませう。かやうに誰が見ても圓く見え、誰が見ても銀時計と見えるといふのは客觀の性質を帶びて居るからであります。併ながら此時計を好くとか好かぬとかいふことは、銘々皆違つて居ります。斯く好く人と好かぬ人と有るといふのは、自己の心丈けのものであるゆゑ別々になつて來るのです。實に世の中はよくしたもので、一方では無差別平等に誰でも電氣燈を見れば電氣燈、時計を見れば時計、三味線の音は三味線の音といふやうに同じく分りますけれども、これを好むとか好まぬとか、苦みを覺えるとか樂みを感ずるとかいふことは、銘々皆違つて居ります。それが若しさうで無くて、誰の好惡も皆一致して御覽なさい……此處に御出でになる御婦人方は御心配

は無いでせうが……阿多福は生涯嫁に行かれぬ事になりませう。同樣に皆が阿多福は嫌だ〳〵と思つて居つたならば、氣の毒にも生涯嫁には行かれませぬ。ところが世はさま〴〵で、阿多福のあの頬の膨れたところに實に好い處がある。鼻の低い處に言ふに言はれぬ趣味が有るといふやうに、或人には非常に好くなるのです。是れは滑稽のやうな話ですが實は眞理です。何でも此通りで、人間の感情といふものは必ずしも皆同じに行くものではありません。無論其中で一致する點もありますけれども、一致する中にも矢張り色々な違ひが有ります。それゆゑ世の中が面白いのです。私の話を皆さんが聞いて下さつて何方も同じ程度に御分りになるにしましても、面白く感ぜらるゝ程度は一人〳〵、皆違つて居りませう。人心の同じからざること猶其面の如しであつて、人々の心は皆それ〴〵に違つて居るのです。實に此世の中には、一方に差別が有れば他方に無差別が有るといふ風に、相待ち相助けて行く樣になつて居るのであります。是れはつまり人心にかういふ性質が具つて居るからであります。

(九)感情の特質　そこで、感情の特質を擧げて見ますと、前の圖式に示してあるやうに、調子的・總合的・絶對的・主觀的の四つになります。是等の働は諸君が皆有つて居られるのです。それですから、幾ら人と御附合をしてお出になつても、嫌ひな者が直ぐ好きにはならぬし、好きな者が直ぐ嫌ひにはなりません。長い間に段々と慣らしてゆく中には感情の變つて來ることもあります。併しながら直ぐに變るものではありません。それは主觀的の特質であります。

(十)感情の方向　次に感情の方向を述べませう。これは今お話した感情の調子が色々に働くことを御話するのでありますが、茲に六つの方面が有ります。第一は、前に申しました快と不快即ち苦樂のことで、是れは諸君がよく御存じのことであります。その次に興奮と沈靜、その次は緊張と弛緩、是れ丈けに感情の向きが變つて居ります。

(十一)快と不快　快不快と云事は、多くの場合に誰でも現實に感ずるものです。現に諸君の中には、今大さう氣分の良い人もありませう。中には一盞きこし召して御出でなさる方もあるかも知れませぬ。又中には寒いのにお出になつて多少不快の人もあるかも知れませぬ。さう云ふ樣に心は多くの場合に快不快の何れかに働いて居ます。併ながらこの二つのどちらが強くても働いたり物を考へたりするには共に都合が惡いのであります。即ち餘り心持がよくても考が出ぬし、餘り不愉快では尙ほ出ぬものです。それですから、さう云ふ感情を冷かに靜めることが物を考へる爲めに大切であります。是れは一般のことですから悉しく申すまでもありますまい。

(十二)興奮と沈靜　次に興奮といふことを說明しませう。先づ興奮といふのは、別に快でも不快でも無いけれども、心が引き立つて來ることを言ふのです。心が引立つて來るといふのはどう云ふ事かといふと、是れは又色々ありますが、その最もよく分る例は、人の眼に大さうハッキリした赤色を見せると、ア、眼が醒めるやうだと言ひます。この眼が醒めるやうだといふのは、其心の興奮して來た

狀態であります。それを實驗して測つて見ますと、脈などが變つて來ます。何も見せずに置いて突然眼前に赤い色を出しますと、ずつと氣分が引き立つて、それと共に脈が強くなつて來ます。それから又音樂でもさうです。樂隊など非常に勇壯な音樂を聞くと、心持が好いとか惡いとかいふ事よりも、何となしに氣分が引き立ち、じつとして居られぬ樣になつて來るものです。さう云ふ狀態が總て興奮の狀態であります。演說を聞いてもさうです。强い語調で悲憤慷慨する樣な話をされると、何となしに自分の心が引き立つて來て、所謂切齒扼腕して、いざと言つたらば叩いてやらうといふやうになつて來ます。さう云ふのは快不快では無く、全く興奮の狀態であります。是れは料理屋などでよく應用して居ります。料理屋などでは人に興奮の情を起させなければ金など使ひません。人の心が始終沈んで居てはとても金は使ひません。そこで料理屋などは、ボンヤリした行燈の明りではいけませぬ。妙な薄暗い處で刺身を食べても旨くはありません。何が這入つて居るか分りませぬが、さういふ處へ行くと何だか眠くなつて心が沈んで仕舞ひます。それですから、かういふ商賣の家では何時でも、少しは損をしてでも火をカン〳〵點けて置く必要があります。そこへ出て來る者の衣裳の如きも、色が眞紅で刺戟的で無くてはなりませぬ。さうすると、此處へ來ると如何にも氣分が引立つて來ますから、「飲めや謠へや一寸先きは闇の世ぢや」といふ樣に騷ぎたくなつて來るのです。然るに給仕の者が、水色か何かで經帷子のやうな着物でも被て御酌にも出たら、迚も酒など飲んで愉快になれるものではありま

ません。それですから、直接に人の感情を動かさうとする處では、音樂でも皆興奮的刺戟的のものが行はれます。太鼓を叩いて馬鹿囃などをしますと、人が皆興奮して夢中になつて仕舞ひます。私共は經驗がありませんからよく分りませぬけれども、多分さうなるだらうと思ひます。

沈靜は其反對で、音で言ふと琴の音などは誠にやさしく沈靜の音が多くあります。琴の中にも興奮する音もありますけれども、あのやさしい音を聞くと、心が落着いて來ます。謠曲などでも、物哀れな歌を優しい聲で歌はれると、一座がシンと靜まつて來て、人の心が落着いて來ます。色も矢張その通りで、水色や淺黃色などは、すべて心を落着ける色でありますから、御婦人方の衣服でも、ア、云ふ色は穩かな色大人しい色といはれて居ます。又ケバ〳〵しい色、例へば、赤い友禪縮緬か何かの着物であると、非常に人を興奮させます。所が年を取つた人、或は年を取らぬでもつゝましやかの婦人などは、さうやたらに赤い物などを用ゐません。それは大人しい色を配合して、適度に赤い色を用ゐます。すべて大人しい色は、人の心を靜めるものです。演說をするのでも、人に話をするのでもさうです。人の心を靜めてよく聽かせねばならぬと思ひますと、音聲を變へねばなりません。私は下手ですから眞似は出來ませぬけれども、諸君が寄席へ聽きに御出になると、眞打の話は始は何だか下らぬことを言うて居るやうですが、段々話の進むに隨つて、幾百といふ聽衆が滿場水を打つたやうになつて咳拂ひ一つしても聞へる樣になるのは、皆心が沈靜して其話をする人の言ふ事丈けに注意を集めて仕

舞ふからです。そこで愈々面白くて堪らぬ時に、「次は明晩の御樂み」とやつて仕舞ひますから、どうしても又あとを聽きに行かなくてはならぬ樣になつて來るのです。勿論これは沈靜ばかりでは無く、面白いから興奮もさせるのでありますけれども、いづれにしても快不快以外の感情方向であります。かゝる事は諸君も必ず御經驗でありませう。

(十三)緊張と弛緩　次に緊張といふのは、心が張り詰めて堪らぬといふ風になつて來る狀態をいふのです。例へば、今日の午後六時に花嫁が來るといふのに、十分でも遲れますと、緊張の觀念が起つて來ます。初めはたゞ「もう來さうなものである」位で居りますが、だん〳〵時の經過するに從ひ「どうしたらう」と堪らなくなつて來ます。そんな時は快不快以外に緊張の感が起るのです。是れは又諸君が汽車を待つて御出でなさる時に經驗なさるでせう。まだ來ない〳〵と云ふ時には、大さう心が張り詰めるものです。その時には何處か筋肉も緊張します。愈々汽車が來てもう宜いといふ時には、「ア、宜かつた」と言つて溜息を吐くでせう。卽ち張り詰めた心が弛んだのであります。斯う云ふことは、吾々が常に經驗することであります。今の樣なことは一つの場合ですけれども、時には隨分長い間の緊張弛緩があります。年寄などに餘り安心させると、心が弛緩して仕舞つて、モウ己は是れで宜いといふやうになり、それが身體に影響して一般に弱くなつて亡くなることが往々あります。年寄によく事へやうと思ひましたら、樂をさせて何もしないで宜いといふ樣にしては宜くありません。

「私が生きて居らなければ他人が困る」といふ樣に、自分に此の世の中に生きて居る必要が有ることを感じさせて置くと、張合が起つて年寄の身體が丈夫になります。色々な事で安心するとガツクリと逝つて仕舞ふといふことが幾らもあります。例へば、病氣の場合にはさう云ふ事が著しいものです。息子が他處へ留學して居る、そうして親が大病である。其時に電報で直ぐ歸れというてやつたがなか〳〵歸つて來ない。醫者に聽くと實に危險である。早く歸つて來れば宜いと思つて待つて居るといふやうな時には、病人も非常に緊張の情が起つて居ります。斯く心が張り詰めて居りますから、醫者の考ではどうしても死なゝくてはならぬと思うても、それがなか〳〵死なずに不思議であるといはれる事さへあります。併しながら其處へ息子が歸つて來て、「阿父さん唯今歸りました」といふと、「オヽ歸つたか」と喜ぶと共に、直ぐに死んで仕舞ふ樣な事が隨分あります。それが卽ち緊張の情と弛緩の情とが働く處であります。斯う云ふ類のことは私が申す迄も無く、諸君はいろ〳〵と御經驗のことでありませう。

このやうに述べて來ますと、今までの人が感情といふものは、苦樂より外に無いと言ひましたが、實はさうで無く、斯う云ふ色々の働きがあることが分ります。是れが色々と複合して、我々の心の調子が出來て居るのです。諸君の心が働くといふのは、是等の六つが色々變じて働きをして居るのであります。

第二節　單　情

(一)感情の發達　次にさう云ふ感情が如何に發達して來るかといふことを御話いたしますと、それは、三段の發達をして來ます、單純感情・情緒及び情操がそれであります。單純感情は又略して單情ともいひます。字を見ずに聞きますと、何か子供でも生れた樣に聞えますが、さうではありません。唯簡單な一つの情であります。この情の一番よく分るのは、氣分といふことであります。吾々は朝起きた時に、今日は何だか氣分が惡いとか、或は今日は氣分が宜いとかいひますが、その氣分といふのは單純感情であります。

(二)單情と氣分　何も別にどう云ふ譯で今日は氣分が宜いとか惡いとかいふことは無いので　何となしにたゞ之を感ずるのですが、其多くは身體の工合から來るのです。身體には胃や腸のやうなものがありますし、又心臟とか肺臟とかその外色々の內臟機關があります。是等の機關の狀態から氣分が起つて來るのでありまして、是が感情の基礎になるのです。すべて人の氣質性分などの違ひは、其處から起つて來ることが多いのであります。今までの人は胸や腹から起つて來る感情などは詰らぬものであると考へたのですが、實は其の人全體の氣質は之が土臺となつて居るのであります。始終腸胃が惡くて鬱々して居る人は、神經質で、氣が短かく直きに腹を立てる樣になります。然るに何時でもお腹

の工合が宜くて生々した氣分の人は、容易に激昂せず、事を行つて久しきに耐へて、シツカリした人物となることが出來ます。斯く氣分は大事なものでありますが、氣分を宜くしやうと思へば、身體を丈夫にせねばなりませぬ。殊に腸や胃の惡い夫だの妻だのを持つた人は、餘程氣を附けねばなりませぬ。腸胃の惡い夫を持つた妻は、氣六づかしいといふことを覺悟せねばなりませぬ。併しさういふ人でも身體が健康になると、今まで大さう怒つた者も怒らくなくなり、今まで短氣であつた者も段々氣が長くなるといふ樣に變つて參ります。是等は何れも單純感情に基くのであります。

(三)單情と感覺　もう一つは、見たり聞いたりすることから起る單情です。是等は何かの意味があつて快樂を感ずるとか不快を感ずるとかいふのでは無くして、單純に眼に都合好く光線が來るとか、或は音が丁度自分の耳に適當に響くとかいふの類で、それ丈けで氣持が宜いのです。朝起きて日の光を見て氣持が宜いといふのは、今迄暗い處に居つたのが明るい日に照されるからです。耳に音樂を聞いて面白いといふのは、その音が丁度適度に刺激するからです。音は唯單純の音でも、好い音と嫌な音とがあります。例へば、銀の器は大さう好い音がします。支那で銀の字の音をギンといふのは、ギン〳〵と音がするからです。今此の銀貨を叩きますからお聞きなさい。私は今此處に金貨を持つて居りませぬが、皆さんの御宅には澤山持つて居られませうから叩いて御覽なさい。金はキン〳〵といふ音が致します。それでキンといふ名を附けたのです。音樂でなく唯是れ丈けでも大さう床しい優しい感

情を起させます。ですから、或る鑛物が眞の銀か金かといふ事を試すには、叩いて見ると分ります。混物が有つたり惡い金でありましたら、斯う云ふ好い音は致しません。兎も角も、かやうに唯音として丈けでも我々に愉快な感じを與へ或は不愉快な感じを與へるのが單純感情であります。色でもその通りです。その外何でも單純な感覺のみで愉快を與へたり不愉快を與へたりするのは、皆單純感情の中に入るのであります。

第三節　情　緒

(一)情緒とは何か　感情の三段の發達に於て、最初に現れてくるのは上述の單情でありますが、次に現れるのは情緒であります。これは大分複雜なものになつて來ます。情緒といふ働きは、普通にたゞ情と呼ぶのが卽ち是れであります。支那の言葉で情というたのは、大抵情緒のことであります。喜、怒、哀、樂、愛、惡、欲、之を支那では七情と名けます。併しながら此の中の欲だけは、今日の心理學では感情の中に入れません。欲は自分の欲する心でありますから、意思の働きの中に入れます。他の六つは何れも皆情緒であります。

(二)情緒と單情　情緒は唯五官に觸れて快不快を感ずるのではありません。憎いとか可愛いとかいふ心で、餘程複雜なものであります。それはどうして起るかといふと、例へば、茲に一人の女子が有るとしませう。さうして其顏付が如何にも綺麗だとしますと、其顏丈けでも愉快な感じが起ります。これは單情です。又其の聲が誠に銀鈴を振るやうな好い聲だといふと、其聲を聞いた丈けでも愉快を感じます。これも單情です。その女の歩み方が好いと、運動の狀態丈けを見ても愉快に感じます。これも亦單情です。かく頭の先から爪の先まで我々に愉快を與へますと、全體として可愛いといふ情緒が起るのです。すべて可愛いとか憎いとかといふことを解剖して見ますと、今のやうになるのです。可愛いといふ時には、我々に愉快を與へる分子が多いので、憎いといふのは之に反して、鼻は獅子鼻で上を向いて居つて、雨が降ると上の方から雨が入る、さうして物を言ふ時には象の樣な聲を出す。一々氣に喰はぬ、さうして歩く時にはドタ〳〵やつて、丸で地震でも搖るやうな音がする、之も氣に入らぬといふ樣になると、全體總計したところで人に不快の感じを與へるから、憎らしいとなるのです。それですから同じ情であつても、憎いとか可愛いとか樂しいとか腹が立つとかいふのは、唯眼で見たとか耳で聞いたとかいふのではありません。さう云ふものが澤山集つて、向ふにチャンと相手(對象)が出來るのです。卽ちその相手に對して是れは腹の立つ男であるとか、これは可愛い子供であるといふ風になるのです。さう云ふ情を總て情緒といふのであります。是れは人には誰にもあるもので大さう大切な作用です。人の生涯は、殆んど情緒の働きに依つて、家庭も出來て居れば、國も出來て居るといふやうに、總てのものが多く此情の働きで動いて居るのであります。所が此情はどうかすると

大さう誤り易いものです。佛敎者などは煩惱と言つて非常に戒めて居ります。「煩惱の犬は逐へども去らず、菩提の鹿は招けども來らず」といふの類が多くあります。犬で無くても煩惱は澤山あります。人は煩惱の塊りであります。喜ぶとか可愛がるとか怒るとか憎むとかいふのは、皆煩惱でありますから煩惱といふ事は、一面からいふと非常に危險な惡いものですが、併し又一面からいふと、煩惱が無ければ菩提もありませんから、佛敎で說く煩惱卽菩提といふことは大に意味のあることであります。その煩惱たる喜怒哀樂愛惡などの情緒を適當に働かして行く事が出來チャンと宜しきを得れば、是れが菩提です。其外に菩提は無いと思ひます。つまり親は親らしく、子は子らしく、所謂「らしくぶるな」を實行すれば、玆に菩提は實現された者であります。情緒は誠に危險なもので、愛なども、享樂主義や自然主義の愛などは特に危險であります。諸君の中には是等の主義の書物を讀んで面白く思はれる方があるかも知れませぬが、試にお考へなさい、自分の子供等が皆かういふ主義を實行したらばどうであらうと。長女は自然主義を實行して何處かへ行つて仕舞つた、次女も戀愛神聖を標榜して若い異性と家を出掛けたといふやうでは堪りますまい。さう云ふことを考へて見ますと、愛情は大事なものでありますけれども、一旦之を誤るならば、人生に取つて是程危險の者は無いのですから、それを巧みに調子を取つて宜しきに適ふやうにして行くことが、敎育家や宗敎家や又家庭を治めて行く父母の責任であります。以上單純感情と情緒との別は諸君によくお分りになつたらうと思ひます。

第四節　情　操

(一)情操とは何か　感情の第三段の發達として現れるものは、情操であります。よく新聞や雜誌に、情の下に想の字を書いてありますけれども、それとは違ひます。今私が情を三つに分けてお話する一番上の高い情は、操といふ字を加へて情操と書くのです。これはどう云ふ働きかと申しますと、人の心の作用中でも最高い働きで、此の情は修養の有る人で無ければなか〳〵起り惡いもので、詰り人の理想に對して起るのであります。

(二)科學的情操　人は誰しも嘘を嫌ひ眞を欲するものです。是れは何んな劣等の人でも眞の方が宜いと云ふことは考へませう。人に嘘を吐く者でありましても、自分が他人に嘘を吐かれると困りますから、嘘と眞と何方が宜いかと云ひますと、誰でも眞の方が宜いと言ひませう。今諸君が此處にお出でになつて私の講義を聽かるゝと云ふのは、何の爲めかと云ふと、一つは何んなことを言ふか聽いて見やうと云ふ好奇心もありませうが、確かに諸君は眞理を知りたい、自分の心が何う云ふものであるか其の眞實を知りたいと云ふことからお出でになつたのでありませう。卽ち人が他人に物を尋ねるのは、眞を知りたいからであります。其の眞に對して起る情操が、卽ち科學的又は知的情操と呼ばれるのであります。諸君も何か分らぬと、何うして斯うなるであらうと悶かしくて耐らず、所謂煩悶なさるで

せう。併しそれが分ると嬉しくて耐らぬでせう。何も分つたからと云つてそれが百圓になるとか千圓になるとか云ふ譯ではありません。併し金にならぬでも、分らぬ事があると分らしたいと心を苦しめそれが分ると嬉しいものです。斯く純粹に眞理を知れば喜ぶが、それが分らぬと苦しいと云ふのは、取りも直さず情操であります。若しも之が利害の念から起る情であるならば、それは情緒であります。自分が他處の人に褒められやうが、褒められまいが、或は儲からうが儲かるまいが、それには頓着なく、たゞ分ればよいのが情操です。「ア、何であつたか」と云つて思ひ出せぬ時には心が苦しく思ひ出せると「ア、左樣であつた」と喜ぶ。これ亦純粹の情操であります。さう云ふ心は、人に重要なもので、眞に知識を求めて進んで行かうとする人には最も強く働きます。よく居士が參禪する爲めに、鎌倉の圓覺寺或は京都の建仁寺などに澤山集つて居ます。或人は十五年掛つて一つの問題が解けない。禪の方では之を公案といひますが、その公案が十五年も解決出來ずに非常に苦心して何うかして悟らう理解しやうと思つて、或は一週間も眠らずに居ると云ふ人さへあります。私の友人にもさう云ふ熱心家がありました。勇猛精進と云ひまして、知識を求める心が強い。其人が十五年目に師家の前に行つて公案を解いた處が、それで宜いと言はれて、嬉しくて耐りません。そこで本當に手の舞ひ足の踏む所を知らずで、五十何歳かのお爺さんが、子供のやうに小踊りして、何うして廊下を歸つて來たか分らず、夢中で飛んで來たといふのもあります。それ位眞理の解つたのは嬉しいものです。併し公案

を許されても、總理大臣に成れるでもなし、お稻荷さまの位から、二番目に成れる譯でも無いのですが、唯眞理が分つた事が嬉しいのであります。

(三)道德的情操　又人は善い事をした時には非常に嬉しく、惡い事をした時には非常に苦しいものです。斯う云ふ心が盛んになる丈け人は偉いのです。人の中でも立派な人即ち人格の高い人と云ふのは責任觀念が强く、何時でも自分が善い事をした時には、誰知らぬでも心が愉快に滿足して居りますが、之に反して、何か惡い事をした時には、誰も知る人は無くとも自分の心が咎めて苦しくて耐らぬのです。斯う云ふ人は良心が發達した立派な人でありまして、それが善に對する人の感情であります。人が善をなすのは、かゝる心を具備した事を廣告する爲めでもなく、又之を具備したと云ふ事を褒められやうと思つて之をするのでもないのです。若しかういふ考から善をすれば、それは眞の情操では無く情緒であります。何故といふに、それは自分の欲や名譽心から起つたのであるからです。情操は他人が知らうが知るまいが構はず、たゞ自分の心の中で考へて、之は善い事をした之は惡い事をしたと思ひ、それに依つて苦樂する處の情が眞の情操であります。之と共に他人の行爲の善惡に對しても自己の利害に關係なく同樣の快不快を感じます。是れ亦道德的情操であります。

(四)美的情操　次は美的情操即ち美情の話です。凡て人は美しい物を見ると愉快な情が起り、醜い物を見ると不愉快な情が起ります。何んな人にでもこの美醜の情はありますが、高尙な人になる丈け、

劣等な者、修養の無い者が美として居る事が、却つて醜に見え、劣等の人には分らぬやうなことが段々美しく見えて來ます。併し修養のある人でも無い人でも、美を喜び醜を憎む事は誰しもあります。其純粹の美を喜び醜を惡むと云ふ心が美的情操であります。之が間違つて働きますと、情操でなくして矢張り情緒になつて了ひます。此頃新聞の廣告によくあります。「フエースクリーム」と云ふやうな物ばかり塗抹つて顏を綺麗にするやうな人を見ますと、前の方ばかりはテラ〳〵光つて綺麗のやうですが、後の方をよく見ますと、襟には垢が一ぱい溜つて居るといふ狀態です。こんなのは眞實に美しいのでは無く、表面計りでありまして、さう云ふ人の爪を見ると、黑い垢が一杯這入つて居ります。鼻腔の中を見ると、之にも黑い物がつまつて居ります。齒糞も一杯附いて居りまして、ものを言ふと雪のやうに飛んで來たりします。こんなのは顏の如何にかゝはらず眞の美ではありません。今日の女性、例へば、女優や女給などは勿論、女學生の中にも、隨分お虛飾（つくり）するものが多く有りますが、是等は眞に美の感情から來て居るのではなく、矢張り虛榮心或は名譽心の働きで他人に綺麗に見せやうと云ふ處から來るのですから、眞の情操ではありません。眞の情操は、他人が見ようが見まいが、自分に垢が着いて居つたり汚くなつて居つては、自ら不愉快でありますから、何時でもよく氣を付け自分自らを美しくすると云ふ事に依つて滿足するのです。かういふ風になつて來なければ高尙の人とはいへません。

(五)宗教的情操　以上の眞善美を統一したものが所謂聖でありまして、宗教的情操は卽ちこれから起るのであります。卽ち此の情は完全な理想聖に對して起るのであります。佛樣や神樣は人間が到達すべき一番完全の理想であります。ですから神佛は善であります。又神佛が嘘の物ならば、拜んだり尊崇したりするには足りません。神佛が惡い物であれば、そんなものは棄てゝ仕舞ふがよいのです。又神佛の面相は莊嚴端正な有難い立派なものとしてあります。そこで日本の美術でも西洋の美術でも、宗教と伴つて發達して居ります。つまり眞善美を具備した完全の理想に對する情が宗教の情でありまして、人に取つて大切な働であります。以上四種の情操は所謂文化的感情であります。

第五節　表　情

(一)表情とは何か　以上に述べました單情・情緒・情操の三つは、常に吾々の心に色々複雜に現れて居るのであります。さうして是等の感情は、身體の何れにか現れて來るものであつて、之を表情といひます。卽ち內に感ずる處あればそれが外に現れるのです。顏色や顏容や手足の運動やに現れて來ます。其現はれの著しい程人の心中をよく察する事が出來ます。人相見でも或は人相見で無くとも、多くの人を使つて居る人は、或人を見てこの人は今何う感じて居る、何う云ふ事を考へて居る、と云ふ樣な事を察する事が出來るものです。これはつまり表情を捉へて推度するのであります。今其表情のお話

をしますと、一體表情は六つかしい働きでありまして、此の事ばかり研究しましても大きな書物が出來ます。……現在出來ても居るのであります。之は段々研究して往けば人相見・骨相學等にも關係して居るのであります。

(二)單情の表出と呼吸　先づ第一に單純感情の表出と云ふ事を說きませう。單情が起りますと、一番初めに呼吸が變つて來ます。人は愉快の時には、呼吸が深くして、その數は寧ろ少くなるものです。それが不愉快であると、呼吸が淺くて、數が多くなります。詰り愉快な時にはズット肺の奥まで空氣がよく行くのですが、不愉快の時には奥まで空氣が往かず、肺の働が充分でありません。それですから、肺病になる人は心配があつて苦勞の多い人に多いのであります。一體何人の身體にも「バチルス」が居る者でありまして、私共の肺の中には肺病の「バチルス」が屹度這入つて居りませう。併し私共の身體の方が强いから、「バチルス」を殺して居るのですが、若し始終心配して居ると、深い呼吸が出來ませんから、肺の中に空氣が一杯行かず、從つて肺の働きが弱くなるから、新鮮の血液の代謝作用も充分でなく、其「バチルス」が其處に附いて居て死なずに肺病が起るのです。それ故心配をするのは肺病の爲めに一番毒であります。吾々が肺病に罹らぬやうにし、また肺病に罹つてもヒドクならぬやうにしやうと思へば、何時でも愉快な感情を有つて居るやうにすることが大切であります。信仰の有る人は肺病などに罹つても存外耐へますし、且つ罹り難い傾向があります。それにはいろ〳〵の理

由もありませうが、呼吸の狀態も大に關係するなどと思ひます。

(三)單情の表出と身體の容積　其次は體積卽ち身體の大きさです。人間の身體は大概大きさが定まつて居りますが、精密な器械を以て測つて見ますと、朝に晝に晩に吾々の身體は大きくなつたり小さくなつたりして居るのです。さう云ふ事をお話すると、まさか護謨で造つた物ではあるまいし、そんなに小さくなつたり大きくなつたりしては堪らぬと仰しやるかも知れませぬが、それは無論目に立つやうに急には變りませぬから「いやあ彼の人は今朝は小さかつたが大變膨れた」と云ふ樣な事はありません。併しチャンと精密な器械で計つて見ると、感情に依つて身體は確かに小さくなつたり大きくなつたりして居ります。何うして計るかと云ふと、詳しくお話しする必要も無いですが、水の中に手の先を入れまして、水が溢れないやうに硝子を張り、一杯水を入れ、その尖端へゴムの管を附けて、管から水が通るやうにして置くのです。そこで水が增して押しますと針が動くし、手が小さくなれば水が減り、水が減れば針が下へ動き、殖えれば上へ動く、と云ふ樣な仕掛をして、其人を怒らせて見たり喜ばせて見たりするのです。怒らすというても、頭を擲くといふ事も出來ませんから、小說の中から腹の立つ處を讀んで聞かせるとか、又非常に怖しい處非常に悲しい處抔を讀んで聞かせますと、其度に身體が小さくなつたり大きくなつたりする事がチャンと現れます。ですから諸君も愉快である時には身體がウンと大きくなつて居るし、不愉快な時には小さくなつて居るのです。街路を歩いても大概分りませ

う。今日は一萬圓儲かつて愉快だとか、或は今晩花嫁が來るとか、或は昨日月給が昇つたとか云ふ人は、ウンと薙刀を逆さに呑んだやうにして、腹一杯に空氣を入れて大きくなつて歩いて居ます。處が昨日蚰蜒に似た非の字を貰つたとか、兎に似た免の字を貰つたとかいふ官吏、或は折角見込んだ株が下つたので何萬圓損したと云ふ樣な商人は、必ず悄然として小さくなつて歩いて居ります。誰も俺は損をしたぞと云つて大きくなつて威張つて歩く人は無い。俺は嬶に出て行かれたぞと云つて大手を振つて反り身になつて歩く者は無いでせう。不愉快な事があれば自然と悄れて下を向いて歩くものです。支那の形容詞に、跼天蹐地と云ふ事があります。何か差しい事があるとか恐れ入つた事があると、此の形容詞を使ひます。これは天に蹐（せぐくま）り、地に跼（ぬきあし）すといふのです。天は高いのに頭が天に碍へるやうに思つて小さくなつて歩き、地は厚いのに拔足するやうに小さくなつて歩くといふのです。之は形容でありますけれども、實に良い形容であると思ひます。人が眞に恥かしいと思つたり、眞にこれでは詰らぬと思ふ時には、身體が小さくなります。さう云ふ具合に人の體積までが感情に依つて違ふものであります。

（四）單情の表出と脈搏　次は脈搏の變化であります。愉快な時には脈が遲くなつて而かも强くなります。之に反して不愉快でありますと脈が速く且つ弱くなつて來ます。興奮した時には强くして速く、沈靜した時には弱くして遲く、緊張した時には遲く、遲緩した時には速いのであります。斯う云ふや

うに單純感情に伴つて脈搏が變つて來ます。

（五）單情の表出と體力　又感情に由つて體力が變つて來ます。愉快な時には平生よりも力が强くなり、不愉快であると平生出るべき力も出なくなるのであります。斯ういふ道理をよく知つて居りますと、人を使ふにも大いに使ひ方があります。家内で女中や雇男を使ふのでも、彼等をガミ〳〵叱つて不愉快な思ひをさせながら働かしたならば、假令三時間働かせても一時間位の能率しか上りません。從つて其間に故意でなくても物品を顚覆したり毀したりしますから、益では決してありません。ですからガミ〳〵人を使ふ者は必ず損をします。人を劬はつてやり、使はれる人が本當に彼の人の爲めには何んな苦勞をしても盡してあげたいと喜んで事をするやうに愉快な感を以てすると、多くの力が出ますから、隨つて多くの仕事が出來る譯です。諸君は各自の御經驗もありませう。樂んでやる時には如何なる事も氣にならぬものです。友人と遲くまで起きて居てトラムプを弄ぶのでも、面白い時には一時でも二時でも平氣でせう。ですから歌加留多などをする時には、自然夜更しをするのです。併し裁縫をしろと命令された時には、九時過ぎになるともう船を漕ぎ出します。川も無いのに漕ぎ出したり、月夜であるのに鼻から提灯を出したりして、直ぐに退屈して弱つてしまひます。すべて物事はかういふやうな譯で、愉快であると夜でも何時までも起きて居られる斗りではなく、働きをするにも多くの力の出るものであります。ですから人は愉快にして働き、愉快にして勉强するやうにしなければなり

ませぬ。以上の事は單純感情の表出であります。

(六)情緒の表出と内臓機能　情緒になりますと、表出が一層複雜です。腹が立つとか、憎いとか、口惜しいとか、喜ばしいとか云ふ樣な時には、以上に述べた四つの表出は無論ありまして、其上に内臓の變化を起します。卽ち何か腹が立つて口惜しいと思ふと、腸や胃や心臓や、凡てさう云ふ機關の働きに變調を來します。卽ち先づ心臓が非常に鼓動致します。それから又顏が赤くなつて、胃の方へは血液が環らぬから、不消化を來します。或は又心配すれば非常に腸胃を害します。それですから、クヨクヨ心配する人は、何時でも腸胃病が多いのです。お醫者にも原因の分らぬ下痢などが起ることがあります。何にも惡い物を喰べたのでもなく、何處を診ても何でもないに下痢が起ると云ふやうな場合に、お醫者が心理を知つて居れば、何か驚いた事はないか、心配な事はないかと尋ねるでせう。さうすると、銀行が破產しさうで、貯金が取れなくなりはしないかと心配して居るといふ樣な事が分りませう。銀行の破產と下痢との關係は面白いことですが、人が驚いたり心配したりすると、お醫者にも分らぬやうな病氣が起る事があります。これは皆内臓の機能が變つて來るからです。又婦人方は懷姙して居られる時に、喜怒哀樂の情を强く動かすことは良くないのです。喜んでも餘り喜ぶ事は良くない。況して悲しむとか怖れるとか云ふ事は、一層良くないのであります。胎兒が生れてから後によく氣を注げねばならぬことは、心配したり腹が立つたりした時に、直ぐ子供に乳を哺ませることです。か

ういふ場合には、其乳に毒が出來て居りますから、其の爲めに子供が痙攣けて死ぬやうな事もあるさうです。曾て英國にさう云ふ怖ろしい例が在りまして、心理學者のカーペンタアといふ人が之を記しました。それは斯う云ふ例であります。或大工の家庭でありましたが、主婦さんが乳呑兒を抱いて居る處へ、夫の友人で兵隊に行つて居る者が、久し振で訪ねて來て、夫と愉快に談話して居りましたが、何か言葉の行違ひから喧嘩を仕出して、兵隊が劍を拔いて夫を斬ると云ふので、非常な騷動をいたしました。そこで主婦さんは心配して中へ這入つて夫を助け、兵隊を押へ付けて巡査に渡すと云ふ樣なエライ騷動をしたのです。さうして喧嘩の間は子供が泣くのをソッチ退けにして居ましたが、喧嘩が濟んでから子供が泣くのに氣が付いて、乳を呑ませました。一體この子供は健康で在つたのですが、其乳を呑ませて二三時間經つと、急に樣子が變になつて痙攣けました。そこで醫者を喚んで診て貰ひましたが、醫者は段々原因を調べて、何う云ふ物を喰べさせたかと質しましたが、夫婦は何も食べさせません唯乳丈けやりましたと云ふのです。處が樣子を見ると、主婦さんも亭主もどうも餘程激して居るやうです。そこで醫者が、お前方は何うかしはせぬかと問ひましたら、主婦が嚮きの喧嘩の事を一通り話しました。そこで醫者は「それだ」と云ふので、種々手當をしましたけれども、其兒はよくなかつた、と云ふことです。かういふやうに、感情は、内臓の働きに變化を及ぼすもので、之は餘程大切なことであります。卽ち病氣も氣の持ちやうから良くなつたり惡くなつたりする程のものであり

ます。

(七)情緒の表出と顔面　次には顔面・四肢・聲音の方面ですが、情が激しくなつて參りますと、あらゆる身體中に表出が起ります。就中顔面には最も著るしく現はれます。顔の筋肉程細かにいろ〳〵の運動を現はすものはありません。顔面には澤山の肉が付いて居ます。顔面の肉は一つのやうですけれども左樣では有ません。皮をはがして見ると……厚いのは千枚張りと云ふのは話が大き過ぎますが……下にいろ〳〵の肉が付いて居りまして、それに依つて笑つたり悲んだり、苦い顔をしたり酸つぱい顔をしたりするのであります。斯く種々の顔容がありますが、之を知つてよく働きを現はすのは俳優です。俳優は自分に感じが起らぬでも起つたやうな顔容をするのです。團洲の腹藝など云ふこともそれです。何にも言ひませんでも、唯の表出で例へば如何にも口惜しさうなとか、殘念さうなとか、云ふ事が分るのです。實に顔の筋肉程人の感情をよく現すものはありません。單に顔面の表出といひましても、顔には筋肉計りではなく、口があり鼻があり眼があり耳があります。是等の物は、皆表出の機關になるのであります。其内で一番よく働くのは目です。「目が口程にものを言ふ」とて、目付と云ふものは直に此人は悲んで居るとか、或は此人は喜んで居るとか、此人は愉快な感を有つて居るとか、或は謹んで居るとか云ふ事が直ぐに分ります。少し氣を付けて居れば、目を見て其人の心持がよく分るものであります。注意の乏しいぼんやりした人の目は、眼光がどんよりして居ります。之に反して

眼光烱々人を射ると云ふ太閤のやうな人は、小さいけれども支那から來た使者が仰ぎ見る事が出來ぬ程に輝いて怖いのです。それは一寸も心に油斷がないから、顔面にそれが現れるのです。諸君の中には福島大將にお會になつた方がありませうが、あの人を御覽なさい。何にも外に常人と變つた所はありませんが、眼丈けは變つて居ります。卽ち何時も油斷なく輝いて居ます。すべて人は山や野や知らぬ處を歩いて少しも油斷がないと、眼付も變つて來るのです。劍術を修めた人の眼の變る理由もそれで分ります。斯く目は女でも、男でも始終動いてよく感情を表現するものであります。

(八)情緒の表出と四肢　情の手足に現れることは、前に云つた「手の舞ひ足の踏む所を知らず」で心の中に情が動けば、手足の運動にも自然に現はれて來ます。腹の立つ時には手を握り、驚く時にはハッと手を開きます。繪に描いたのを見ても、或は寫眞でも、人が吃驚した時には何時でも指を擴げて居ます。手は最もよく驚いた時の表出をするものであります。尤も人が喧嘩をして居るのを仲裁する時にも、「マア〳〵」と云つて指を擴げますけれども、是れは別の表出であります。それから情が強くなりますと、自然と手足を亂雜に動かして極りがなくなります。手と云ふものは、知らぬ間に感情を現はします。諸君が車に乘つて居られて、何か危險い物に出逢つて御覽なさい。知らず〳〵手を以て支へるでせう。之は不思議な者です。あとでは間が惡く思ふ程に手を動かします。それから自分が車上に在つて車夫に道を敎へたりする時に、車夫の後の方には眼も無いのに、あつちへ行けと云うて手

で指示します。是等は何れも心の働きに手が伴つた居る例證であります。感情が働くとおのづから手が動く、智慧の働きにも手が動き、意志の働きにも手が動くのです。それですから手足と云ふものは、顔面に次いでよく情を現はす働きをするものであります。

(九)音聲その他に於ける情緒の表出　それから聲であります。われ識らず嬉しい時には喜びの聲が出るし、又口惜しいとか驚いたとか云ふ時には、それ相應の聲が出ます。それから驚きが強いと腰が拔けて動けぬ事もあります。腰が拔けるというても、腰丈け拔け出して飛んで行くのではありません。つまり腰を支配する神經が働きをせぬやうになるのです。それですから心は彌猛に逸れども、身體が動かないのです。朝鮮の王妃事件の時に出遭つた人の談話に、「腰が拔けると云ふのを澤山見たが、隨分面白いものである」といふことです。就中外國人など平生威張つて居る者の處へ、血刀を提げて行くと、逃げやうと思ふけれども逃げ切れぬものですから、頻りに一つ處ばかりで藻掻いて居るさうです。而して傍へ行くと、頻りに拜んだといふことです。此拜むと云ふことは奇妙です。佛敎ばかりではなく、人の自然の表出で憫みを乞ふ時には斯うやると見えます。外國人でも危急の場合には荐りに手を合せるさうです。

(十)表情と讀心　情緒作用は烈しくなつて來ると、聲にも手足にも顔面にも現はれます。かういふ樣に著しくなれば、誰にも其人の心が分りますけれども、一寸微妙な處でそれを察して、「あの人は斯う

思つて居るな」と云ふ事が分る人は偉いのです。例へば、よく氣の付く奥さまなどはそれです。小說などにもよくありますが、女中が奥さまの召して入らつしやるお羽織のお古は妾に下さるだらうと思つて居るとしますと、悧巧な奥さまは其眼付や樣子ですつかり察して仕舞ふのです。然るに若しそれに氣付かず、古くなつても遣らずに置くと、いろ〳〵奥さまの惡口を言ふやうな事にもなるのです。古い羽織一枚で散々惡口を云はれるのはつまりませんから、氣の利いた悧巧な奥さまは、あれが欲しいのであるなと思ふと、遣れる物ならば遣るし、遣れない物なら其譯を云うて外のを遣ると云ふやうな處置をします。それを遣らずに置くと、內の奥さんのやうな七月のお土藏（ボンクラ）は無い、まるで目がないなどと云ひます。ですから人の樣子を察し人の感情を言ひ現さぬ中に知るといふ事は、人を扱ふ上に大切なことであります。以上が表出の話の大略であります。尙詳しいことは人相見に就いてお聞きになつても參考になります。人相見はなか〳〵面白い事を云ふものです。人相見の云ふ事で心理學の見る處と同じ事がいくらもあります。

(十一)心と容貌との關係　一體女の顔を美しくしやうと思ふには、唯眞白に塗抹つたばかりでは可けません。精神から矯してゆかねばなりません。何時でも愉快にして心に疚しい處の無い人は、その顔の樣子までが變つて好くなります。勿論鼻の低いのは、いくら本を讀んでも心を平和にしても、急に天狗のやうに高くはなりませぬが、低ければ低いなりに氣品のある顔が出來て來るもので、これは實

に不思議なものです。始終大様に育ち心に疚しい處が無く知識が出來て來ると、その人の顔にちやんと品位が出來て來ます。是れは何うも爭はれぬものであります。私は、時々經驗して、大に感ずることですが、稀に鄕里などに歸つて見ますと、昔大さうな立派な家であつて其處の人は女でも男でも立派な人で在つたのが、いろ／＼の事から零落れて終に惡い事をしたと云ふやうな人に出逢ひますと、僅數年逢はぬ中に、全く相好が變つて、卑しい人柄になつて居るのに驚きます。かう云ふやうに、墮落した者ならば例令美麗な衣服を着て居ましても、昔の氣高かつた人として、物を言ふ事の出來ぬ程に變るものです。それですから、人は貧しくても何でも心を正しく有つて、何時でも自分に滿足した愉快な感情を有すると云ふ事が美人たる第一の秘訣であります。如何に美しい人でも、常にくよ／＼心配したり種々な惡い事があつて心が疚しいと、屹度衰へて容貌も醜くなり、且一般に卑しい不安の狀態が現れて來るものです。

第六節　感情と人生觀

(一)人生觀の種々　人生觀とは、吾々が此の世の中を觀る見方をいふのであります。此世の中を樂しいと觀る人もあるし、苦しいと觀る人もあります。世の中を樂しいと觀る人は樂天觀を採つて居る人で、苦しいと觀る人は厭世觀を採つて居る人であります。華嚴瀑へ行く人は厭世觀を採つて居る人で

す。此頃は大分海濱が流行つて來た爲め、鎌倉だの江の島だのと云ふ所が盛んになり、華嚴瀑はよほど閑になつて、相模灘が繁昌するやうになりました。これは先年お穴さんが大繁昌を來しましたように、相模の海濱が厭世觀に好かれるやうになつたのであります。兎も角さう云ふ自殺をしたいと云ふやうな人は、世の中を厭はしい處であると觀るのです。かく世の中を愉快に觀たり厭はしく觀たりするのは何處から出て來るのでせうか。一體世の中と云ふ者は、樂しいものであるか苦しいものであるかといひますと、これはたゞ此の世の中を觀ても決して分るものではありません、たゞ自分の心一つのものであります。

見る人の心／＼にまかせおきて高嶺に澄める秋の夜の月

であつて、月は樂しくも苦しくもありません。月はたゞ高い嶺の上に澄んで居るばかりです。其月を樂しいと觀たり、苦しいと觀たりしますのは、全く吾々の心です。感情です。之と同じで、此世の中が厭だと想ふのは、自分に種々苦しい事が多いからですし、樂しいと思ふのは、自分に樂しい事が多いからです。世の中は實に御覽の通りの世の中で、所謂「柳は綠花は紅」であります。それを人の心に由つていろ／＼異つて見るのです。諸君はどちらが宜しいですか。若し苦んで生きて居るなら、寧ろ之を愉快の世の中にして、愉快に生活して行く方が宜いでせう。それが自然ではありませんか。若し不愉快なものならば、實に生きて居る甲斐はありません。併しながら世の中を餘りに惡い意味の樂

天的に觀じ、人の生きて居る間は尠いから何でもウンと酒でも飲んで樂しむがよい、一寸先は闇だ、と云つて漫りにデカダン振を發揮するのはいけません。さうすれば人は豚と同じ樣になります。佛敎では人に厭世觀を敎へ、世の中を厭がるやうにし「存外世の中は詰らぬものである。如何に花が綺麗であるといひ、如何に物が澤山あるといひ、如何に美味い物を喰べて愉快であると言うても、一寸息が絶えて了へば自分の身は燒かれて白骨となる。馬鹿に詰らぬものではないか」と云ふやうな無常觀を說きますが、併し佛敎の極意は、それで濟むのではありません。世の中と云ふものはさう云ふ事に執着せずに、煩惱卽菩提と云ふ處まで悟つて、此生滅の世の中に居つて自分が何時までも滅せぬと云ふ事を敎へて行くのが佛敎の眞意であります。それゆゑ佛敎の極意は、眞の意味の樂天敎であります。少くとも私の解して居る佛敎は確にさうで、決して厭世で終つて了ふものではありません。併し佛敎では前にも述べたやうに、人生の果敢ないことを說き、飛華落葉と云うて、人は直ぐに墓へでも這入つて了ふやうなことを言ひますから、たゞ〳〵厭世敎のやうに思はれるのです。一體人が佛になるのは死んでからではない、生きて居る間に佛に成らねばなりませぬ。佛に成つたからと云うて凝として寢て居る譯ではなく、世の中へ出て悲しいことは悲しみ、嬉しい事は悅び、苦しい事は苦しんで、自分の務を十分に盡すのであります。さう云ふ風に考へて見れば、此の世の中を別に苦しく觀ずとも濟みます。勿論苦しむ事もあるけれども、譯が解らぬで苦しんで居るのではありません。斯く人生觀は

全く感情から起る事でありますから、感情の修養と云ふ事は實に大切であります。

第七節　我が國民の缺點

(一)國民性の缺點と感情　國民の缺點と云ひましたら、英國民には英國民の缺點がありませう。支那人には支那人の缺點がありませう。けれども私が今お話しやうと云ふのは、日本人に澤山ある所の缺點であります。お互に善い處もあるが、又惡い處も澤山あります。私共一般に有つて居る處の心の働きでも、矯正して行きたい事が澤山あるのです。其惡い働きは何から來るかといひまするに、多くは感情の働きが當を得ぬから來るのです。

(二)一時的　是れは誰も言ふことであります。西洋人が、「日本に行つたら長く居つても一週間で歸れ。それ以上になつたら駄目だ」といふさうですが、成程左樣です。米國艦隊が來たとか、或はヘヂン博士が來たとか、タゴールの來遊、デゥヰー博士の來朝、アインシュタインの入京といふと、歡迎熱が起つて非常に歡迎します。各國の世界一週飛行家なども、到る所で歡迎したのです。併しあれが一月續いて御覽なさい、耐らぬ話です。コッホ博士などは初めは宜かつたが、歸るときにはもうコッホが何處に居たのか分らぬやうに歸つて了ひました。唯猫が鼠を捕るというた博士の名言を記憶えて居る位で、すつかり忘れて了ひました。何事でも左樣です。戰爭の時などでも、パッと一時的に激して來

るけれども、忽ち消えて了ひます。講義にしても、此會員諸君は熱心に續けてお出なさるが、どうも普通は初めの第一回は澤山人がやつて來ますが、二回目三回目になると非常に減つて了ひます。何でもものゝ續かぬと云ふことが日本人の惡い癖であります。何故かといふと、これは感情に走るからです。感情といふものはさう何時迄も續くものではありません。何時迄も泣いて居られるものでも無く、何時迄も嬉しがつて居られるものでもありません。いくら面白いと言うても、何時までもげら／＼笑つて居られるものではありませぬゆゑ、それで感情は一時的になり易いのです。日本人は感情の國民ですから、斯ういふ缺點が著しくあります。之は必ずしも惡いとばかりは言はれませんが、兎も角一つの缺點であります。

(三)不經濟　不經濟というても、唯金を浪りに費すといふことばかりではありません。經濟にもいろ／＼ありまして、勞力の經濟・時間の經濟・場所の經濟等いろ／＼です。何でも力を少く使つて能率を多くするといふ事が經濟であります。我國人には其考へが洵に少い。感情的ですから、面倒臭いからやつて了へといふ調子であります。江戸ッ子などは、宵越の金を持たぬのを名譽として居た程です。之が江戸ッ子の特色で、それには良い處もありますが、それより惡い處が多いのであります。又我國人は用談をする時でも、直ぐと用事を言へば濟むのに、下らぬ事をいつで暇をつぶすのです。例へば、肝腎の用事をいふ前に、何處に昨日子供が產まれたとか、何處へ嫁が來たとかいふやうな事を言つて、

其後で一體何しにお出になつたのですかといふやうな事をいはれて、それから初めて實は斯ういふ用事でといふやうな具合で、時間の經濟が出來ぬのです。それから又、後にも話しますが、一般に交際が複雜である爲めに、女などが他家へ行くのには、必ず手ぶらでは行きませぬ。女は必ずお土產を提げて行くといふ事が掟の樣になつて居ます。我國では細君携帶と謂ひますが、細君の方はお土產携帶であります。男は細君を携帶し、細君はお土產を携帶する。さうしてそのお土產は猫にまでも携帶して行かねばならぬといふやうな風で、時間の不經濟は勿論、金錢も不經濟であります。是れ亦感情から來る缺點であります。

(四)性急　我國人が大さう忙しく氣を焦慮るのは何故かといひますと、矢張り感情が强いからです。意思の强い人、又は智慧の多く働く人は、沈着いて居ますが、感情の人は、兎角狼狽へ易いものです。御覽なさい、汽車に乘る時でも、我國の群集は非常なものです。まだ時間の餘裕があるに拘はらず、お婆サンを押し除け、子供を突き飛ばすのも構はずに、何でも强い者が先といふやうになつて居ます。それですから、可愛想に、乳呑兒を背負つて居る者が大勢の中へ這入ると、子供の頭に他人の拳骨が當つて泣き出すやら、大騷動をして居ます。そんなに周章ぬでも、時間が來ねば汽車は發車せぬのですのに、それに先を爭ふのは、座席の少い爲もありませうが一は感情の爲めにセカ／＼して居るからです。故の坪井正五郎氏が西洋へ行きました時に、鞄へ鍵を掛けてそれをはづすことを忘れ、其鍵

を結び付けた儘で預けました。そこで向ふへ着いた時に友達が迎へに來て、之を見て、「此鞄には鍵が付いて居るではないか、何の爲めに鍵を掛けたのか分らぬではないか」と揄揶いました。そこで坪井氏は、苦し紛れに、「いやそれは鞄を開いても何も無いぞといふことを知らせる爲めだ」と辯解したさうですが、何にしてもポケットへ入れて置けば宜いのを、慌てゝ鞄へ付けて置いた失策は免れません。

何でもさういふ具合に、大變に慌てる事が日本人の惡い癖であります。

(五)不秩序　我國人は物事をするのに順序が立ちませぬ。何でも計畫して順序よくやるといふことが少くて、行り掛けてからいろ〳〵の事をするやうな事があります。お客が來て物を出す時でも、或は自分の家を片付けるのでも、仕事をするのでも、其時の感情でもつてヤッ付けるから、順序を立てる事が少いのです。例へば、婦人方が家庭の事をなさるのでも、日曜日には何ういふ事をする、月曜日には何ういふ事をするといふことは、西洋では大概家庭で定めてあります。そんな譯で、月曜日には何か日に干す物が在ればそれをするとか、水曜日には水に緣があるから洗ひ物をするとかいふやうな定めをして居る人もあります。かういふやうに定めて置くと、秩序があるから、物事をちやんと行ふことが出來ます。それは時折臨時のお客があつて破る事もありませうけれども、大體さういふ順序を取つて行くとよく出來ますが、我國にはさういふ考を有つて居る人は少く、何でも今日氣に向いたらかうしやうといつて何か行ひ、氣に向かぬと薩張りやりませぬ。こんなのは感情から來る事で、矢

張り我が國民の一つの缺點であります。

(六)早　老　田舍の人などは特に早老の傾があるやうです。都會の人はさうではなく、七十になつても八十になつても西洋人に負けずに働いて居る人もありますが、少し田舍へ行くと、四十位になると既に、「私は年が寄りましたから仕方がございませぬ。是れから子供にでもやらせます」と、四十位で老翁になつた積りで居ります。それから女は三十位に成ると、「もう私はお婆さんになりましたから」と、年寄の積りで引込思案になつて居ります。三十でお婆さんになるとすれば、七十八十の時は何と名を付けてよいでせう？　その樣に早く年寄つて何にもせぬといふ心も、感情から來るのであります。假令年が寄つても、元氣が有つて意志が强いと、種々な事を計畫して活動します。さういふ人は早く年が寄りませぬから、精が竭きるといふ事も少いのです。一體人は氣分が弱つて來ると自然に身體も弱つて來るのです。我國では四十を初老といひますが、こんなに早く年寄るといふことは、一は感情から來るのであります。

斯ういふやうな事實は、未だ擧げますと澤山ありますけれども、先づ今日は是丈けのことを擧げて置きますが、是等のことはよく各自の情を制して行かねばなりませぬ。不經濟の事でも、そんな不經濟な事をせず、前後を顧みずにやることを廢して、ちやんと計つて身分相應の事をするやうにし、又何事も秩序を整然と調へることが肝要であります。

第八節　感情教育

(一)感情教育の要旨　最後に感情教育に就いて一言いたしませう。今お話したやうに、感情といふものは眞に大切な働でありますが、それは如何に教育したら宜いかと申しますと、唯本を讀ませるとか學校に入學せしめるとかしても、そればかりでは足りませぬ。學校にやつて置けば、感情教育は自然出來るかと云ふと、決して左樣ではありません。矢張り感情は感情を以てのみ養へるのです。人に同情をさせやう、親切を盡させやう、美しい感情を有つた子供を作らうと思へば、親が美しい感情を以つて子供に臨んでやり、又先生も情の篤い趣味に富んだ道德の高い人に接近させて置くと、それらの感情から子供の感情も養へるのです。單に理屈のみでは感情は養へません。識らぬ間に自然とさういふ麗はしい情が出來て來るのです。ですから、假令學問はよく出來る子供であつても、人として冷かな者もあります。それは智の勝つてゐる人であります。元來知識は冷かなものであるからであります。

(二)感情教育の方法　感情の教育には、人に接せしめるのが一番宜いのですが、書物を讀ませることも大切です。情の教育の爲めの書物は、矢張り感情を言ひ現したものでなくてはなりません。文學の中には、それを讀むと、立派に人に思ひやりをし人を愛するやうな麗はしい情を養はしめるものがあります。或は又いろ／＼世態人情を知つて、斯う云ふ事では可けぬ、此時には斯うやつて情を制せね

ばならぬといふやうに、いろ／＼修養の助けになるものもあります。情育の第三には、成る丈け天然の美しい物や、音樂・繪畫などの藝術品に接しさせて、自然と麗はしい情を養うて行くやうにするがよいのです。人工の美は勿論、天然の景色でも、優美の山川を觀て居ると、自然に心も美しくなつて參ります。つまり感情の教育は、人格の高い人に接しさせること、善良の文學書を讀ませること、天然及び人工の美に接せしめること等で出來るのであります。學校で庭を美しくしたり、種々の裝飾をすることなどは、いづれも感情特に美育の上に助けとなることであります。

第十四章　意　志

第一節　意志の意義及び性質

(一)精神の三方面　一體人の心は唯一つのものであります。氣の多い人抔は心が澤山ある樣でありますが、實はさうでは無くて、詰り一つ心が色々に働くのです。「男心と秋の空」と言つて、男子の心は度々變るといふ例に引きますが、私の見る所では、女の心も隨分變る樣です。それにしましても、何も澤山心があるのでは無く、一つ心が色々に働くのであります。心は徹頭徹尾一つのものでありますけれども、其心が、色々に働く所から、其の働き方を分けて見ますと、智慧に屬するものと、心の調子卽ち苦樂が主になつて居るものと、夫れから今御話致します意志の働きとの三つになるのであります。此樣に三つに分ちましても無論、意志といふ別の心があるのではありません。又情とか智とかいふ別の心があるのでも無いのであります。たゞ一つの心の現はれ方に依つて、學問上から斯ういふ區別を立てるのであります。

(二)意志とは何か　それで意志はどういふ働きであるかといひますと、何時でも刺戟的性質を帶びて

居ります。刺戟的性質といふのは、何か運動を起させるやうな原動力をいふのであります。例へば、話を仕樣と思ふとか、或は仕事を仕樣と思ふとか、遊ばうと思ふとかいふやうに、その働きを働かせる心の作用が意志であります。又其反對に、今迄して居る事を止すこと、或は之れから行はうと思ふこと、イヤ〳〵不可ぬから止さうといふ風に未だ現はれぬ中に止めて仕舞ふことも、共に意志であります。道德の敎の中には忍耐の德がありますが、之は消極の意志作用であります。一體忍耐は男子よりも婦人の方が强いといふ事を昔から申しますが、是れは慥かに事實であるやうです。前に擧げた秋の空といふやうに心の變はることは、男女どちらが甚しいか分りませぬが、耐へる力は女の方が强いのです。世間では女は意志が强いと言ひますのは、つまりこの耐へる方の意志に就いていふのであります。かういふやうに、すべて、働きを現はすか、或は現はれて居る働きを止めるか、この二つは皆意志の作用であります。それですから、意志の範圍は誠に廣いのです。今斯うやつて私が話をして居るのも意志の働きであります。諸君が歩いて此處にお出になつたのも意志の働きであります。

(三)意志の性質　併し同じ動作をしても、意志と言はれぬ場合があります。例へば、夜中に寢惚けて戸惑をするとか、或は柱に頭を打ち付けて初めて痛いと云ふ事が分つたと云ふ樣なのは、全く意志なしにした動作に過ぎません。子供が生れた時に現はす運動や、大人でも夢中にする事などは、同じ刺戟的性質を持つて居て身體を働かしましても、夫れは意志の中には入らぬのであります。意志と云ふ

のは、ちやんと心に覺えがあり目的があつて行ふ事を云ふのであります。心に覺えがあつてちやんと考へてする行は、突然に現はれるものではなく、初めの間は無茶苦茶に手を動かし足を動かし、何の心も無しにして居る事が、段々進歩して、眞に決心をして事を行ふやうに進んで、來るのであります。其次第は之れから段々御話致して參りますが、今迄御話した所で略ぼ意志の性質と云ふ事は御分りになつたらうと思ひます。即ち概括していひますと、刺戟的のものであると云ふ事になるのであります。

(四)意と智との關係　次ぎに進んで、意志と他の精神作用との關係に就いて御話致します。今申しましたやうに、心の働きは大體分けて三つあるのでありますが、他の働きと意志とは皆密接な關係を持つて居ります。そこで意志が働くに就いては、第一に先づ知らねばなりませぬ。併し唯知つたのみでは足りません。夫れに情が加はらねば動作は起りませぬ。それですから、意志を働かさうと云ふ時には、何時でも知も働き情も働いて、それから行が段々出來て來るのであります。全體意志は精神作用中でも、殊に大事な作用です。「人は量見一つである」とか、「男は量見に依つてどうでもなる」とか言ひますが、此量見と云ふのは、多くは決心を指すので、詰り意志が堅くなつてサアこれから行ふと云ふ決心のついた處を言ふのであります。例へて申しますと、何か事をするには、どうも知らなければ出來ません。何處か餘所へ行くと言つても、まるで知らなくては行けませんから、前以て先づ知る必要があります。併し何處の橋を渡つて右へ行くとか左へ行くとか云ふ事を知つて居つた丈けでは不充

分です。寒いのに只そこへ行きはしませぬ。何か用があつて、そこへ往つて何某に逢つて話をすると利益があるとか、或は面白い事があるとかいふ場合、例へば、若い人であれば細君でも貰はうと云ふ時に、緣女がそこに居ると、夫れでは見に行かうと云ふやうに、感情を動かして來て、然る後實際に行動が起つて來るのであります。

それですから、初には知り、次に夫れに情が加はり、其次に愈々手足を動かして行をすると云ふ事になるのです。すべて人の行をする次第順序はかう云ふものであります。人を使ふにも、たゞ理屈を敎へるだけでは人は動きません。理屈はよく承知して居りましても、人はナカ〳〵動かぬものです。然るに實行しやうと云ふ心が起るのは、情が加つて來るからであります。子供が親の爲めに寒い想ひでも堪へて事をするといふのは、御父樣や御母樣がア、云ふやうに困つてお出なさるから寒いけれども自分が之をして喜ばせて上げやう、と云ふ精神が起つて寒氣をも恐れずに仕事をするやうになるのであります。

(五)意志と所爲　以上に述べましたやうに、意志は、行に現はれる心の働きとして一番終のものでありまして、意志が極まると、後は直ぐに手が動くか足が動くか口が動くか、必ず行に現はれて來る所から、道德・宗敎其外人の行ふ事柄は、商賣でも農業工業でも皆、意志と密接の關係を持つて居るのです。

心の働きはどれも修養上必要で無いものはないけれども、一番直接に大事なのは意志を養ふと云ふ事であります。卽ち意志は堅くせねばならぬのであります。併しながら文字を知らずに聞いて居ますと、とんだ間違が起ります。或學校で校長先生が女の生徒を集めて、「どうも女は意志が弱くていけぬから、意志を堅くせねばなりません」と敎へました。さうしたら生徒等は、「校長先生は石を堅くしろ石を堅くしろと言はれましたが、石は初めから堅いものですが、どうして堅くするのでせう。何か藥でもかけたら堅くなるのでせうか」と、眞面目に話し合つたと云ふ事であります。是れは心理學を知らずに唯イシと聞いたから、其處らに轉がつて居る石のやうに思ひ違へたのでありますが、心の意志は仲々藥をかけても堅くはなりませぬ。矢張り自分の修養が大事であります。此事はまた後にお話しいたしませう。

第二節　意志の發達

(一)意志發達の三段階　それから次に意志の發達階段のお話を致します。同じ刺戟的の心の働きにも次第順序がありまして、前に御話したやうに、初めは極く簡單な無茶苦茶な運動から、段々進んで、思慮を費し立派な行ひをして來るやうになるのであります。それには衝動・欲望・意志（狹義）の三階段がありますが、今順次に御話を致しますと、諸君も成程自分達にもさう云ふ事があつた、家の子供

にも現にさう云ふ事が現らはれて居ると云ふやうに、必ず思ひ當られることでありませう。

(二)衝　動　衝動と云ふのはどう云ふ事であるかと申しますると、自分に、斯う云ふ事を仕樣ア、云ふ事はすまい、と云ふ決心を持つて運動を起すのではありません。子供は生れたてから身體の機關が整然と出來あがつて居りまして、勢力が身體の中に滿ち切つて居りますから、少しも靜かにして居る事が出來ぬのです。寢て居る間丈はいくらか靜にして居りますけれども、起きて居る間は健康な子供なら、始終手を動かし足を動かし、肩を聳かしたり口を歪めたりして居ます。段々其子供が大きくなつて來て、方々を見廻すやうになつて來るとか、或は坐る事が出來るやうになるとか、又は少し進んで匍ふ事が出來るやうになりますと、更に運動が進んでちつともジッとして居る事はありません。かういふのが衝動の一番始めの表現なのです。かやうな亂離な作用から人の立派な行ひが生れて來るのであります。吾々は今日自由自在に言葉を使つて話しますが、此の言葉は何處から出て來るかといひますと、赤ン坊の時にオギャア〳〵と言つて居つた無茶苦茶の表出がだん〳〵練習されて今日のやうになつて來たのであります。それですから、赤ン坊の時に泣くことが出來ぬと、啞になつて仕舞ひます。

(三)子供と大人　子供の時には衝動作用が多く、夫れから大人になるに從つて段々とそれが減つて來ます。併し後迄殘つて居るのが隨分あります。夫れはどう云ふ場合であるかと申しますと、理窟を考

へて居つたり或は是れは善いか惡いかと云ふやうな事を考へて居る暇がなく、何か急に強い刺激が起るやうな場合には、丁度嬰兒が無茶苦茶の運動をするやうな衝動作用が出て來ます。例へば、御腹が空いてたまらず、死ぬか生るかと云ふやうな場合には、之を食べたら腸に惡いであらうか、是れを飲んだら胃に惡いであらうか、といふやうな事を考へて居る暇はありません。何でも手當り次第に、飲むものであつたら飲み、喰べるものであつたら喰べます。斯う云ふのが衝動の働きであります。それですから、饑ゑるとか或は凍えるとか或は睡くなつてたまらぬとか云ふやうな場合には、贅澤を言つて居る暇はないので、自然に運動が出て來るのであります。是等は何れも衝動の働きであります。衝動にも色々の種類がありますから、夫れは後にお話する事に致しませう。

(四)慾　望　次には欲望と云ふ段階になつて來ます。衝動と云ふのは今御話したやうに、何の目當も無く、無茶苦茶に手を動かし足を動かし、泣いたり笑つたり、夫れから又物を捉へたり發音したりしますが、而も斯う云ふ物が欲しいとかアゝいふ物は嫌いだとか云ふ考へは無いのです。所が欲望となると、ちやんと目的があります。同じ食物でも餘り飢ゑて居る時には、何が喰べたいと云ふ贅澤を言つては居られませぬから、食物でさへあれば何でも手當り次第に平げて仕舞ふでせう。併し少し御腹が張つて來ますと、もう贅澤を言ひ出して、或は何處の蕎麥が食べたいとか、何屋の餅なら少し食べても宜いとか云ふ樣になります。斯く衝動作用の時には、殆んど目的が明かでありませんが、欲望と

なると、その目的が、ちやんと明かに出來て來ます。夫れで吾々凡夫の持つて居る煩惱として、主として働くのは欲望であります。欲望は、元來大事なものでありますけれども、又いろ／＼と人を害することがありますから、昔の聖人が之を制することを教へられたのであります。その事は欲望の話の所に至りまして別に御話致しますが、兎に角欲望となると、目的の考へがチヤンと出來て來るのであります。

(五)意志の本質　夫れから又次に進んで來ますと、初めて眞の意志作用が現はれます。夫れを學問上でいふと、意志の本質と言ふのであります。夫れはどういふ事かといひますと、意志には無論目的があります。チヤンと斯ういふものが欲しい、或は斯ういふ事をするといふ目的があります。目的がある上に、夫れを得る所の手段があるのです。眞に心掛の善い修養の積んだ大人が事を行つて行くのには、何時でも意志の本質が働いて、先づ自分は商業を仕樣とか、工業を始め樣とかいふ事を極めると、夫れを行ふに就ての手段は斯うするといふ事がすつかり之に伴うのであります。

(六)青年と老人　たゞ金儲を仕樣とか、何處へ行かうとか、あそこへ行つたらばどうか成るだらうとか考へて、手段を考へずに事をするのは、所謂若氣の至りでありまして、青年が色々過ちをするのは、之が爲めであります。つまり欲望に馳せて、目的こそあれ手段が無いのです。所が意志の方にはチヤンと目的があり手段があります。衝動にも欲望にも手段の考は少しも無いのです。卽ちどうやつて行

ひをして行くかといふ考が無いのです。然るに心が意志の本質の階級まで進んで來ますと、眞に手段を考へて事をするやうになつて來るのであります。若い者は元氣好くして思い切つた事をします。これにもなか〳〵好い點もありますが、又若い者が多く失敗をするのは、矢張り、欲望を直ぐ行動に現はして手段を考へずに行ふといふ點にあるのです。それですから、之によく注意するやうにする事が大事であります。老人の長所は、何でもチャンと考へてする點にあるのです。すべて老人は所謂石橋を叩いて渡るといふ風に、スッカリ手段が極まらなければ事をしませぬ。此次にはかうなる、かうやつたらばかうなるといふ事を考へた上でしますから、過が少いのです。それですから、老人はなか〳〵若い者のやうにオイソレと言つて直ぐに事を行ひませぬ故、動もすると因循姑息といはれるのです。其代りにやり出したら間違ひが少いのであります。かく老人は滅多に思ひ切つた事が出來ませんゆゑ、偉い事を仕出すことも少いのであります。すべて今までと變つた新奇な改革は、皆青年の仕出す事であります。以上の理由に由り、老人と若い者とは一致し惡いものでありますゆゑ、其間に位する人がよく折衷して、兩方の事を取り合せてやつて行くやうにせねばなりません。

(七)青年男女の墮落する徑路　若い者が東京に出て來るのは、詰り地方で新聞や雜誌抔を讀んで、東京へ行けば何をしても生活が出來、勉強が出來るやうに思つて、僅かに旅費を持つて親が許さぬのに出て來まして、突然同國の人か何か知つた人の所へ尋ねて往き、どうかして呉れと言つて賴むのです。

併し東京にもそんなに旨い口が幾らもあるものではありません。偶々旨く世話して呉れる人があつて、學僕になるとか、其の他の勞働をして勉強が出來るとか、或は學資を出して呉れる人があるといふやうな場合に出逢へば宜いのですけれども、さうでない時は、まことに憐れなものです。折角來たのに、今更おめ〳〵國へも歸られず、仕方がないから何でもせねばならぬといふので、車を挽くとか或は苦學生の仲間に入るとかして、初めはどうなりして居りますけれども、段々墮落して、遂には本物の車挽きとなり、本物の新聞賣となつて仕舞ふ者が少くありません。婦人には殊に此頃さういふ者が多くあります。詰り新聞や雜誌を讀んで、漫りに都會に憧れ、上京したく思ひましても親が許さぬと、隱れて飛び出して來るやうになるのです。所が婦人は誘惑が多いから、男子よりも餘程危險です。他人が色々親切に勞はり、自分が十分世話してやると言うと、前後の思慮なく之に騙されて、遂に身を誤るといふやうなのは隨分澤山あります。是等は東京に行きたいといふ目的計りであつて、其欲望に騙られて、どうして往きどうして生活するといふ手段を考へざるの過ちであります。地方に在つて青年の娘を持つ親などは、かういふ事は大に氣を付けねばならぬ事であります。茲に欲望に騙られて前後を顧みずに東京に出て來て、惡人に騙されて生涯を過るやうになつた或女性の實例がありますから、一寸御參考に御話して置きませう。

(八)女性墮落の實例　此女性は或縣の女子師範學校を卒業した立派な教育のある人ですが、夫れが國

に居つた時から私の書物抔を讀んで居つたので、東京へ來ると私の家を訪ねて來ました。私はその婦人からいろ〳〵と其の志望を聞いて、感心な者だと思つて居ますと、やがて或名高い學校に這入つて勉强して居りました。初から充分學資は無いけれども、どうかなるだらうと言つて出て來たのでありまして、或る下宿から通學しました。其中に文部省の檢定試驗を受けて、教育科の免狀を貰ひました。所がその前から自分の所へ女の名で始終婦女新聞を贈つて呉れる親切な人があります。自分がかうやつて困つて居る所を察して贈つて呉れるのであらうと思つて、其雜誌を見る度に感謝して居りました。併し何處に居ると云ふ事は書いて無いから、婦女新聞に投書して、私に親切に此新聞を贈つて下さる御方は何處に居らつしやるか知らせて戴きたいと言つて出しました。さうしたら、或る時其の人の方から知らせて來ました。番地が分つたものですから、例の婦人は早速其下宿屋に尋ねて行きました。下宿屋では、「お名前は違ひますが、御苗字が同じですから其お方かも知れません。伺つて見ませう」といひます。町名番地は確かに此處に違ひ無いが、併し名が違ふと言へばさうではないのかと思つて、「そのお方は矢張御婦人ですか」と問ひました。所が「御男子です」といふものですから、是は變だと思ひましたけれども、そのお方に違ひないと云ひますから、チョッと會つて聞いて見樣と思つて面會しました所が、實は私が贈つたのであつたといふことでした。そこで禮を言つて歸らうとしますと、頻りに止めるのです。「私は貴方と同國で、貴方が大さう苦心して御勉强なさると云ふ事を聞いて居りまし

たから、御氣の毒に思つて贈つてあげたのであります。決して惡意でしたことでは無いから、どうか惡く思はないで下さい」と言ひ譯し、その外いろ〳〵と餘り親切に言はれますので、つい其情にほだされて、色々話をして居ましたが、一寸側を見ると、大學の制帽制服が掛けてあります。さうしてその男は、自分は法科の學生であるといひました。その日はそれで別れましたが、その後男の方から頻りに尋ねて來て、いろいろと親切のことを言つたり仕たりしました爲めに、遂にもろくも騙されて仕舞つて、未來は自分の夫にしてもと云ふ考へから、遂に其人と夫婦のやうになつて仕舞ひました。さうして居る間にその女は姙娠しましたが、段々聞いて見ると、男は法科の學生ではなく、全く其婦人を騙す爲めに嘘を言ひ手段を設けて引掛けたのであることが分りました。可哀想に其婦人は、學校は退學され、免狀は沒收されて仕舞ひました。今はどうなりましたか其消息も分りませぬ。此人は實に大人しい婦人で、よく勉强して學問も出來たのでありますから、思慮もありさうなものでありますけれども、矢張り注意が足らず、唯自分の目前の欲望にばかり騙られて、深い考へを持つて居りませんから、うつかり人の情に乘せられて仕舞つたに相違無いと思ひます。それですから、若い者で經驗の無いものが、自分の一存に事をやると云ふことは頗る危險です。さう云ふ場合がありましたら、必ず親に相談するか、先生若しくは先輩に尋ねて見るとか總てよく探つて、親が許した後でなければ交際抔をしてはなりませぬ。さう云ふ事は意志がしつかりせぬ爲めに出來て來るのです。其婦人は忍耐とい

ふ方の意志はしつかりして居たのですが、智慧を働かして種々の點から判斷して、これは善い人であるか、惡い人であるかと云ふ事を見分けることが足りなかつた爲めに、此の樣な運命になつたのです。此點は殊に氣を付けねばならぬことであります。

第三節　衝動及び本能

(一)自　動　次には今御話した中の一つ〳〵に就いて、もう少し詳しく說明をして參ります。先づ第一には、衝動と云ふ事を分けて御話致しませう。衝動の中には、自動・反射・本能等の三作用があります。自動と云ふのは、一番初めに說明しましたやうに、外から見るのでもなく聞くのでもなく、自然と自分の身體の中にある勢力から、ジッとして居る事が出來ずして動き出す働きであります。是れは子供に澤山あると云ふ事を御話しましたが、併し大人にもあります。段々年が寄ると自動作用は少くなつて來ますが、まだ血氣盛んな時は、春の天氣がうらゝかで花もチラホラと咲き掛け、而も今朝は非常に氣分も快く、又其日は休日であると云ふやうな場合には、もうじつとして居られなくなりまして、何となしにもじ〳〵して落着かず、自然と內部から刺激して來て動かざるを得ぬと云ふやうになつて來るものです。さう云ふのは矢張り自動作用であります。犬でもさうです。まだ仔犬で元氣の好い時には始終動いて居ますが、段々年を取つて來ると運動も鈍くなつて來ます。これもつまり體力が滿ち

て居るのと、段々減つて來るのとの違ひであります。以上のやうなのが自動的衝動作用であります。

(二)反　射　其次は反射であります。反射と云ふのは今のとは違つて、何か目に觸れるとか、耳に觸れるとか、皮膚に觸れるとかすると、直ぐに動き出すのであります。例へば、額に蚊が止つたりしますと、寢て居ても知らずにそこへ手をやります。又夏など晝寢をして居る時、足の裏を紙縒でこすりますと、反射運動を起します。……併し何もさう云ふ事をおやりなさいとお勸めする譯ではありません。私に敎はつたからやると云ふ事になつては困りますが、……兎に角こすると、必ず寢て居る人がヒョッと足を引いて蹴ます。酷くやれば目を醒しますけれども、一度や二度では醒めません。かく反射運動を起すのは何故かと云ふと、足の裏を突つきますと、其爲めに脊骨の中の脊髓へ影響します。一體脊骨の中には脊髓があります。これは諸君が魚を召上がる時、大きな魚の輪切にしたのを御覽なさると、脊骨の中に柔らかい所があります。それが卽ち脊髓であります。卽ち刺激が脊髓に傳はると、之から起る神經力で、足の筋肉や手の筋肉を動かすのであります。さう云ふのは、皆反射作用であります、夫れが强くなると、所謂意識が起るので目が醒めて、自分が知つて居つて反射作用をやる事があります。例へば、誰でも嚏をする時にハクショイと云ふのは、矢張り一種の反射作用であります。又瞬をするのも反射作用であるし、歩き出してから脚をかはすのも反射作用であります。寺の小僧の讀經

も殆ど之に近いのでありまして、頭の奥底に觸れませぬから何を言つて居るか分らず、唯ナムキヤラタンノウトラヤーノ〳〵などと言つて居るのでありまして、あれは矢張反射作用で出て來るのでせう。併し和尙樣のは之と違ひ、チヤンと意味が分つて居るのですから、諸君が御經を讀んで御貰ひになつても何にも譯の分らぬ小僧が夢中で讀むのよりは、老僧が落着いて讀んで下さるのが有難くお感じになるでせう。意味が分つて讀むのと、分らずに讀むのとは、大變違ひます。さう云ふ工合に、言葉を出すのでも、自分には夢中で自然に出て來るのは反射作用でありまして、これはつまり外からの刺激に應じて出て來るのであります。

(三)本　能　其次ぎは本能であります。本能の働きは昔より、動物に多くあつて人には尠いと思はれて居ましたが、よく調べて見ますと、人の方が動物よりも却つて多い位澤山に本能があります。これは少しも敎へず、又少しも經驗せずして、生れながら自然に行ふ色々の行動でありまして、この自然の行動が丁度自分の身を護つて行くに都合が宜いやうに具はつて居るのであります。

(四)本能の種類　本能は色々ありますけれども、大きく分けて見ますと、自分の身を護る爲めのもの、夫れから自分の身を養つて食物抔を取る爲めのもの、祖先の血統を段々殘して行く爲めのものと、大體此三つにする事が出來ます。是れは敎へるのでもなければ、一々考へてするのでもありません。何れも自然に行はれるのであります。

(五)自護本能　自護本能とはどう云ふ働かと云ひますと、何か恐いものが來ると遁げる、人が自分を攻擊して來ると怒ると云ふの類で、是れは別に誰が來たから怒れとか、何が來たから遁げろとか言つて、他人から敎へられて動くのではありません。自然とさう云ふ本能が吾々の心に具はつて働きをするのです。それですから、自護本能は大體分けると、退いて避ける方と、進んで攻擊して行く方と二つあります。是れを子供に就いて觀察しましても、怒る事と恐れる事とが、早く現はれます。

(六)恐　怖　恐れるのは本能ですけれども、よく注意せぬと非常に子供を害する虞があります。婦人が子供を育てる時に、子供が言ふ事を聞きませぬと、ソラお巡査さんが來るぞといつて嚇することがあります。巡査は別に鬼でも蛇でも無いのに、さう云ふと子供は畏はがります。それから又化物が來ると言ふと、子供は大そう恐れて泣き止めます。さうするとお母さんは巧い事をしたと思つて頻りに威嚇を應用します。これは甚だ善くない事で、夫れが爲めに子供の弱い心を刺激することは、大いに戒しむべきことであります。子供は恐怖の爲めに氣絕し痙攣することがあります。恐怖は本能ですから、自然に任して置いてもやゝもすれば濫りに起る傾向がありますから、これを適當に矯正してゆかねばならぬのに、態々親がさう云ふ風にしてそれを生起させると云ふのは、大變な間違です。

(七)營養本能　子供は生れながらにして乳を飲む事を知つて居ります。これは一の本能です。若し乳を飲む事を一々敎へねばならぬものでありましたならば、實に厄介であります。どうして敎へたら宜

いか殆んど困るでせう。生れたての子供でも、少し乳首を口の所へ當てゝ唇を刺激すると、直ぐに反射作用で兩唇を開き乳をその間に入れ巧みに舌を乳首に喰つ付けて、口の中に眞空を拵へます。子供は眞空など云ふことは知りませぬが、兎に角さう云ふ所を巧に拵へるのです。吾々大人が、乳を吸つても到底子供が吸ふやうに巧には吸へません。子供の舌は乳を吸ひ出すに都合がよくなつて居ります。ですから、乳首を當てると直きに吸ひ付いて飲むやうになるのです。白痴の子供や、弱い子供や、早く生れた子供には、乳がよく吸へないで、大さう困る事があります。このやうに、本能でも悧巧な子や丈夫な子には早くから現はれるし、馬鹿な子や弱い子には大きくなつても現はれぬのです。白痴の中には二十一二の娘盛りでありながら、物を食べる事も知らぬものがあります。言葉もアーとか、バーとか、一歳の子供が言ふ位な事より外に言へぬ者があります。斯ういふものには、一々ポムプで食物を口に注ぎ込んでやらなくてはなりませぬ。それですから本能が現はれなかつたら實に困るのです。所が營養に屬する本能が自然にありますから、段々夫れを導き養つて行く事が出來るのであります。

(八)生殖本能　夫れから生殖の本能は男女の慾でありまして、これは飲食の慾に次いで強いものであります。生殖の慾と言へば、昔から人を惑はすものとしてありますけれども、是れは何人も持つて居る本能であります。唯その發動の形式を誤ると己を害し人を害し社會を害する虞があります故警めねばならぬのです。又この本能は前二者と違ひまして、一定の年齢が來なければ發達して參りません。

餘り早く發達するのは病氣ですから、特に注意せねばなりません。

(九)兒童の本能　夫れで以上に擧げたやうに、敎へずして自然と目的に適ふやうに働きが出て來るのを皆本能といふのでありますが、夫れはよく子供を調べて居りますとちやんと時代に應じて發現して來るのが分ります。此事は今詳しい御話をして居ることは出來ませぬけれど、三歳位の子供には、その頃に特有の本能が現はれ、十歳位の子供には又其頃に特有の本能が現はれます。例へば、子供が亂暴をしたり遊びたがつたりするのも本能であります。十歳前後にはさういふ事が現はれるものであります。又窃盗の本能があります。善く無い本能でありますけれども、自然に存して居りまして、五つ六つ位から現はれることがあります。其現はれた時に、親がよく氣を付けてその事の非常に惡いといふ事を敎へてやつて、要る物があれば買つてやるとか、或は無くてならぬものならば何でもやるから、さういふ事をしては惡いと言つて、初めて本能が萠した時に適當に之を導いてやらねばなりません。其注意が間違つたり、或は甘やかして子供のねだるが儘に與へるといふと、それが習慣になつて、我儘になります。色慾に關する本能は、大概十四五になると現はれますから、其場合によく氣を付けて居らぬと、現はれ方が間違つて、その爲めに惡い者になる事があります。すべて是等の本能の現はれ方は、別に御話せねばならぬのでありますが、今は略します。何しろ人は年齢の進むと共にその時代〳〵にいろ〳〵の心が現はれるものです。年寄になつても、或る心が盛んに現はれる場合と、或は之

が衰へる場合とがあります。

(十)感情的衝動　次ぎに感情から來る衝動の話をいたしませう。是れは最も多く倫理道德に關係があります。倫理學の上で衝動と言ひまして、人の品性を穢すのは此の衝動作用に基く事が多いのであります。夫れは人が大さう怒つて來ますと、餘程ます時には、何時でも感情から來る衝動の事を言ふのです。偉い人でないと前後を忘れて夢中になつて酷い事をするやうになります。さうして後で落ち着いて考へて見ると、「何故あんな亂暴な事をしたらう」と後悔し、或は又立腹のあまりそこに出て居るものを打ち毀した場合に、後で落ち着いて考へて、「ア、惜しい事をした、復拾圓出さねば買へぬ」といふやうな事にもなるのです。かやうに情に激した時には、損も得もなく、無茶苦茶になつてしまふものですが、之が衝動でありまして、全く前後を考へずに行動するのです。拾圓奢つてやらうと言つて叩く譯でもなく、五圓損しても宜いから之れを打毀してやらうといつて毀す譯でもなく、全く夢中でするので、詰り感情から來るのであります。又怒る事ばかりでなく、喜んだ時にも同じであります。昔の人は「怒る時の言は多く禮を失ひ、喜ぶ時の言は多く信を失ふ」と言ひました。腹の立つて居る時には、親に向つて又向つたり、惡口雜言したりしますが、かういふ事は總て情が強くなつて來ると現はれて來ます。これが即ち怒る時の言は禮を失ふのです。それから又其反對に、喜ぶと「ウム／＼夫れも好し、之も宜し、あれも買うてやる、其れも叶へてやる」と言ひますから、對手は大さう今日は御

機嫌が好い、宜い鹽梅であるわいと思つて居ると、明日になつていよ／＼實行の段になると、さう云ふ事を言うたかしらんどうも言うた覺えが無い、さう云ふ事は出來ぬと拒みます。固より本當の意志で言うたのではなく、衝動的に小僧が御經を讀むと同じやうな工合に來たのですから、斯う云ふ約束はどうも當てにならず、終に信を失つて仕舞ふ事になるのであります。

(十一)衝動と道德上の責任　夫れで倫理道德上ではさう云ふ風に怒つて我を忘れてした事とか、喜んで我を忘れて言つたとか、或は恐れた餘り覺えず言つたとか、すべて感情に激して發した言行には、善惡の判斷を下さぬのです。夫れは恰度犬が吠え附いたり、或は水に落ちた子供を飛び込んで咬へて來たのと同じ事で、特に人の行爲としての道德的値打を認めぬのです。それですから泥醉者が無茶苦茶な事を言つても默つて居ると云ふのは、其行ひを善いとも惡いとも判斷せぬからです。夫れでは酒に醉つて何をしても宜いかと云ふと、夫れは無論惡いですが、其行ひは道德の上で判斷すべきものでないから、論外に置くのです。勿論さういふ場合には、其人の人としての値打が減少して來ます。人がさう云ふやうに前後を忘れて腹を立て、或は酒に醉つて我を忘れて無謀な事をすると云ふのは、其人の平常の品性が宜くないからで、つまり人格を下げる譯です。酒の上で前後不覺にした事ですから、何卒御勘辨を願ひますと言へば、犬が吠えたり、瓦が落ちて來て頭に當つたのと同じ事で、敢て咎めるには足りませぬけれども、さういふやうに前後を忘れて酒を飲むといふ事がいけぬのでありま

す。かく強い感情から急激に起つて來る言行は、欲望ともならぬし、無論意志ともなりませぬ。全く衝動的のものでありまして、赤ん坊が無茶苦茶に手を動かすのと同じ事であります。酒醉ひは恰度子供の樣になつて、大人の心を失ひ、無茶苦茶に喜んだり、怒つたりします。「醉うてくだを卷けば尙ほ可愛い」と謠ひますが、實際はどうですか。何れにしても、大人の性質を失つて子供のやうになつて仕舞ひますから、可愛くもなるのでせう。併し可愛がられやうと思うて、あまり酒を飲んでもいけませぬが、兎に角醉うたらば精神の亂れ易いものとして注意するが必要です。要するに、衝動作用は未だ人の眞實の行爲とはならぬのです。私は車に乘つて駈けて行く所へ、小さな子供が前へ出るやうな時には、アッと言つて手と足とを自然と動かすことが屢あります。動かしても何にもなりませぬが、其瞬間に自然と斯うなるのです。衝動作用は自然の働きであつて、別に思慮を經てするのではありませぬから、人の眞實の行爲ではありませぬけども、段々變つて眞實の行爲に支配されるやうになるのであります。

第四節　欲　望

(一)欲望の種類　次に欲望の働きに就いてお話し致しませう。欲望には大體から言ひますと身體から出て來るものと、夫れから身體に關係はして居りますけれども主として心の働きから出て來るものと、

二つに分ける事が出來ます。

(二)體　欲　身體から來る欲を體欲と言ひます。此體欲は又二つに分ける事が出來ます。夫れは普通の體欲と特殊の體欲とであります。普通の體欲といふのは、誰でも人として生れた以上は必ず持つて居る欲であります。

(三)食　欲　前に述べました衝動の働きは、何と指定することなく、唯飲みたいとか喰べたいとかいふ强い刺戟でありますが、斯ういふ物が喰べたい斯ういふ物が飲みたいといふ望が起つて來ますと、既に欲望となつたのです。諸君は餓ゑて何でも宜いから喰べたいと云ふやうな事は滅多にありますまい。併し何處の鰻の蒲燒が喰べたいとか、何處の正宗が飲みたいとか、何處の菓子が欲しいとかいふことは常に起るでせう。是等を飲食の欲と云ふのです。唯何んでも喰べれば宜いと云ふのは、之れは欲ではなく、衝動でありまして、つまり欲の基礎となるのです。

(四)性欲・休息欲及び勞働欲　其次は男女の欲で、是れ亦何人にもある强い欲です。夫れから休息の欲があります。すべて一定の疲れを覺えると休みたいとは、誰でも感ずることです。其他勞働の欲と云ふのがあります。是れはチョッと可笑しいやうです。若し人に働きたいと云ふ欲があるならば、サボタージュなど無ささうなものであるといふ人もあるでせうが、さうではありません。人は勞働を絶つて仕舞ふ事は出來ません。車屋が稼いで始終車を曳いて歩く、或は商賣人が商賣の爲めに働く、さ

う云ふのばかりが勞働と云ふのではありません。すべて何事でも運動して一定の結果を得やうとするのは皆勞働です。そこで人は手も使はず、足も使はず、ジッとして居るといふことは到底永續しません。休息の欲の續く間は宜いですが、夫れが過ぎると段々何かしたくなります。卽ち退屈して來ますと。「小人閑居して不善を爲す」と云ふやうな譯で、何か爲たくなるものです。かやうに、何か働きたいといふ欲望を勞働欲といふのです。すべて小人は閑があつても、學者や宗教家や偉い人のやうに、書物を讀んで樂むとか、人の爲に仕事をするとか云ふ樣な考が起つて來ずに、何か惡い事をするやうになるのであります。普通の人は始終働いて居るから、勞働欲を感ずることが尠なく、寧ろ休息の欲が多く起るのです。私もさうです。私は殆ど勞働の欲などと云ふ事は今迄深く經驗した事はありませんが、次のやうな事があつて、つく〳〵勞働欲を經驗しました。夫れは先年窒扶斯を煩つて、七十五日病院で寢て居りました。恰度人の噂が無くなる頃迄永びきましたが、全快前にはジットして居るのがたまらぬやうになりまして何かして見たいと云ふ望や、或は本が讀みたいと云ふ心が強く起つて來ました、ところが讀んではいけぬと止められます。字を書かうと思ふと夫れもいけぬと禁ぜられます。人が見舞ひに來て呉れたから愉快に話をしやうと思ふと、話してはいけぬと制せられ、殆んど何にも出來ない事でありました。實にこの位苦しく感じた事はありません。夫れで初めて働らくと云ふ事の貴いことを痛切に感じました。かういふ經驗をせぬ時には、何かするのを大儀と思ひましたが、禁せ

られて見ると働くと云ふ事ほど有難いことはありません。この心が永く續けば、眞の進歩が出來るのであると云ふ事を深く感じました。神佛の御蔭で、日々健全に自分の思ふやうに働く事が出來るのは、實に有難いことです。健康の場合には何とも思はぬ人が多いのでありますけれども、好く考へて見ますと、實に有難い譯です。人は此有難いと云ふ心を保存するのが修養上大事なことであります。要するに人に勞働欲の存する事は、以上の經驗話でも明にお分りでせう。

(五)睡眠欲　もう一つは睡眠欲です。是れは今から數時間の後には諸君にも必ず出て來ませう。此の欲は一體衝動的でありまして、これの強い時には、何處でも宜い何樣な狹い所穢い所でも宜いから寢たいといふ樣になります。三等の通し汽車で神戸などから來る人はさうでありませう。平常ならばこんな堅い所でこんな穢い所では寢られぬと言つて小言を言ふ所ですが、汽車に乘つた時には、下に疊が、敷いて無くても何でも構はず、少しでも場席があれば横になつて寢たいでせう。ア、云ふのは睡眠の衝動であります。所が欲望となると、絹布の夜具に寢て見たいとか、柔らかな毛枕をして寢て見たいとか云ふやうに、色々な目的物が出て參りませう。さう云ふやうなのは卽ち睡眠の欲望であります。

一體人を惑はすもの、卽ち人を巧みに喜ばせて惡い方に引き入れるものは、欲望であります。いろ〳〵の欲望は恰度罠のやうなもので、人は之にかゝつて頸を締められるのです。それはあまり偏つて